

SEIJU 成 寿 卷 18

春考号

1992



三善流

横次善光寺
ZENKOJI YOKOCHI

はな

まごじ いろづるわじく

あでやかに咲く花に

香かおりなきがごとく

善く説かれたる語も

身に行わざれば

その果実このみなかるべし

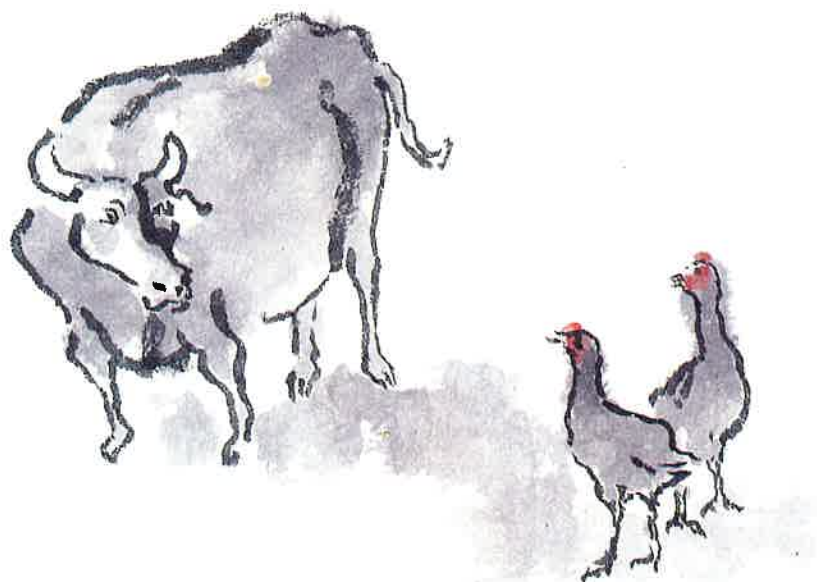
〈法句経〉

森 新

SEIJU

第 18 卷

1992 春号



袈裟 捧呈の旅

平成3年7月29日～8月1日

▼箱書き・中

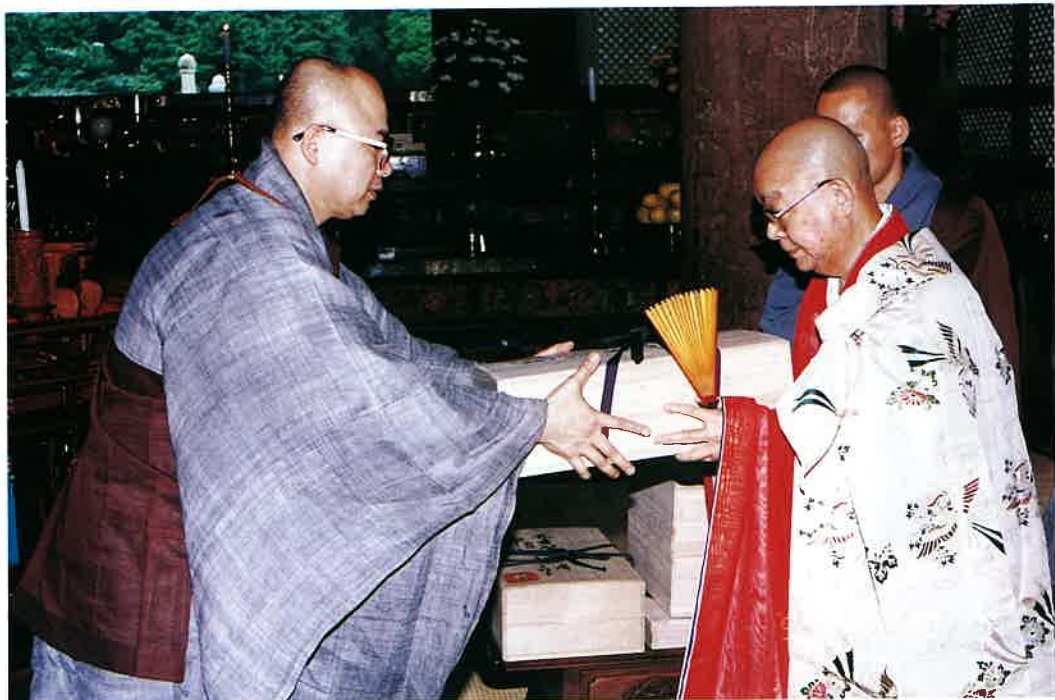


▼箱書き・表



▼金欄の袈裟を披露する黒田理事長（左から二人目）





▲佐藤老師より贈呈

▶ 絡子

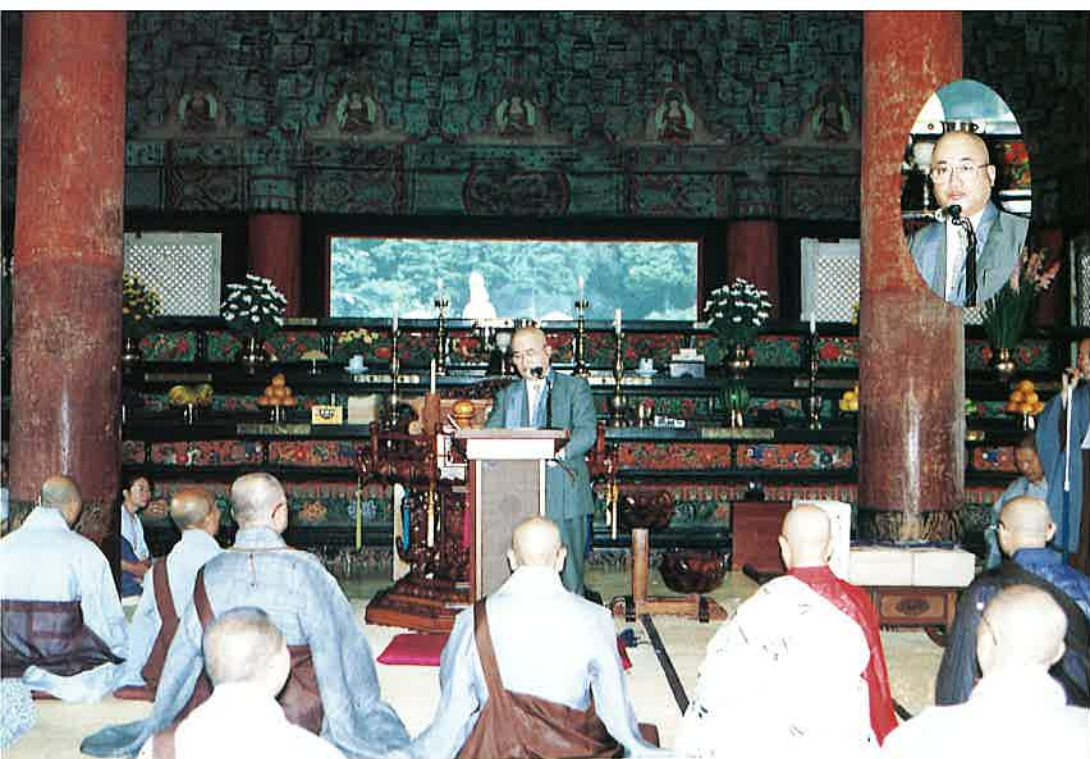
▼ 『正法眼藏』 桐箱入





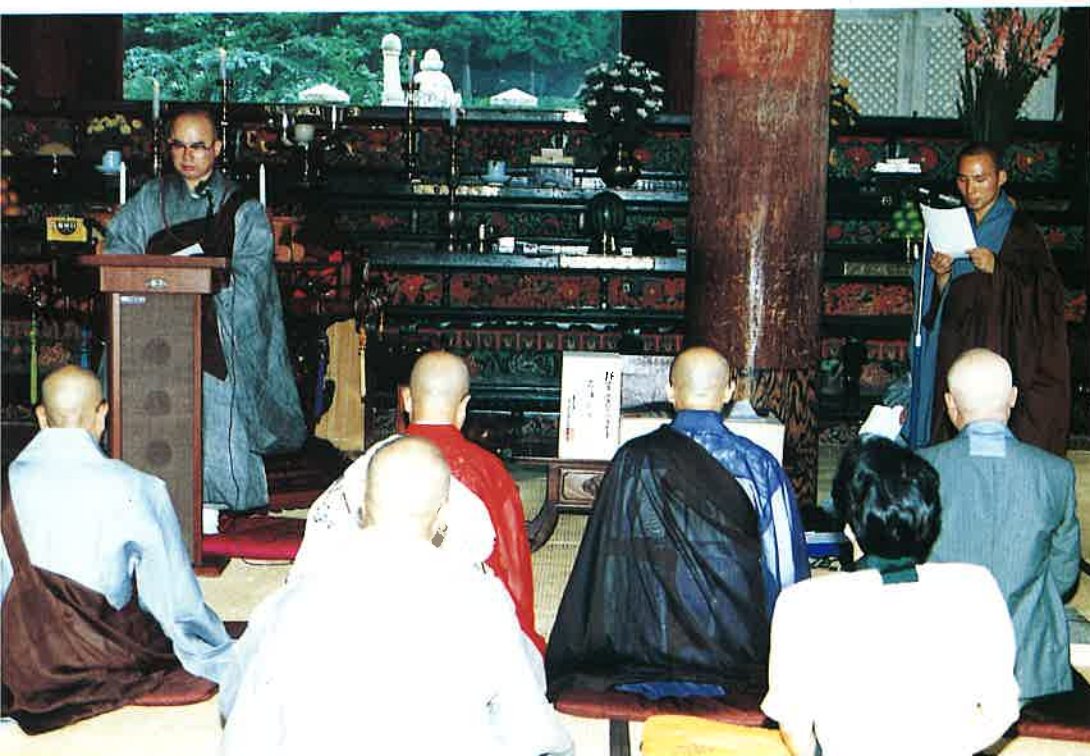
通度寺様から黒田理事長に記念品の贈呈





▲東隆眞先生の講演

▼金圓山先生の歓迎の辞







▲寺の梵鐘

▶老天月下方丈と親しく歓談



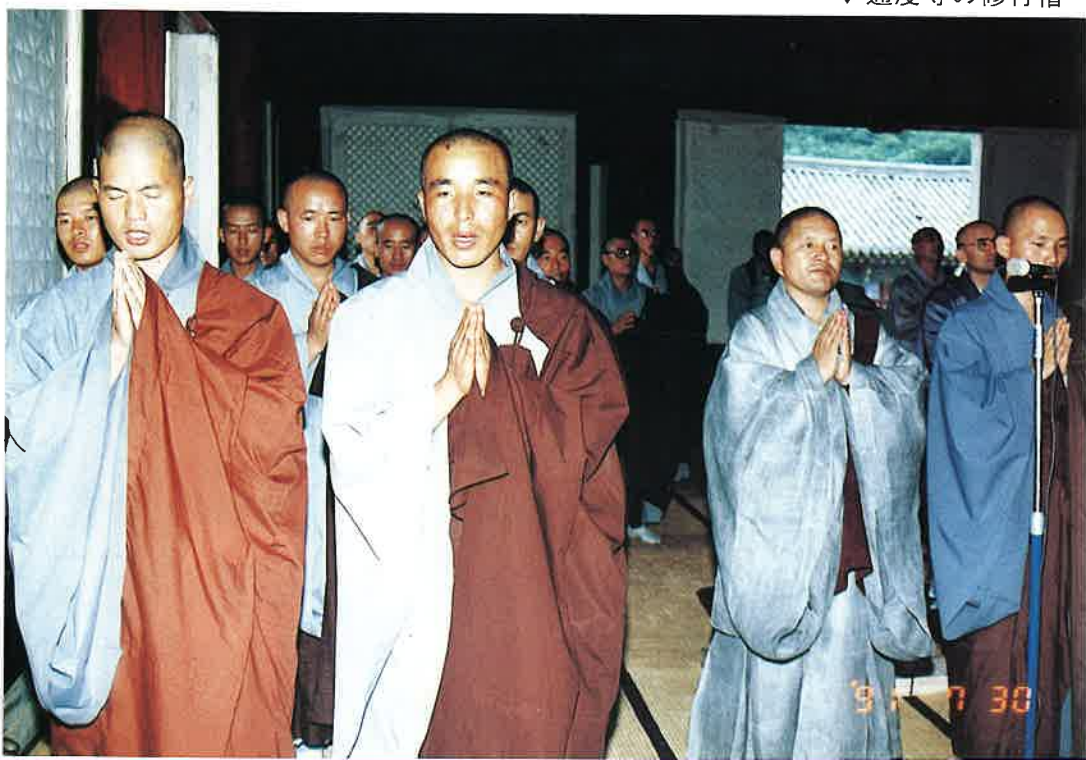
▼山門前にて





▲ 香語を唱える佐藤老師

▼ 通度寺の修行僧





▲通度寺の信徒の皆様と

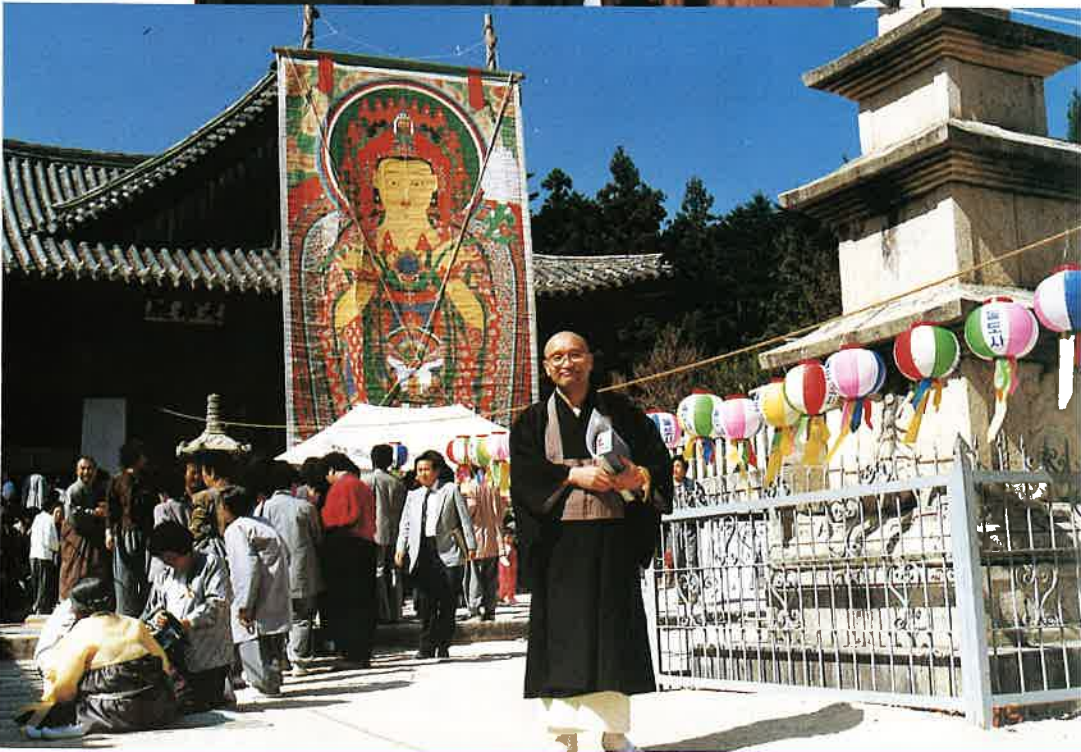
▼三角山僧伽寺



再び韓国へ



通度寺。老天月下方丈と黒田方丈



鷲山門

제1346회
통도사 개산조 자장율사 대재
일시: 불기 2535년 10월 15일 10시 ~ 18일 19시(음. 9.8 ~ 9일)



博物館

通度寺開山1346周年記念

佛教文化學術會議



カラー ■ 韓国・袈裟捧呈の旅

巻頭言 ● 世界にひろがる輪 黒田 武志

特集 ● アジアの仏教国との交流を 東 隆眞

● 袈裟の心を結んで世界平和の実現をー韓国・通度寺へ袈裟贈呈 佐藤 俊明

● 袈裟を捧持して韓国へ 金 秀娥

カラー ■ 韓国の統一と韓国仏教徒の役割 樋口英夫・杉江幸彦

● ビルマ・世界最大の仏塔「シュエダゴン・パゴダ」 佐藤 俊明

● バンコク・ヤンゴン各二泊の旅 小倉 玄照

鼎談 ● 仏の姿に打ち込みてー仏師・錦戸新観師に聞く 戸塚 正美

連載 ● くらしの中で読む『正法眼蔵』 高野 義郎

講演 ● 新聞雑話 島 岩

特別寄稿 ● 古代ギリシアの聖地ーエレウシースの秘儀 高橋 堯英

留学記 ● 日常の日々(3) 清水 晶子

エッセイ ● インドの学校事情 その三 及川 弘美

● 聖地巡礼ーケダルナート 及川 弘美

● 神話のいきづくヤムナー河畔(その二) 及川 弘美

カラー ■ 海外留学僧派遣育英会第六回総会開く 及川 弘美

ミヤンマー・慰霊の旅 及川 弘美

善光寺だより 及川 弘美

読者からのお便り 及川 弘美

題字・さし絵 伊藤三喜庵
グラビア 駒澤 晃・五十嵐千彦・樋口英夫
カット 『敦煌裝飾図案』より

173 167 159 152 148 145 141 133 119 111 104 93 59 47 43 25 20 18 14

世界にひろがる輪

まことにわれら邊地にうまれて未法にあふ、うらむべしといへども、佛佛嫡嫡相承の衣法にあふたてまつる、いくそばくのごようごびとかせん（『正法眼蔵袈裟功德』）

昨年七月は、遙かなる昔、日本仏教の源流の地であつた大韓民国を訪れ、佛宝の本山通度寺にわが宗門正伝の袈裟を捧呈し、同寺で主催予定の世界袈裟展に展示していただくことになりましたが、これは袈裟功德によつて日韓仏教の親善交流を深めるうえにたいへん有意義なことから自負しております。

次に十一月、私は「日本・パクナム会」の会長の席を汚すことになりました。この会は、ワット・パクナムのみならずその他の上座部仏教寺院において修行経験を有する者を主体とした会で、上座部仏教に対する正しい理解の輪をひろげると共に仏教文化の交流振興をはかることを目的

としておりますので、これは海外留学僧派遣育英の事業と表裏一体のものであり、今後一層ロタイ仏教の友好親善に寄与したい所存であります。

次に今一つ持筆すべきは、留学僧第四期生として山梨県大菩薩山瑞岳院に安居し修行生活を送ったフランス人尼僧バシユー・ルース・浄信さんが留学修了後帰国して南フランスに禅堂を開設すべく努力しておられました。本年六月に開堂の運びとなったことであり、遠くヨーロッパの地にも親善交流の足がかりが出来たことはまことによろこばしいことでもあります。

このように善光寺海外留学僧派遣育英会は仏教交流の輪を世界中にひろげようとしております。折も折、これまで派遣した二十四名の留学僧の応募論文、第一集を刊行することになりました。これは今後応募しようとする人びとにとつてもっとも手近かな参考資料となることでありましょう。有為の人材の応募を期待し、所期の目的達成に邁進することを誓い巻頭の言葉とします。



搭袈裟の大誓願

赤 間 義 徳

スペースシャトルのカメラが
クウエートの炎上する油井を
立ちのぼる黒煙のぶきみな太い帯を
とらえた。

汚染した大気に咳こみながら
重い足取りを運ぶ地球が見えてくる。

〃初めて

袈裟を着き(搭)た

仏教徒の初心にかえって

世界の国々へ

袈裟を贈ろう。



汚染したひとびとの心を浄化するため
仏法の功徳を具備した

袈裟を贈ろう”

黒田大円方丈さまの

新たな大誓願は

袈裟を

韓国へ贈ることから始まる。

方丈さまとともにわれわれも

大誓願達成のはるかな未来へ向かって

躍動する第一歩を踏みだそう。

袈裟を着た地球が

清浄な大気の道を軽快に歩いていく

未来へむかって。

◇アジアの仏教国との交流を◇

東南アジアの上座部仏教国タイ。そこで一度、修行した体験を持つ日本の僧侶も少なく



タイの僧院

ない。黒田武志住職もその一人だが、このほど、そうした人たちの集まりである「日本パクナム会」の会長に就任した。前会長の石附周行氏（曹洞宗雙林寺住職）らとともに発足当初の九年ほど前から会の運営を担ってきた。

ム戦争最中の昭和四十年。バンコクのワット・パクナムで二年ほど修行し、上座部仏教というものを肌で感じとった。「現在の日本の仏教は形が崩れてきている。在家の人とどこが違うのか。日本の僧侶は上座部仏教の僧侶ほど民衆から信頼を得ていない」と指摘する。

タイでの修行の後、今度は戦争当事国であるアメリカに渡った。当事の日本はアメリカよりの外交政策を採っていたが、「日本はもつと中立で、アジアを救う立場に立っていれば」と今も思うという。

昨年、日本パクナム会は日タイ交流の地であるワット・パクナムに仏教書などを贈り、日本文庫を開設した。会員や趣旨に賛同してくれた学者や出版社、仏教伝道協会などの協

力もあつて五百冊を贈呈、タイ在住の日本人にも開放されている。また一方では、日本の学僧を海外へ派遣したり、海外の留学生を受け入れる「善光寺海外留学僧派遣育英会」を運営。過去七年間で九カ国に三十五名を派遣している。派遣先はタイとは限らず、アメリカやヨーロッパへも。

二十代のころ、日本一周の托鉢を行ったこともある。野宿も経験した。海外での修行やこうした貴重な体験が留学僧派遣などの様々なアイデアを可能にしているが、すべては人作りにつながっている。

「本当の仏教というものを後世の人々に伝えていかなくてはなりません。そのためにも仏教を形と心が一体となったものになんては。次の世代を担う人、頑張つてやってみようという人たちに力を与えているんです」

数年前、自分の子どもをタイ仏教の方法で得度させた。親子揃つての体験だった。「自分がやってみて良かったですから、ぜひ子供にも同じことを体験させたかったですね」と「親心」をのぞかせる。

黒田さんはアジアから世界へと絶えず海外に目を向けて行動する。日本人の話題はアジアよりも専ら欧米に関することが多い。もっとアジアを見る必要があるという。

「悲しいことですが、アジアの仏教国が力を失ってきています。今こそ日本の仏教人がアジアの同じ仏教国に力を捧げなくてはならないと思うんです。今はタイの仏教に焦点を当てて活動していますが、その力をアジア、そして世界へといろんな国々に及ぼしたいですね」

袈裟の心を結んで世界平和の実現を

——韓国・通度寺へ袈裟贈呈——

善光寺海外留学僧派遣育英会理事

東 隆 眞

このたび、わが善光寺海外留学僧派遣育英会は、大韓民国、靈鷲山通度寺方丈老天下猊下の御要請により、同寺に袈裟（金欄九条衣一肩、金欄安陀会一肩、麻九条衣一肩、麻安陀会一肩）と道元禅師撰述『正法眼蔵』九五卷（大本山永平寺蔵版。和装本四帙二一巻。桐箱入）を贈呈した。

周知のとおり、慶尚南道の靈鷲山通度寺（慶南梁山郡下北面芝里五八三）は、大韓仏教曹溪宗二五本山の一であり、三大寺刹の一でもある。

三大寺刹とは、仏宝、法宝、僧宝の三宝の三つに寺院をあてはめて言う。通度寺は仏宝の寺、法宝の寺が海印寺、僧宝の寺が松広寺である。いずれも二五本山の一である。

通度寺が仏宝宗刹と呼ばれる名刹であるゆえんは、仏舍利が奉安されてあるからである。通度寺の大雄殿（本堂にあたるか）の真正面には「金剛戒壇」の大額がかかっている。しかし、この堂宇にはご本尊は祀られていない。その奥に石造の戒壇があり、仏舍利塔があるのである。

仏舍利塔には、釈尊の御真骨が祀られているという。通度寺は、六四六年ごろ、新羅の慈藏律師によって創建された。律師は入唐して、五台山や終南山で、仏舍利や仏袈裟を授けられて帰国した。通度寺には、律師所用の袈裟とともに「釈迦如来袈裟」とよばれる釈尊の袈裟が秘蔵されている。山号の靈鷲山は、通度寺の背後にある山容が似ているところから名づけられたのであるが、もともとインドの王舎城の東北にある山で、そのむかし、釈尊はこの山頂で説法をなさった。すなわち、通度寺は仏舍利塔の古刹であり、仏袈裟の大藍である。朝鮮半島における釈尊のお寺であり、釈尊が現に生きて説法まします道場であると言ってもよからう。

この仏宝宗刹の通度寺から、直接には通度寺聖宝博物館長・釈梵河老師を介して、方丈・老天月下猥下が、善光寺海外留学僧派遣育英会黒田武志理事長に日本の袈裟を歓迎したい希望が

寄せられた。

通度寺には、かねてより、世界各地の袈裟を一堂に集め、世界の袈裟を展示し、袈裟のころを通じて、世界の仏教徒が交流し、協力する一大拠点を設け、さらに宇宙、人類の平和に広げていきたいという誓願がある。

黒田武志理事長は大韓仏教曹溪宗と法脈を同じくする日本の曹洞宗に所属し、曹洞宗の宗祖（高祖道元禪師、太祖瑩山禪師）を通じて、釈尊の精神に還れという誓願を発して、独自の実践活動を展開している。また、これまでも、日本における仏舍利奉戴や袈裟の普及、顕揚について多大の貢献があった。また、育英会では韓国人の仏教留学僧六名を育英生として採用してきた。

日本の曹洞宗の兩大本山の一、吉祥山永平寺の開山・道元禪師は、日本仏教において、とくに釈尊を尊敬し、釈尊に帰依し、釈尊を目標と

した祖師として知られており、曹洞宗のご本尊は釈尊とさだめられている。道元禪師の名著『正法眼蔵』九五巻のうちに、「袈裟功德」、「伝衣」の巻などがあり、袈裟は、釈尊にほかならず、仏教の真髓を体得し、これを継承することは袈裟のころを学ぶことであると説いている。道元禪師にあつては、釈尊と袈裟と道元禪師とは一体である。

かくて、通度寺の仏法興隆、世界平和実現の誓願と善光寺海外留学僧派遣育英会の仏法興隆、世界平和実現の誓願とが、ここに感応道交し、一本の強い絆となり、今回の贈呈がいち早く実現の運びとなった。

あらためて言うまでもなく、袈裟は仏教徒の標幟である。袈裟は、煩惱を離れ、罪を滅ぼし、人びとと世のなかの平安と幸いをもたらす功德をそなえていると經典に説かれている。この功德をいたぐたい、智慧と慈悲をそなえた真実の

自己を実現し、あらゆるもののいのちを尊び、たがいに和合、和睦して、仲よく生きていくのが仏教である。

平成三年（一九九一）七月三〇日、午前一時、黒田武志理事長、佐藤俊明常任理事、東隆真理事、善光寺寺族黒田倫子女史の四名は、袈裟、絡子など四領、『正法眼蔵』一函を奉持して、通度寺に到着。午前一時より、大雄殿で老天下月下方丈をはじめ一山の清衆および老若男女の信者ら、およそ三〇〇名が堂内にあふれるなか、司会・釈梵河老師、通訳・李煥秀師（東洋大学留学。育英会生）のもとで贈呈式が行われた。その式次第は、1、三帰礼、2、般若心経奉読、3、来訪者紹介、4、贈呈（日本側、韓国側）、5、歓迎辞（韓国側）、6、答礼辞（日本側）、7、四弘誓願、8、記念撮影。贈呈する日本側として、導師を佐藤常任理事がつとめた。また、私が、今回の袈裟贈呈の意



義などについて二〇分ばかり講演した。韓国側を代表して、老天月下方丈と通度寺僧伽大学教授・金田山老師が、感謝の意と今後の親善、協調をのぞむ答礼の辞があった。

けだし、仏法の興隆、世界平和の実現を共通の誓願として、日本の仏教から朝鮮半島・韓国の仏教へ袈裟や祖録『正法眼蔵』が贈呈、奉獻されたのは、おそらく両国仏教史上はじめての出来事ではなかったかと思う。

おもえば、日本の仏教は、中国大陸、朝鮮半島から伝えられ、爾来一千数百年、言い尽くせぬ多大の恩恵を受けている。この恩恵を再認識し、これに応える意味からも、おたがいに積極的に理解し、協力することが必要であろう。とくに、私どもの曹洞宗は、朝鮮半島との仏教とはきわめて疎遠に過ぎたと言えるだろう。双方にとつてのぞましい交流は、ほとんどなかったのではあるまいか。これからはそうであつては

ならない。しかし、いま、新しい交流の第一頁ははじまったのである。

ところで、このたび、あらためて痛感したことがいくつもある。いずれ時を改めて書きたいが、とりあえず、二点を指摘しておく。その一つは、通度寺では現代韓国仏教でもっとも尊敬を集めている四大高僧のひとり、通度寺の老天月下方丈はじめ若い修行僧にいたるまで、すべての僧侶は、ねずみ色のころもの上に茶色の袈裟（木綿布か）をまとっている。例外はない。金襴の袈裟もなければ、茶色以外の色の絡子もない。まことに、すがすがしいばかりの光景である。もう一つは、通度寺の僧侶は、参詣人や信者から、たいそう尊敬されていると見た。僧侶に対する信者の敬虔な礼儀、作法、異邦からの客人である私たちをも肅然とさせるものであった。韓国仏教から教えられ反省させられることの多い旅でもあった。

てに伽僧山三角



袈裟を捧持して韓国へ

海外留学僧派遣育英会常務理事
龍光寺住職 佐藤俊明

台風同伴の旅

テレビに写し出された台風の進路予想図を見ると、今日これから出かけようとしている韓国に向っている。

九条のお袈裟二肩を携え持って二十九日に出発するのだから台風九号が同伴をしてくれるのも何かご縁がありそうなことだが、さて飛行機大丈夫かな？と一抹の不安を感じた。しかし快晴の天気なので予定どおり十時にタクシーを

呼んで寺を出た。

スイスイ走る冷房のきいたクルマの中で快い眠りに誘われ、目を覚ましたらもう空港の近くだった。私が目を覚ましたのをみて、運転手が「ラジオで聞きましたが、釜山行きは欠航だそうです」と教えてくれた。

予想どおり十一時半に南ウイングに着いた。善光寺さんがた、早く着いてくれればいいが、早く十二時だろうなアと考えるから大韓航空のカウンター前の空き席をさがしたら、これ

また意外、そこに善光寺方丈・理事長夫妻が坐
っておられる。

「はやかっただすね。混んでませんでしたか」
「いや、十八キロ渋滞ということで、クルマが
さっぱり動かないので、これじゃとてもダメだ
と思ひ、クルマの中から連絡をとり、ヘリで来
ました。ヘリも三分ばかり待ってもらつてよう
やく乗れました」

「ところで釜山行きは欠航だそうですね」
「そうですね、それは知らなかつた」

ということ、途端にあわただしくなつた。
さいわい十二時三十分発のソウル行きがある
ので、急げば乗れる、それでゆこうときまつた
ところへ東先生が到着された。早速荷物を出し、
出国手続きを済ませ、ゲート前のロビーに到着
したのが離陸十五分前。

予定変更を韓国で待機している留学僧の李さ
んに知らせなくてはと、ここで電話をいれる。

ようやく通じて話をしていうち、乗客はみな
飛行機に乗りおわり、私たち四人を残すだけと
なつた。理事長の電話の終るまで、と、なんと
か頼み込み、ようやく機上の人となることので
きた。

さて、これにて一件落着いたものの、釜山北
方四十キロの寺にいる李さんが、五百キロ離れ
たソウルに、しかも飛行機の飛んでいるわず
二時間の間に、連絡がとれて有効適切な手配が
講じられるであろうか。もし金浦空港に誰も出
迎えてくれなかつたらどうするか。式典は明日
十一時、なんとしても今日中に釜山に行かねば
なるまいが、言葉が通じないので果たして思
いどおりに事が運ぶかどうか等々、心配すれば切
りがないが、仏さまのご用で来たのだから仏さ
まが道を開いてくださるに違いない、と心に決
め込んで、無駄な心配はしないことにした。

ここで仏様のご用、このたびの訪韓の目的に

ついで述べると、昨年四月訪韓した際、通度寺の博物館長釈梵河師から「仏宝の大本山通度寺において、明年世界の各地より袈裟を集めて一堂に展示し、多くの人々の拝観に供する計画を立てているので、ぜひ日本曹洞宗の袈裟を出展してほしい」との要請があり、善光寺方丈がその求めに応じ、金襴と麻の九条袈裟及び絡子を発注制作し、このたびそれを携持する運びとなったものである。

さいわいにも今年度善光寺留学僧に決った東洋大学一年在学の李煥秀君は通度寺在籍の学僧だったので、彼は数日前、私たちの訪韓受入れ準備のため通度寺に帰山しており、万事好都合に事が運ばれた。

ここでお袈裟について一言すると、お袈裟はお釈迦さまが身にまとわれたものであり、出家修行者の正式の着衣である。出家得度の式で師匠から頂戴し、死に至るまで毎日着用し、仏の

教えを受持し、他に伝え、そのおかげを蒙るの
がお袈裟である。だから禪堂では暁天坐禪の終
る時、お袈裟をふくさより出して頭上に安じ(平
生はお袈裟を両手に捧げ)合掌して次の「搭袈
裟の偈」を唱え、仏弟子としての決意と感謝の
意をあらわすのである。

大哉解脱服 無相福田衣 披奉如来教
広度諸衆生

(大なる哉解脱の服、無相の福田衣、如来の
の教えを披奉して、広く諸々の衆生を度せ
ん)

袈裟とは、袈裟色(カシャーヤ、すなわち木
蘭色)に染めた衣ということで、糞掃衣、つま
りお墓などに捨ててあつたぼろ布を拾い集め、
縫い合わせたものである。これは仏が弟子たち
に所有欲をおこさせぬように、廃品のリサイク
ルをはかったものといえる。それが時代が経つ
にしたがつて、信者から美しい布を寄施される

ようになるのだが、それをわざわざ小さな片に裁断して縫い合わせ、木蘭色やその他のくすんだ色（壞色）に染めさせた。このように裁断した小片を用いるので「割截衣」といい、縫い合わせた布片の数によって五条、七条、九条、十三条、十五条、二十五条等に区分され、九条以上を大衣、七条を上衣、五条を內衣（安陀会）といっている。絡子は五条衣を縮小したものである。

禅宗では法を伝えることを衣鉢を伝えるというように衣、袈裟を尊重するのだが、とくに道元禪師は『正法眼蔵』に「袈裟功德」「伝衣」の巻を著わし、袈裟が正伝の仏法の証であることを強調しておられる。

では、袈裟にはどのような功德があつて、何故にそれほど尊重されるのか。まず第一に袈裟は「解脱服」である。仏さまはみなこの袈裟をつけて修行し、さとりをひらかれた。蓮華色比

丘尼は遊女であつた時、戯れに袈裟をつけて踊つた因縁により、のちに出家得道し、阿羅漢となることのできたという話も伝わっており、お袈裟を着けて修行にはげむことが解脱（さと）に至る唯一の道である。お袈裟はまた仏さまの衣であるから、衆生に福德を与える衣「福田衣」であり、世の常の相を超えた「無相」の衣である。このようにお袈裟を身につけることは、仏の教えを身につけることであり、仏の御いのちを相続することであり、仏の御いのちを相続することは広く一切衆生を救うことであるので、お袈裟を身につける以上はいつでもこのことを心に誓わなければならない。その誓いをあらわしたのが前述の「搭袈裟の偈」である。

このような尊いお袈裟を携え、捧呈する儀式に臨む旅である。袈裟功德により明日の式典に間に合わないようなことはあろうはずがない。

午後二時四十分、金浦国際空港に着陸。入国
手続を済ませ、税関をパスしてロビーに出る。

「迎えの人は？」と見渡したが誰も見当らない。

「さてはうまく連絡とれなかったのかな」と思
っていたら、昨年訪韓の際万事にわたって世話
してくださった「尼さん」こと雪峰さんがひよ
っこりあらわれた。尼さんは日本語を知らない。
しかし彼女は必要と思われる日本語をメモして
来ており、「わたくし、釜山までいっしょにゆき
ます」と読み上げる。

早速尼さんのクルマに荷物を積み込み、釜山
に向けて出発し、ソウルの東インターより高速
道路に出たのが四時過ぎ、時折強い雨に見舞わ
れながらも百二十キロのスピードで走り続け
た。しかし南下するにつれ、四、五ヶ所で道路
工事のため渋滞に巻き込まれ、釜山フサのホテルに
着いたのは十一時四十分だった。通度寺の博物
館長釈梵河師と善光寺留学僧李煥秀君の迎え

を受け、打ち合わせを済ませ、ホッとした気分
で就寝した。思えばハラハラ、ハプニング連続
の一日だった。

袈裟の捧呈

八時半、台風之余波を受けての激しい雨の中
を通度寺に向って二台のクルマが動き出した。
一号車には釈梵河師と留学僧の李さんに理事長
夫妻、二号車には東隆眞先生と私、雪峰尼さん
が運転。

通度寺（トンドサ）は釜山北方約四十キロに
ある寺で、六百四十五年、新羅二十七代善徳女
王時代に、唐から仏舍利を携えて来た慈蔵律師
が、仏舍利を奉安するために創建したと伝えら
れる名刹である。

高速道路から降りてしばらく走ると、通度寺
の大きな駐車場があり、そこにある大きな門を
通り、素晴らしい溪流に沿って進むと、「靈鷲山通

度寺」と書かれた門柱がある。五台山月精寺（ウオルチョンサ）が「高山第一」といわれるののに対し、「野山第一」といわれるのがこの通度寺で、その名にふさわしく風光明媚の境内である。

靈鷲山りやうじゆせんというのはご承知のように、インドの王舎城の近くにある山で、お釈迦さまはこの山頂で説法したと伝えられているが、その「靈鷲山」がここ通度寺の山号になっている。それはこの寺のうしろにある山の形がインドの靈鷲山と似ているからだといわれている。

韓国には三大寺刹といわれる三つの寺がある。それは、通度寺、海印寺（ヘインサ）、松広寺（ソンガンサ）の三寺であり、この三寺は仏・法・僧の三宝を祀っている。すなわち、通度寺は、仏舍利を奉安しているので「仏宝」の寺であり、「仏宝の大本山」といわれる。海印寺は『八万大藏経』の版木が收藏されているので「法宝の大本山」、そして松広寺には修行道場である修

禅社がおかれているため「僧宝の大本山」とさ
れている。

道元禪師はお袈裟の功德を讃歎して、袈裟は
実に釈尊一代の説法そのものであることを強調
しておられる。山号がお釈迦さまの説法された
靈鷲山であり、そのお釈迦さまの遺身舍利を奉
安する通度寺であれば、お釈迦さまの身につけ
られたお袈裟を尊ぶのは当然のことである。果
せる哉、慈蔵律師が中国より将来されたという
お釈迦さまのお袈裟と、慈蔵律師が身につけた
お袈裟が観音殿に奉安されている。（これは年に
一度しか開帳されないので残念ながら拝観でき
なかつた）したがってまた、世界各地に伝わる
お袈裟を集め、その功德を遍く一切に及ぼそう
とする今回の世界袈裟展開催の意義もよく理解
できるのである。

さて、お釈迦さまご入滅以来、歴代祖師の中
で、道元禪師ほどお袈裟の徳を讃え、高く尊く

意義付けられた方はほかにはおられない。そこで善光寺方丈、育英会理事長はお袈裟とともに、道元禅師の名著『正法眼蔵』もぜひこの際読んでいただきたいとの念願から、特製の九十五巻本を謹呈された。「袈裟功德の巻」「伝衣の巻」その他随所にお袈裟の功德が懇切に説かれているからである。

十時、寮舎近くの通用門に入ってクルマを降りた。雨は小降りになっていたが、待機していただいた数人の若い坊さんがそれぞれ洋傘を持って迎えてくれ、まず金圓山先生のところに案内してくれた。金圓山先生は、日本の本山でいえば監院に相当する役職の方かと思われるが、同時に僧伽大学の講主として華嚴学を講じている新進気鋭の学者でもあった。ここで初相見の挨拶を交わし、銘茶でのどを潤し、少憩ののち靈鷲叢林、老天月下方丈様に案内していただいた。

右から黒田方丈、老天月下方丈、佐藤老師、李師



日本ではどんなに小さな寺でも住職は方丈と呼ばれるが、韓国では方丈と呼ばれる高德は四人しかおらず、老天月下方丈はその筆頭のお方といわれ、七十九歳とのことだった。少しも格式張ることのないいたって物腰のやわらかな好々爺といった感じで、本番前に習らしをと考えていた私たちをやきもきさせるほど気さくに四方山話をしてくださった。

そんなわけで法要前の習らしは出来ず、李さんが示してくれた通度寺側の差定（式次第）に従ってぶっつけ本番でいく以外にはなかった。

法要は大雄殿でおこなわれた。大雄とは仏殿のことであり、したがって大雄殿といえは仏殿のことである。仏さまが祀つてある殿堂のことである。ところが通度寺の大雄殿は違う。大雄殿の正面に「金剛戒壇」と書かれた額が掲げられている。そして仏さまを祀っていない。（須弥壇のうしろに相当する）正面の壁はあけられてお

り、すぐうしろにある舍利塔が見えるようになっていた。つまり舍利塔の中の仏舍利が大雄殿の本尊さまなのである。

大雄殿の天井は極彩色で、いかにも韓国様式のものだが、不思議なことにここにはタタミが敷かれており、日本の寺の本堂といった感じだったが、両班相對せず一山の衆、私ども共々皆本尊に向つて坐るのであった。

法要はまず司会者の解説ののち、「三歸礼」からはじまった。これは「自歸依仏……」ではじまる三歸礼文で日韓同唱した。次に私が次のような香語を述べた。

無相福田解脫服（無相福田の解脫服）

二肩携来献真前（二肩携え来たって、真前に捧ぐ）

堪飲世界袈裟展（飲びに堪えたり、世界袈

裟の展）

靈鷲山頭仏日圓(靈鷲山頭、仏日圓かなり) 恭しく惟れば今般、大韓民国野山第一、仏宝大宗刹、靈鷲山通度寺において、世界袈裟展を開催す。

日本国横浜成寿山善光寺現董、黒田大圓大和尚、需に応じ、日本曹洞宗袈裟九条大衣、安陀衣各二肩、並びに『正法眼蔵』九十五巻を携持寄進す。

因みに野衲をして点淨開眼、捧呈之儀を修せしむ。感激の至りに耐えず。

専ら祈る。日韓の親善友好、弥々濃やかに、如来の正法を万邦に及ぼし、皆ともに仏道を成ぜんことを。 至禱至禱。

ついで「三歸礼」同様、『般若心経』を日韓両語で同誦して法要を終り、式典に移った。

まず最初に私たち「来訪者紹介」があり、続いて善光寺側よりお袈裟と『正法眼蔵』の贈呈

があり、通度寺側より韓国の十五条大衣及び寺宝「華嚴曼陀羅」の写し(『華嚴経』一卷を一枚の絵にしたもの八十枚)、並に四人に各々茶碗一個が贈られた。

ついで老天月下方丈が立ち、日本曹洞宗のお袈裟と『正法眼蔵』を贈られたことに対し深甚の謝意と、併せて留学生育英事業に対する敬意と感謝を述べられ、日韓仏教の親善友好にお互い手を取り合つて進みたいと結ばれた。そして、老天月下方丈の意を体して金圓山先生が次のように歓迎の辞を述べられた。

夏の大雨の天気にもかかわらず通度寺に金欄袈裟を寄贈するためにご訪問いただきました日本国曹洞宗善光寺御住職の黒田武志御老師、龍光寺御住職の佐藤俊明御老師、駒沢女子短期大学副学長の東隆眞博士、そして黒田倫子先生の御四名様に通度寺の全大衆を代表

致しまして心から歓迎することをごさいます。

日本国曹洞宗は日本仏教史に最も卓越した道元禪師によって開創されまして「只管打坐、修證一如」を修行の根本にしまして御精進していらつしやると思います。道元禪師の名著の『正法眼蔵』による禪修行は仏教界に高い禅思想を鼓吹させております。

善光寺の黒田武志御老師が「海外留学僧派遣育英会」の理事長として世界仏教文化交流に大きな役割をしていらつしやるのは私どもの韓国仏教界にも広く知られておりまして、黒田武志御老師の大きな元からの力に深い敬意を払うことをごさいます。

私どもの通度寺はいまから一三四五年前の六四七年に新羅の大国統てごさいました慈蔵律師が中国の清涼山に入りまして文殊菩薩に祈りまして御釈迦様の真身舍利と金襴袈裟

を捧持して帰ってまいりまして、ここに通度寺を開創して戒律の根本道場として今に伝えられて来ております。そして、慈蔵律師の御袈裟と多くの宝物も大切に保存してあります。

仏法が衣鉢を通じてマカカシヨウとアーナンドをはじめ三十三祖師に伝承されたのが法統であるという面で見ますと、御袈裟の意味は非常に大事だと思えます。だから私どもの通度寺聖宝博物館では御釈迦様の金襴袈裟と慈蔵律師の御袈裟をはじめ全世界各国の各宗派の御袈裟を集めて展示しまして、仏法の時間的・空間的真理を一目瞭然に見られるようにしまして、御袈裟の功德ですべての罪が消滅されて煩惱を離れ、一切衆生が一法界の中に和合されたすがたで生存しているのを見せ、世界平和を達成すればということをごさいます。

今日の儀式を契機として曹溪宗と曹洞宗との文化交流がもつとなめらかに進むのを望みながら、金欄袈裟を寄贈いただきました御四名の方にもう一度深い感謝の言葉を申し上げます。

仏紀二五三五年七月三〇日

大韓仏教曹溪宗靈鷲叢林通度寺

僧伽大学教授 金圓山 合掌

これに対し、東先生が次のように答礼辞を述べられた。

御挨拶

善光寺海外留学僧派遣育英会理事

東 隆眞

このたび、大韓民国の仏教を代表する三大寺院の雄、大韓仏教曹溪宗本山・靈鷲山通度寺さまに拝登する仏縁をいただいたことは、

私どものもつとも深い法悦とするところであります。

ここに、善光寺海外留学僧派遣育英会より日本の曹洞宗の袈裟九条衣二肩、絡子二肩を謹んで拝呈させていただきます。

靈鷲山通度寺の方丈・老天月下猓下より、わが善光寺住職、善光寺海外留学僧派遣育英会理事長、黒田武志へ御要請がございました。世界各地のお袈裟を通度寺に集めて、これを広く展示し、お袈裟の精神で世界を結び、大聖釈尊の智慧と慈悲の仏心を高揚したいのでぜひ協力してほしいとお言葉でございます。

黒田武志は、かねてより釈尊の智慧と慈悲の仏心を通じて、仏法の興隆と世界の平和を促進し、実現したいという大誓願を抱いておりますので、老天月下猓下のお言葉とご要請に深く共鳴するところがあり、特に法衣店に



捧呈した品々

九条二肩と絳子二肩の縫製を命じて、佐藤俊明常任理事（日本国、千葉県柏市、曹洞宗龍光寺住職）による点浄の儀を修し、今回の運びとなった次第であります。

霊鷲山通度寺のご開山慈藏大師は、中国で仏教、戒律を修学し、お仏舍利と釈尊のお袈裟を将来し、このお寺に奉安されました。「釈迦如来袈裟」は通度寺の寺宝であり、大韓民国の国宝であるとうけたまわっております。

また、霊鷲山なる山号は、通度寺の背後にある山のすがたがインドの霊鷲山に似ているところからその名が付けられたといわれます。

インドの霊鷲山は、インドの王舎城の東北にある山の名前で、その山頂で、釈尊はご説法をなさったのであります。これらを総合して考えますと、霊鷲山通度寺は、大韓民国における釈尊のお寺、釈尊が現にましましてご説法をなさっているお寺であります。通度寺が

仏宝のお寺とよばれる尊いゆえんも、また、ここにあらるわけであります。

御高承のとおり、お袈裟は仏教徒の標幟であります。およそ二六〇〇年のむかし、インドの釈尊にはじまって、歴代の仏仏祖が、これを身にまとい、尊び、護り、伝えて来ているのであります。およそ、出家、在家を問わず、老若男女を分たず、仏教徒であるかぎり、お袈裟を頂戴し、そのころによつて、信仰生活を深め、高めていくのであります。大乘本生心地観経に、お袈裟は、わが身の煩惱を離れ、罪を滅ぼし、世の平安と幸いをもたらす功德をそなえていると示されてあります。

私も日本国の曹洞宗高祖道元禪師の代表的撰述『正法眼蔵』は曹洞宗の宗典に規定されています。この『正法眼蔵』九五巻のなかに「袈裟功德」、「伝衣」と名づける巻があり

ます。ひとたび、お袈裟を身につければ、私どもがただちに釈尊とつながり、釈尊のご説法を直接に肌身で聞くことになる、仏教が正しく伝わるというのはお袈裟が伝わることにほかならないとして、お袈裟を尊んでいます。そして、お袈裟の普及を念願し、お袈裟の種類、被着法、洗滌法、裁縫法にいたるまで綿密な教えをしるしています。これを拝読すれば、お袈裟のすばらしさをよく理解することが出来ます。そして、只今から将来に向けて私ども仏教徒が人類や世界に対して果してゆかなければならない永久平和実現の重大な役割に気づかされるのであります。

ちなみに、このたび、道元禪師の名著『正法眼蔵』九五巻を通度寺に謹呈させていただきます。道元禪師は、日本仏教の各宗派のなかでも最も釈尊を崇拜し、釈尊に帰依し、釈尊を目標とした祖師であります。道元禪師の

法脈は、大韓仏教曹溪宗と同じ釈尊より数えて第三十三祖大鑑慧能禪師の流れを汲む曹洞宗でありますが、曹洞宗の御本尊はいうまでもなく釈尊であります。『正法眼蔵』には、くりかえしますが、仏教の真髓を正しく伝えて来た人たちは、必ずお袈裟を正しく伝えていると説いてあります。かくて、釈尊とお袈裟と『正法眼蔵』とは、道元禪師においては一体であります。

黒田理事長は、このたび、特に、曹洞宗大本山永平寺（日本国福井県）に依頼して、永平寺蔵版『正法眼蔵』九五巻（眼蔵会八十周年記念出版。桐箱入。四帙二冊。和装。因州和紙使用。木版刷）を求め、通度寺にご寄贈させていただくことにしたのであります。どうぞ、お受けとり下さい。

通度寺に曹洞宗大本山永平寺が刊行した道元禪師の『正法眼蔵』九五巻が、お袈裟、絡

子とともに通度寺に奉獻させていただくことが出来たのは、ひとえに仏天のお加護によるものであります。そして、日韓仏教、韓日仏教の親善交流をさらに拡張していく新しい歴史的、宗教的、国際的の第一歩が始まったものと確信するのであります。

さきほど申しあげましたように、仏教は、煩惱に翻弄されている現実の罪深い私どもが、仏の教えによって内省し、智慧と慈悲をそなえた真実の自己を実現し、あらゆるすべてのものを尊び、おたがいに仲よく生きていくことを教える宗教であります。

通度寺が世界のお袈裟の総本山となり、世界の仏教、宇宙、人類が交流し親善する一大拠点となるのは、まことに通度寺にふさわしい出来ごとであろうと存じます。通度寺が今後ますます発展し、繁栄して、釈尊の教えが多くの人びとのなかに広まり、世界の平和が

完全に実現することを心から祈念して止みません。

ひとこと、ご挨拶を申し上げます。

仏紀二五五七年

平成三年（西紀一九九一年）七月三〇日

東先生の答礼辞終って「四弘誓願」を日韓同誦して式典を終り、祈念撮影で散会した。

少憩して食堂に赴き昼食をいただいたが、大きな食堂で方丈以下一山の大家のみならず信者の人びともいっしょに簡素な食事をいただくことには学ぶべきものが多かった。

一時半、大勢の方々に見送られて通度寺を辞して慶州に向かった。

慶州では仏国寺、そして石窟庵の釈迦如来像を拝観したが、これについては『成寿』第一五号に記載してあるので省略する。

袈裟の護持

朝八時、土砂降りの中を二台のクルマで海印寺に向った。前日同様の配車区分である。

昨年もたしか八時に出発したのだったが、今回は悪天候のため約四十分も遅れて、海印寺についたのは十一時半をまわっていた。

前述のとおり、海印寺は、通度寺が仏宝の大本山であるのに対して法宝の大本山である。法宝、八万大藏経を收藏しているからである。大寂光殿（本堂）のうしろの急な階段を登ると、大藏経を収めた二棟の藏経閣があり、ここに国宝の八万二千五百五十八枚の経文を彫りつけた版木がある。書庫様式の建物で、日本の正倉院と同じような校倉造りあせくらになっており、まことに通風性がよく、常温常湿のすばらしい收藏庫である。

大邱駅を一時十五分で発車するソウル行き

特急セマウル号に乗らねばならぬので、もう残り時間がなくなり、蔵経閣をかけ足で拝観しただけで退かせねばならなかった。

雨のため道路は混み、ようやく大邸の市街に入ったところ、こんどは地理不案内の雪峰さんが信号待ちの間に一号車を見失ってしまった。ようやく駅に着いた時は発車時刻寸前だった。

釈梵河師が大きく手を振り、下車位置を示し、私たちが促がしている。東先生と私は精一杯かけ出した。駅員も協力してくれて改札口も素通りし、階段を降りてホームに一步足を踏み入れた途端、理事長夫妻と李さんを乗せた列車は動き出した。かくなるうへは雪峰さんのクルマで還るしかないが、セマウル号が四時半にはソウルに着くのに、私たちはいつたいたいなんにソウルに着けるのか。

再び雪峰さんのクルマに乗り、釈梵河師の先導で街の渋滞をようやく切り抜け、窓から手を

出して去りゆく釈梵河師のクルマと別れてインターに入った。ところが閉鎖。雪峰さん、随分交渉したが門前払いだった。またもや渋滞の市街地に入り、どうにか抜けて淋しい田舎道に入ったが、雪峰さんも自信がなさそうで、二、三度道をたずね、緊張した顔で黙々と運転している。どの方向に走っているのか見当もつかない。雨はいっこうに止みそうもなく、二時間近くこうした状態が続いて、ようやく倭館のインターにさしかかったことがわかった時はほんとうにホッとした感じだった。雪峰さんの顔にも多少ゆとりが出て来たように安心した。

高速道路はわりに混んでなかった。前のクルマが一二〇キロで走っていても、雪峰さんは「そこどけ！」、「そこどけ！」といわんばかりにピカピカ、信号を送って一四〇キロで走る。途中道路工事による渋滞もあったが、ソウルの東インターに入ったのが六時十五分、漢江の千戸大橋

を渡って雪峰さんの寺、祇園精舎に着いたのが
ちょうど七時、思ったより早かった。

海印寺でクルマを別にして数時間しか経って
ないのだが、その数時間は大邱とソウルの距離
以上に長く感じられた。私たちを案じていた理
事長のいわれるには、「今朝もご祈禱したのでこ
んなことあろうはずがないのに、どうしたこと
かと考えたんですが、これはやはりお袈裟のお
指図ですよ。通度寺で頂戴した韓国のお袈裟は
お二人方に携えていただきましたのですよ。
これで日本と韓国の袈裟を携えて韓国を縦断し
たことになります。これは素晴らしいことです」
そういわれればなるほどそのとおりで、袈裟
の功德を蒙るのが今回の訪韓の大目的であり、
それには袈裟を身から放してはならなかったの
である。

祇園精舎では雪峰さんのお弟子さんがたがす

にて伽僧山角三



っかり夕食の準備をととのえており、箸をとるばかりになっていた。ここで一同、雪峰さんの労を謝し、食事を共にすることになったが、そこに昨年私たちの訪韓を企画してくれた昨年度の留学僧の韓京洙さんがやって来た。彼はいまソウルの東海大学で学究生活を送っている。韓さんの来訪で通訳が二人となったので話は尽きなかった。

翌日は、雪峰さんのお師匠さんのおられる三角山僧伽寺を訪れた。ソウルの北方、北漢山国立公園の中にある正三角形のように屹立した標高八百メートルの岩山の頂上にある寺である。特別に改造されたジープで四十五度前後の曲折した斜面を登るスリルはまさにジェットコースターに乗ったようなもの。一同ひやひやしてよ

うやく山頂に着くと、これまた意外、この山頂によくぞこれだけの伽藍が、と思われる建物の数々が大岩とマッチして建てられており、百八の石段を登ると大きな磨崖仏がソウルの街を見おろしている。ここは薬師如来の聖地で、ソウルでもっとも美味しい水といわれる霊泉が湧き出ている。参拝終って、この霊水で点てていただいたお茶の味はまた格別だった。

この寺はもともと男僧の寺だったが、五十年前より尼僧の寺となり、爾来発展整備されて今日に至っているというが、韓国における尼僧さんの活躍は素晴らしい。また日本と異り、出家仏教であるが、信者との心のつながりは日本よりも強いように感ぜられた。この点おおいに反省しなくてはなるまい。

韓国の統一と韓国仏教徒の役割

善光寺育英生
東京大学大学院生 金

秀娥
(韓国)

韓国に分断の苦痛が始まってから、四五年が過ぎた。四五年の長い時間の中で、南の韓国は資本主義、北の北朝鮮は閉鎖的な社会主義という、全くちがう社会の体制と思想のために、相互を敵対視して来た。

このような韓民族の現実は、韓民族自身が望んだことではなくて、世界第二次大戦以来ソ連と米国との両国の利益のために作られた所産であるのかもしれないことである。

しかし、一九八〇年代以来、ソ連を始めとして、社会主義の国々が解放され、それにもなつて、世界は民主主義と社会主義の二つ両極体制を越えて、自国の利益と平和共存の時代へと変化している。

このような、世界の変化にもなつて、韓半島にも、統一の雰囲気がかんだん高まっている。韓国で、一九七二年、南と北の政治家が集まつて、七〇四南北共同声明、すなわち自主・平

和・民族の大団結の三大原則を統一の基本内容として発表した。

まず、自主の原則とは、韓民族の統一が強大国の利害によることではなくて、我々の民族の意思によって民族が主体になって統一をするということである。

二番目の平和の原則とは、戦争と武力によるのではなくて、理解と協力によって、大衆の自主的な力を集めて、統一をしようとするところにある。

三番目の民族の大団結の原則とは、思想と理念の体制の差異を超越して、分かれている民族を一つにしようとするところである。

この七〇四南北共同声明以後、韓国は、いろいろな方法を講じて統一のために努力していたが、今の世界の変化は、もっと早く統一することができるように見える。世界の変化にともなって、今まで閉鎖的な社会であった北朝鮮は、



だんだん解放しなければならぬからである。

このような民族の大きな課題を解決するため、韓国の民族宗教である仏教が何をすればいいのかは、きわめて重要な問題である。

それは仏教が人間の現実と無関係な神秘的な宗教ではなくて、人間の現実の苦悩を自覚することから出発して、その苦悩を解決することによって平和な世界を作ろうとするように、仏教は現実生きている宗教であるからである。

このような仏教の社会的役割から見ても、韓国の社会で、仏教は分断という民族的苦諦を解決して、統一した浄土の世界を作らなければならないと思う。

仏教の立場から見れば、現在、統一の障碍となつている要因が二つあると考える。

一つは、分断の四五年間、両極の体制と思想の差異からくる民族の異質感である。もう一つは、今までつづけられている軍備増強からくる

緊張感であると思う。

したがって、統一のために仏教の果たすべき具体的な努力は、まず民族同質性の回復運動と反戦反核の平和運動と、また、南と北の仏教の交流運動であると思う。

仏教は資本主義の矛盾と社会主義的短所とを克服しうる完全された思想体系を持っている。

仏教が理想とする浄土の社会は、人間が人間らしく生きる社会、経済的平等、政治的な権利が保障される社会であるからである。これは一切の苦からの解放を表している。このように、両極体制の対立を克服して、民族の同質性を回復するためには、相互の否定と対立感を越えて、元暁大師の和諍思想に立脚した浄土世界の建設が必要だと思う。

また、仏教は戒律の第一が不殺生戒であるように、どの宗教よりも、人間の尊厳性を強調している。

インドの Gandhi は「キリスト教では人間を愛する心を学んだが、仏教では万物を愛する慈悲の心を学んだ」と語った。

このように仏教は、人間のみにとどまらず一切の生命があるものの価値を認める平等と平和の宗教である。この仏教の平等と平和の思想にもとづいて、韓民族の統一を平和的に解決しなければならぬと思う。

今韓国では、四千万の人口の中で、約半分の二千万の仏教信者と、二万の僧侶がいる。また北朝鮮は、宗教を否定する社会主義にもかかわらず、三千万の人口の中で、約二万人程の仏教信者と、三百人程の僧侶がいるようである。

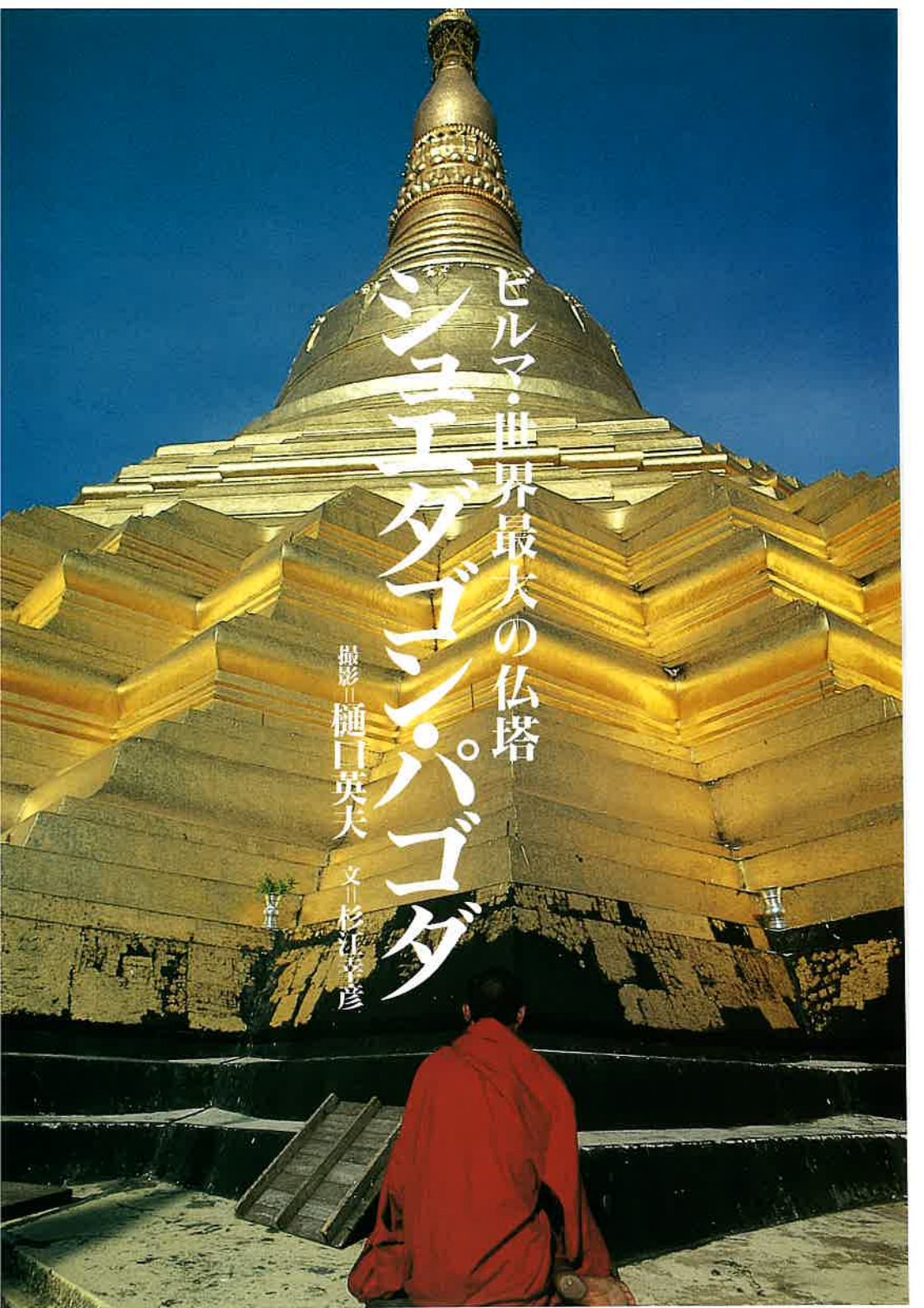
まず、南・北の仏教信者が仏陀の教えにもとづいて、両体制の対立と相互の不信を捨てて、民族愛と民族の平和、また統一のために一つにならなければならぬと思う。

統一は韓民族のみんなの念願である。また、

今世界で唯一つ残っている両極体制の分断の韓民族の統一は、世界平和のシンボルでもある。だから、韓民族の仏教徒は、民族の統一と世界の平和のために、菩薩行をしなければならぬと思う。

『華嚴経』によれば、菩薩の覚りは衆生と無関係な内面の神秘から起ることではなくて、衆生と一つになるための大きな生の意志から起ることである。衆生がいなければ仏教はない。また、衆生の苦痛を解決して、永遠な平和の世界である浄土の世界にみちびく菩薩行がなければ、歴史の中で、仏教は宗教として立つ場所がないと思う。だから今の時代の菩薩は、歴史の暗黒の道を照らす光でなければならぬ。

おわりに、統一と平和のために、仏教徒の菩薩行がもとになって、韓民族の統一と平和が、必ず、一日も早くおとずれることを確信する。



ビルマ・世界最大の仏塔

シユエダゴン。パゴダ

撮影 樋口英夫 文 杉原孝彦



天空を突き刺す黄金のパゴダ



ここ数年、東南アジア地域に点在するパゴダを、いくつも見続けてきた。パゴダの原語は、いまも明らかではないが、スリランカではダゴバ、ビルマではゼーテイ、タイではプラ・チュタイなどと呼ばれ、日本では五重の塔などを意味し、仏塔を指す言葉だ。

どれもが熱心な仏教徒によって建立されたものばかりだった。飛行機で上空から眺める

と、東南アジア地域がいかに強大な仏教圏を形成しているかがすぐに理解できる。

空と交わる地平線の彼方まで見渡せる上空で、人の生活の気配を感じとるためには、まずパゴダを探すことだと認識するようになったのは、東南アジア地域の仏教に関心を持ちはじめたからだ。パゴダが確認できれば、そこに人が住み、周囲には集落がある。低空



飛行ならば、かすかながら人の動きも確認できる。空から眺めると、パゴダはその土地にへばりつき喜怒哀楽に満ちた生活をおくっている住民たちの求心力になっているように見える。集落のあるところ必ず、パゴダがある、と断言できる現実が、東南アジアの特質となっている。

長い時間の経過に耐えながら、無数のパゴダがそこに建ち続けているその東南アジア地域のなかで、もつとも印象深いのが、ビルマ(現ミャンマー)の首都ラングーン(現ヤンゴン)にあるシュエダゴン・パゴダだ。「シュエ」は黄金を、「ダゴン」はラングーンの名を意味する。

初めてシュエダゴン・パゴダを見たのは、夜だった。国連に自ら世界最貧国待遇の認定を要請しなければならぬほど、経済的に貧窮状態にあるビルマは電力事情が極めて悪く、首都ラングーンも太陽が沈むと闇に支配される。だがそんな状況にもかかわらず、強力なライトに下から照らし出されて、真っ暗闇の空を突き刺しているのがシュエダゴン・パゴダだ。

ここがビルマ仏教の中心なのだ、ここに来れば仏の慈悲を体感できるのだ、といわんばかりの強い意志と主張がほとばしっているよ



うな光景だった。一筋の明りに吸い寄せられるように集まった人たちのざわめきで、シュエダゴン・パゴダの周りは異様なほどのにぎやかさがあつた。

ラングーン市街の北にあるティンゴウタヤの丘の上に建つこのパゴダの高さは、現在九九メートルに達している。伝説によれば、早くに仏教を取り入れてきたことで知られるモン族の商人が瞑想中の釈迦に出会い食物を奉獻したところ、釈迦から八本の聖髪をもらい受け、この丘に安置したのが起源だとされる。初めは金、銀、銅など七種の材質からなる小さな仏塔にすぎなかったが、やがて歴代の国王が功德の証として増築を重ね、十五世紀の中頃にはすでに現在の高さになつてつたという。

高さでは、タイのナコン・パトムにあるプラ・パトム・チュディーの一六六メートルより低いものの、シュエダゴン・パゴダはまさにその名の通り、金色に輝く黄金のパゴダとして、またその立体的な広がりにおいて世界的なパゴダの一つであることには違いない。いまでも熱心な仏教徒たちが、功德として金箔を貼り続けている。



ひたすら祈

りを捧げる

ビルマの人々

仏具を扱う店などが両側にぎっしりと並ぶ
東西南北にある長い階段を登りきると、シュ
エダゴン・パゴダの基壇にたどり着く。ここに

出ると、そのきらびやかさに誰もが
驚かされるだろう。金、赤、青、黄な

ど、はては美しい原色に塗られ

た礼拝堂とともに、金色の大
小ささまざまなパゴダが、シエ

ダゴン・パゴダの周囲に密集しているのだった。

どれもが強い熱帯の太陽に照らし出され
て、鋭い光を反射させている。街中の喧噪もこ
こまでは聞こえず、静寂の世界が広がる。地
上に出現した極楽浄土とは、ここを指すの
ではないだろうかと思わせるほどのきらびや
かさとともに静けさがある。礼拝堂や小パゴ
ダはいずれも、熱心な仏教徒たちによって建
立されたものばかりだ。

夜が明けるのを待ちかまえていたように、
大勢の人がやって来る。早朝から、相当なに
ざわいつつまれているのだった。出勤前に、
ここで瞑想を課している男たちがいる。手に
花を持ち、子どもを連れた女性たちがいる。
托鉢を済ませ、早々にここに来てきた僧
侶たちの姿も見える。誰もがここで自分の空









間を確保し、思い思いに祈りを捧げ、やがて瞑想へと自分を導く。それがしごく当然のように行なわれているのだった。

ビルマと同じ上座部仏教圏のタイやラオスなどでも早朝から祈りを捧げる人は多いが、ほとんどは寺院におもむき本堂に安置される仏像への祈りが中心となる。ところがこのシュエダン・パゴダでは、パゴダに手を合わせ、見上げ、ひざまずき、ひれ伏し、祈りとともに、やがて人は瞑想に入るのである。誰もが陶醉しきった表情を浮かべ、それは見る者にとつて、嫉妬さえおぼえさせるほどのものだった。

初めてビルマに入国したとき、当時許可された一週間という滞在期間すべてをシュエダン・パゴダ通いに費やした。朝・昼・晩というように一日三回、ここだけを訪れた。そのときここで見たのは、国民の八五％が仏教徒だとされるビルマの人々の、熱心すぎるほどの仏教への熱い思いと同時に、仏教がビルマ人の体にこびりついているといえるほどの定着ぶりだ。

ここ数年、著しい経済発展をとげるタイとは対照的に、ビルマは以前から外国人の入国を極力制限するとともに、独自の政策を維持してきた。また最近も、国民の民主化要求に

もかかわらず、軍部のクーデターで実権を掌握した軍事政権は民政移管を拒否し、その閉鎖性を強めている。

こうしたことから世界の発展から取り残され、タイの首都バンコクからわずかに飛行機で一時間という距離にもかかわらず、ビルマに到着すると、意識の時間を数十年前に逆戻りさせなければならなくなる。今も街中を走るバスは、一九三〇年代にイギリスが持ち込んだとされるトラックを改造したものだ。以前、昭和初期の沖縄の街中を撮影した写真を見かけたことがあるが、現在のビルマは六五年以上も前の沖縄の光景と、それほど大差がない。このような諸々の政治、経済、社会的要因が重なり、ビルマでは仏教に救いを求めようとする動きがますます顕著になっているという指摘もある。祈りと瞑想が済めば、やがてシュエダン・パゴダは早朝とは異なつた様相を見せはじめる。気に入った僧侶を見つけ、礼拝堂で時間の流れにまかせて談笑する人、涅槃仏の前で同じような姿で快眠にひたる人、はるばる辺境の地からやつてきた少数民族の二団も混じり、世代も性別も越えてそれぞれの憩いの場所となる。





見上げ続けると首が痛くなる。パゴダの最上部には、四千とも五千ともいわれる寶石がちりばめられ、強烈な太陽の光を反射させている。そのすぐ真下には無数の鐸がつり下げられ、天空を流れる風によってかすかな金属音が地上に舞い降りてくる。そして夕方ともなれば再び瞑想に訪れる人でにぎわいを増し、夜がふけるまで人の気配は絶えることがない。



東南アジア各地に広まった南方上座部仏教はスリランカの大寺派の伝統を受け継いでいるが、ビルマへは十一世紀中ごろに伝えられ、以後現在まですたれたことがない。以来、その中心となってきたのがシュエダゴン・パゴダだ。シュエダゴン・パゴダはビルマの無数の仏教徒の祈りを集め、天空の仏陀に発信しているようにも見えるのだった。

バンコク・ヤンゴン各二泊の旅

善光寺海外留学僧派遣育英会
常任理事 佐藤俊明

月桂冠はのマンデー

ビルマがミャンマーと国名を変えて二年しか経っていないので、知名度が低く、私の郷里ササニシキの本場で「ミャンマー」などといおうものなら「ヤンマーだべえ。井関の耕運機」といわれそうだが、そのヤンマージーゼルのヤン坊・マア坊の「天気予報」、今回ほど気になつたことはなかった。

大型の台風十五号が九月九日昼頃、関東に上

陸するかもしれないというのだが、その日の十時三十分には飛び立つというのだから無理もないことだ。

前日八日、定例の参禅会があつて、土砂降りの中を市川から来られた大内さん、帰途は電車が不通で三時間半かかってようやく家が家に辿り着いたという。なるほど新聞を見ると千葉県内の交通はマヒ状態に陥入り、成田空港直行列車も不通になつたため、高速道路が大渋滞をきたし、クルマを降り、重い荷物をかかえて雨の

中を走る人びとの写真が載っていた。

九日、朝は無風状態、まさに嵐の前の静けさだったが、九時ごろから雨が降り出し、風も出て来た。台風は進路を東寄りに変えてくれた。おかげで関東上陸は免れたが、やはり正午ごろ一番接近するという。飛行機が飛ぶのかどうか、遅発か欠航か、とにかく空港で待機するしか手がないので十時に出発、間道を通って、予想より早く十一時十分には空港に着いた。

横浜を六時に出発したという黒田理事長夫妻はすでに到着しており、お茶を飲んだり雑談している、やがてタイム・テーブルにバンコク行き十四時三十分と、一時間遅れて出発する旨が掲示された。

所定の手続きを済ませて機上の人となつて間もなく、「台風のため遅れてご迷惑かけましたが、スピードを出しますので、到着は予定時刻より十分遅れる程度かと思えます」という、ホ

コックピットにて



ツとするようなアナウンスがあつて、「機長は杉江です」という。それを聞いて、「機長に連絡をとらなくては」と思った。というのは、前出の大内さんはかつてJALのスチュアデスで、いまは機長夫人である。昨日参禅に来られたついでに、飛行情報を早く入手するための連絡先をたずねたのだったが、帰宅してからそのしらせがあり、その際、「七一七便の機長は杉江という方です。連絡をとられたらいかがですか」とのことだったからである。

機内食を済ませたところで、スチュアデスに名刺を渡し、機長に取継ぎを頼むと、しばらくして、チーフのスチュアデスであろうか、コックピットに案内してくれた。まことに素晴らしい眺めであつたことに加えて理事長の親戚の萩原雄一郎氏がかつての日航の専務だつたこともあつていろいろ話はずみ、予期もしなかつたたのしい旅のひと駒となつた。

現地時間で午後六時、ドンムアン空港に着く。台風で到着時刻が測り知れないため出迎えは不要と連絡済みなので、旅行社の係員だけの案内でホテル・シヤングリラに向い、旅装を解いたのが八時。

エレベーターに乗ると、床のカーペットに「マunday」と大書してあり、上に「サwday」（今日は）、下に「ハブ・ア・ナイス・day」（いい日でありますように）と小さく書いてある。

「ああ、今日は月旺日か。明日は「チユーズday」と変わるんだな。毎日カーペットを取り替えるのか。えらいもんだなあ」と、サービスに対する努力に敬意を払つたが、ふと、七旺を覚えるために努力した人の苦心のほどを思い出して、ひそかにほくそ笑んだ。

日本人は乃木サンデイ

月桂冠は飲マンデイ

火は水にチューズデイ

水瓜は冬にくウエンスデイ

木刀腰にサースデイ

金魚もたまにはフライデイ

土用はとつくにサタデイ

月桂冠は飲マンデイだが、旅の第一夜とあればそういうわけにもいかず、祝杯を挙げることになった。

十日、十時半、小谷先生が迎えに来てくださる。半年ぶりの再会である。

聞けばワット・パクナムのご住職は前立腺手術のため入院し、つい最近退院したばかりとのこと。また、アーチャン（河北副住職）はその後、緊急入院し、退院はしたものの、すっかり痩せてしまったとのこと。したがって今回の訪問はまず病氣見舞が主となった形となる。

理事長はまずお見舞を申し上げ、次に三人の

留学僧が世話になっていることに謝意を述べ、加えて筆者の私について触れ、「庫裡も完成し、副住職もきまり、そして目下霊園の新設を進めているが、なんとか日本一の霊園にしたいと願っているから、お仏舍利をお頒けいただけませんか」と懇願してくださった。

ご住職は、黒田のことなら承諾せざるを得まい」といったふうだったので、おかげでこれは実現可能の見込みがついたので、日を改めて奉戴に参上する旨を約して別れた。ついでアーチャンを見舞ったが、なるほど痩せて痛々しい感じだったが、反面かえっておごそかで気高い感じがした。

三人の留学僧のうち二人は公務で他出中、落合君だけしかいなかったもので、十三日に三人に会うことにして、そのまま退出しようとしたところ、食事の準備をしているからとのことだったので、サーラー（食堂）に赴き、清衆に食事

供養をして、ここで昼食をいただいた。

熊の縫いぐるみを持った小父さんの国

いよいよミャンマー入りである。

ミャンマーは日本からは直行便がないので、バンコクを経由するほかない。

ドムムアン空港に着いたのが午后二時過ぎ。

旅行者が搭乗手続をしている間、待合室の椅子に坐ると隣りが日本人で、元氣のない、沈んだ顔つきをしている。「どこへ行かれますか」と問うと、ネパールへ行くのだという。

「いやア、今回の旅行はさんざんですよ。四十人のツアーを組んだのですが、台風で出発が一日延びて半数がキャンセル。ようやくここに着いたと思ったら三時間半遅れですよ」

なるほどタイム・テーブルを見ると、カトマンズ行き二時発が五時三十分出発予定となつて

いる。たいへんだなあ、お気の毒に。それにく

らべて私たちは一時間足らずの飛行で到着できるミャンマー行きだし、遅発の掲示もない。この人たちが出発する時刻にはヤンゴン（ラングーン）に着くはずだと、その時そう思ったが、こちらもやはり思いどおりにはいかなかった。

バンコクヤンゴン間には、ミャンマー航空が一日一便、タイ国際航空が週に三便就航している。私たちは往きはミャンマー航空、帰りはタイ国際航空を利用することになっていた。

ガイドブックによると、ミャンマーの国民所得は一一三米ドルで、一九八七年に国連から最貧国と認定されている、とある。一一三ドルというと、一ドル一五〇円としても一六、九五〇円にしかならない。そんなに貧しい国の飛行機、はたしてよく整備されているのだろうか。安全なのだろうか。どんな飛行機が飛んでいるのだろうか、と考えると、カトマンズ行きの隣人のようにあまり明るい顔にはなれなかった。

搭乗手続を終えた旅行業者がキップを持って来たので所定の関門を通過して出発ロビーに入った。同じ国際線とはいえ、ここはまたまことにお粗末なロビーである。家庭用テレビ大の小さなタイム・テーブルに、ミヤンマー行きのゲートは六番と出ている。ところがキップには四番ゲートとスタンプが捺してある。

「どっちがほんとうなんだろう」とまた不安材料がふえる。それだけではない。刻々出発時刻が迫ってくるのになんの通告もない。とうとう出発時刻四時九分になったが、うんともすんともない。言葉は通じないし、周囲の乗客の動きを注視するほかない。

四時二十分、尾翼にミヤンマー航空の標識をつけた小さな飛行機が、滑走路に着陸態勢で入ってくるのが望見された。

「あれだな、あの飛行機が折返すのだな」と、ようやく状況が読めた次第。案の定、五時少々

前に搭乗開始となった。四番ゲートに集まった乗客を見ると、中古の扇風機を持った人あり、ラジオをかかえてる人あり、大きな熊の縫いぐるみを持ったチヨビひげの小父さんあり、一見してミヤンマーの人たちとわかった。バスに乗って飛行機に近付くと、機種はフォッカーか、七、八十人乗りの、耐用年数をとつくに過ぎたと思われる、ふるぼけて汚れた飛行機だった。

タラップを登って機内に入るのだが、遅々として動きがない。機内が狭いので手間取ってるのか、それにしても遅いなア、と思っていたが、ようやく機内に足を踏み入れてわかった。座席番号を無視してすわる人が多く、そのため席の入れ換えに手間取っているのだった。現に私の場合も九番のA席に進むと、例の熊の縫いぐるみを持ったチヨビひげの小父さんがすわっている。キップを見せると、ニヤッと笑って立ち上り、近くの空席に腰をおろした。そこへまた指

定の乗客が来たので、彼はまた立ち上って後部座席の方へゆかざるを得なかった。隈無く席をさがせばいいのに熊があるからでできなかったのたろうか。

乗客が座席につき終ると、お茶が出た。実にタイミングがよい。大きな飛行機だところはいかない。そして紙コップでなく本物の茶わんである。感触はいいが、果して清潔なのだろうかと思うと、やはり新しい紙コップのほうがいいような気がする。飛行機が上空に達すると弁当が出た。機内食といえたい。パターンがきまっているが、ここでは容器が菓子折りのサービスマンみたいなもので、十数年前の中国旅行の際の弁当と同じスタイルである。時代遅れなのか社会主義方式なのか、とにかく西欧化には一線を画している感じである。

帰りの飛行機に乗ってわかったことだが、ミャンマー航空を利用するものは自国民が大部分

のようで、外国人の多くはタイ航空を利用して見るように見受けられた。ミャンマー航空のふり小型機に対してタイ国際航空は国際航空の名にふさわしくA三〇〇の新型機で、乗務員も乗客もみな国際的な感じだった。

さて、飛行機がミャンマーの領内に入ると、一面緑の平野で、工業団地らしいものはどこにも見当たらない。また雨季なので当然のことなのかも知れないが、まるで大洪水のように広大な地域が水びたしになっていた。

「ミャンマーってたいへんな国だなあ」と心に呟きながらこうした単調な風景を眺めているうち、雨にけぶるミンガラドン空港に着陸した。

「ミンガラドン国際空港」といわれるが、どうみても国際空港とはいえそうもない。国際飛行場といったほうが適切かも知れない。

飛行機から降りて雨の中を場内の小さな建物

に足を運ぶとそこが入国管理事務所である。まるで取調室に入れられたようで、背筋にひやりとしたものを感じた。中国旅行がまだ一般化されてなかった昭和五十四年、浙江省の招きを受けて香港・マカオを経由して中国領に入ったのだが、関門に足を踏み入れた途端、同じような感じを強烈に受けたことを思い出した。その時は地続きであっただけに、外国から急に異国に入ったような感じだったが、今回もそんな感じだった。そういうえば男の人がロンジーといわれるロングスカートといったらよいか、腰巻様なものを着用しているのも異国風だった。何だか異次元の世界に来たようだ。

税関の検査はきびしく、まず所持している外貨を申告しなくてはならない。これは滞在中および出国の際の所持額と照合するためのもので、一ドル合わなくても出国許可が得られないというからおつかない。それからミャンマー国

内で高く売れそうなもの、たとえばカメラ、ラジオ、カセット、テープコーダーなどの電気製品の持ち込みは一々詳しくチェックされるし、カメラは二台以上は持ち込めない、といった風でなかなかやかましく、手続きが複雑である。

「こんなに複雑な仕組みでどうして大勢の入国者をさばくのだろう」と思ったら、この飛行機の入国者は私たち三人とドイツ人二人、計五名だけとのこと。そうだとすると、ある程度手続きを複雑化しないと時間が余って困るのかも知れない。

雨の中を、飛行機から建物の方に乗客の荷物を肩に担いで四、五人がやってくる。運搬車両はないのだろうか。それとも失業対策なのだろうか。雨の夕暮れだけにこちらもなんとなく減入った気持になった。

「荷物はこれですね」と、現地の旅行業者がいう。「そうだ」というと、運んで来た一人が手

を差しのべた。まだ両替もしてないので、止むを得ない、理事長が戦没者への供養のため持って来た煙草を一箱出すと、その男は「もう二人いるんだ」といわんばかりに二本指を立てる。さらに二箱をやると子供のよう嬉々として立ち去った。

手続きを終えて建物の外に出ると、大勢の人数がたむろしていた。見送りでも出迎えてもなさそうだ。何か仕事にありつけないかと待機しているように見える。小さな子供が近寄って来て、手を差しのべて憐みを乞う。「かわいそうだなア」と思い、それにしてもこの貧困の原因は一体何なのかと考えさせられた。

ミャンマーは百年ほど前にイギリスの植民地となったが、第一次大戦の頃から独立運動が起こり、四十三年前（一九四八年、昭和二十二年）一月、イギリスより完全独立を達成し、「ミャンマー連邦社会主義共和国」となり、対外的には

非同盟政策のもと、激動するアジアの情勢の中で鎖国的ともいえる中立主義をとり続けて今日に至っている。

二十九年（一九六二年、昭和三十七年）総司令官ネ・ウインはクーデターにより政策を掌握し、憲法を停止し、国会を解散し、革命評議会を主宰し、農民と労働者を基盤に公正にして豊かな社会主義国家を建設しようとした。しかし、軍備の拡張やあまりにも急進的な国有化政策などで経済は低迷し、失業が深刻化し、三年前の六月、ヤンゴン市内で学生が暴動を起こし、デモと暴動は全国にひろがった。翌月ネ・ウインは一党独裁制から複数政党制への移行を決定した。ところが軍部が実権を掌握したままで、昨年五月におこなわれた国民投票の結果はまだ黙殺された形のままである。

少数民族の複合体であるミャンマーには少数民族の反政府運動が絶えず、また共産党勢力の

反乱工作などにより国内治安は不安定にさらされ、加えて社会主義体制の内部矛盾と鎖国的な立政策により国内経済の窮乏化は深刻である。と、ガイドブックは述べている。

迎えのジープでインヤ・レーク・ホテルに向かう。空港から約二十分、市の北部にあるインヤ湖の湖畔に建つこのホテルは、独立直後のミヤンマーが国威を内外に宣揚するために建造されたものであろう、豪華な大ホテルである。だがその後鎖国的な状態にあつて観光客が減少したためか、建物が豪華な割には整備、管理がゆきとどいていない。大きなルームに通されたら、まずカビ臭い匂いにおどろいた。

こんなに素晴らしい自然環境のいい国に一日も早く多くの観光客がやってくるように望まれてならなかった。

炎天樹下忠魂を弔う

第二次大戦中、約三十万余の日本軍がミヤンマー（ビルマ）を戦場として戦った。そして十八万人がここで戦死している。戦跡慰霊巡拝団が毎年この国を訪れている。しかしかつての戦友も高齢化したため、その数は激減の一途を辿っているといわれる。

ヤンゴンには二つの日本人墓地がある。一つは市の東部タエムにある。これはもともと在留民間日本人の墓地だったが、戦後、日本将兵が捕虜生活中に英軍より資材援助を受け、慰霊碑を建立し、秘かに保有していた戦友の遺骨の一部をこの地に埋葬したという。

いま一つは、戦死者の遺骨を日本に送ることが事実上不可能となり、英軍からの没収をさけるためチャンドウ墓地（市の西方）に埋葬したという。いずれにも鉄扉に「日本人墓地」と大

書してある。

両方の墓地に足を運び、理事長が日本から持参した塔婆を立て、酒、煙草、菓子を市内で求めた美しい花と共に供えて二人で読経回向した。終戦以来四十七年、戦場を知らない人にとっては戦争体験はすでに風化しているかも知れないが、数年間戦場に身をさらした私にはまだ鮮烈な思い出が体のどこかに残っており、それが折に触れて噴出するのである。

遠到緬甸塔様新（遠く緬甸ミャンマーに到れば塔様新たなり）

炎天樹下弔忠魂（炎天、樹下、忠魂を弔う）

丹心報国凝無返（丹心たんしん国に報じ、凝こって返ることなし）

合掌低頭熱涙頻（合掌低頭すれば熱涙頻しきりなり）

慰靈碑前にて



香語を唱えた私に、半世紀前の戦場体験が蘇ってきた。(註・以下文中表記は戦時中のまま)

終戦当時、私は上海にいた。昭和二十年八月十一日、上海では、中国側の新聞が一斉に日本がポツダム宣言を受託して無条件降伏した旨を書き立て、待望の和平が到来したことを報道した。するといつの間に準備していたのか、米・英・ソ・中四ヶ国の国旗を手に手に打ちふつて勝利を謳歌する上海市民のデモ行進が開始され、日本人は軍人であろうと一般邦人であろうと、石を投げられ、ツバを吐きかけられ、市街にはわかに騒然となり、状況まことに樂觀を許さないものがあつた。日本人の或る者は「これはデマだ。謀略だ。騙されちやいかん」といい、また或る人は「いや、ほんとうだ。日ごろ心配していた最悪の事態がついにやって来たのだ。こりや、たいへんなことになったぞ」と、深刻

な不安におののくのであつた。

安岡上等兵は、こうした雰囲気生き抜くにはあまりにも純情というか単純な男だつた。上海在住の伯父の病状が悪化したので外出許可を受けて見舞つた彼は、伯父の死期の近付いたことを知らされ、重い足取りで病院から隊に戻る途中、上海市民のデモ隊にぶつかり、さんざんな目に会つた。すでに正常な判断を失つた彼は、隊に帰るなり強い酒をあおり、酔っぱらつて拳銃を持ち出し、空間に向けて一発ぶっぱなし、びっくりしている戦友たちに向つて、「安岡上等兵は戦争に負けるような日本に用はない。おう、戦友！安岡の最期を見ておれ！」と、わめき立てて拳銃をこめかみに当てようとした。その時、狂乱の彼に素早く飛び付いて拳銃をもぎ取り、彼の命の破滅を未然に救つたのは内務班長の津村軍曹だつた。(注 私の部隊は無線探査隊といつて敵の無線スパイを探査する特別部隊だつた

ので兵隊たちも小銃ではなく拳銃を持っていった）

この日はいま思い出してもゾツとする混乱の日だったが、翌十二日は薄気味悪いほどの静寂が街全体を包み、そして十三、十四日と混沌とした日が過ぎて八月十五日、最悪の事態は遂に明るみに出た。神と仰ぐ天皇陛下が御自らラジオを通じて放送されるという前代未聞の一瞬がやって来た。白布をかけた机の上にラジオ受信機を安置し、その前に中隊一同が整列し、私の号令で最敬礼し、気を付けの姿勢で玉音放送に耳を傾けたのだが、どうしたものか電波の動揺が甚しく、実に聞き取りにくく、中には、忍び難きを忍び、耐え難きを耐え、今後一層奮励努力せよ、とはげましのお言葉をいただいたものと勘違いして万歳を三唱し、何はともあれこの感激をと、乾杯して気焰をあげた部隊もあったほどだった。こうした笑えぬ喜劇を演出したそ

れほど聞き取りにくい受信状態だったのだが、この玉音放送を聞いた将兵の心理状態はそれ以上に把握しにくい複雑なものだった。

午后になると上海の街の目抜き通りの建物という建物の窓や壁には青天白日旗や米・英・ソの国旗や、「蔣首席万歳」「中国陸軍大戦勝万歳」「和平再来」「慶祝中国解放」といった文字をつらねた垂れ幕が公然と掲げられ、馬車マオチオや黄包車ワンパオチオ（人力車）までが勝利の旗をなびかせて街を走るといった変わり方だった。

ついにきたるべき時がきたのだと、頭では承知していても情においてこれを信じ切ることができない未練がある場合、人はともすると現実の傍にいま一つの現実を設けてそこに逃避を試みるものである。大命の絶対を信じ、かつ実践することにつとめて来ておりながら、支那派遣軍が大命とは別個に独自の行動をとってくれることを強く願ひ、また必ずそうなるであろうこ

とを堅く信じて疑わなかったのは、ひとり安岡上等兵のみではなかった。

何かしらの嬉しいひびきを与える「身边を整理して待機せよ」という司令部よりの指示。

出動準備を要求するかのような「和戦両様の構えで次の指示を待て」という部隊本部からの連絡。乱れ飛ぶデマ。まことしやかな希望的憶説。

「おい、陸戦隊ではまだ依然として陣地構築をやってるぜ」「陸戦隊じゃ最後の一兵まで戦うといってるよ」「そりやそうさ。陸戦隊が上海を捨てることは国賊になるよりつらいことだからなア」「司令部は七割までが決戦論だそうだが、お偉ら方のほとんどが和平論で、なかなか方針がさだまらんそうだ」「老頭児（年寄り）は駄目だなア。たたき斬ってしまったわにやいかんよ」「大体、支那派遣軍は無キズじゃないか。それになんといっても自活態勢がすっかり整っているからなア。人だって糧秣だって、武器だって弾薬

だって、何一つとして内地から補給してもらってるものはないんだ。内地からの補充はとつくの昔にとまってるんだからなア。いや、却ってこちらから内地に補充してるくらいなんだから絶対大丈夫だよ」「……」「……」

寄るとさわるとこんな話が語りつづけられていたが、およそ希望的観測というものは、それが大きくまた強ければ、それだけに苛酷な現実の仕返しに会わねばならぬものである。

八月十六日午後、待望の軍事令が下達された。命令の大綱を示す第一条には次のように述べられていた。「支那派遣軍ハ大命ヲ奉ジテ矛ヲオサメル」と。

このわずか二十字にも満たない軍命令の一条によって、前日来のすべての希望的観測に終止符が打たれ、将兵はあまりにも苛酷な現実の真只中に放り出された。しかし、さいわいにも約二十四時間という時の流れは、前日の混乱し

沸騰した興奮をば、すでに過去の世界に追いやつていた。とはいふものの百万の若い生命の興奮を一つの例外もなく冷却することは創造主ですらなし得るところではなかつた。

右手を怪我して治療のため陸軍病院に通つていた正木兵長の帰隊がいつもより遅いのでふと気になり出すと、虫のしらせとでもいうのだらうか、中国人経営のある病院から、彼が拳銃の弾丸を胃と腸に打ち込んで生命危篤だからすぐ来てほしい、と電話が入つたのはこの日の午後四時頃のことだつた。

取るものも取りあえず病院に駆けつけると、瀕死の重傷を負うた正木兵長はかぼそい声で、しかしはつきりした語調で、「隊長殿、見苦しい姿をみせて申し訳ないであります。心臓を狙つたんでありますが、恥ずかしいことでもあります。手やっぱり腹ができてなかつたのであります。手がふるえて狙いが定まらずまだ死に切れないで

おります。しかし隊長殿、なんにも言わないでこのまま死なしていただきたいくあります。おねがいがあります」と述べ、やがて静かに瞑目したのであつた。

これはもとより覚悟の自決で、彼が私と戦友に宛てた遺書には「生きて虜囚のはずかしめを受けることを潔よしとしない帝国軍人の血の流れをどうしても阻止することができないから……」としたためられていた。

私は直ちに隊に戻り、下士官を集めて軽拳妄動を堅く戒めると共に、兵の監督指導に充分留意するようにと指示した。しかし、陛下のラジオ放送以来、他の部隊の将兵の中にも、また陸軍病院の看護婦の中にも、敗戦に対する悲観と憤りから自決した者があり、その噂がどこからともなく伝わって来ており、そうした他部隊の噂とともに、より身近な正木兵長の自決は、若い一団の生命に強いショックを与えずにはおか

なかったのである。良心的な、英雄的な、そして日本的な行為としての自決を礼讃する狂風は、すでに過去の世界に葬り去った興奮の焰を逆の方向にあおり立てていた。

混乱した興奮の沸騰し奔流する血潮が、いま正に現実に甦えろうとする不安定な、そして危険な状態におかれているこの日の夕方、私は、人もあろうに十一日すでにひとたび自決を企てた安岡上等兵の伯父が危篤に陥つたので、ぜひ彼を病院によこしてほしい、という電話連絡を受けとった。

私がいわゆる軍人らしい軍人だったら言下にそれを拒否したであろうが、相手のおかれている状態や、その抱いている心情を無視して、物事をドライに割切ることのできない私であり、ましてや敗戦下の異国の街で、肉親の死目にも会わしてやらないことは、たとえどんな理由があろうと、それはあまりにも冷酷過ぎる、そう

考えて私は安岡上等兵の外出を許可することにした。そして安岡上等兵に対し、堅く軽拳を戒め、絶対に間違つたことをしないと約束をとり、それでも心配なので小西軍曹を同道させることにした。

小西軍曹と安岡上等兵が出ていって二時間近く経過した頃、ふと、けたたましく電話のベルが鳴った。何かしら不吉な予感に襲われて受話器をとると、小西軍曹がフランス租界にあった河井家の門前で、肩間に拳銃弾を打ち込んで即死したというしらせであった。(注 私 の 隊 は 分隊ごとに分散して不審な電波の監視と方向探知にあたっていた。小西軍曹は協力者である河井家の離れの建物で勤務についていたので、世話になった河井家を訪れ、永遠の別れを告げて自決したのであった)

私はすぐ安岡上等兵の行った病院に電話したが、彼はすでに病院を出たあとだった。そこで

直ちに下士官に集合を命じ搜索隊を編成し、安岡上等兵が病院から帰る要所要所にこれを配置して、安岡上等兵を見つけたら有無をいわず連れて来いと命じた。

一方、安岡上等兵は病院を出て約束の時刻、約束の街角に来たのだが、小西軍曹の姿が見えないので、心配になり、小西軍曹の安否を遣えない、もし万一のことがあればとも隊には帰れないと思っていた。彼には小西軍曹と別れたことが悔やまれてならなかった。では二人はどうして別れたのか。

二人が隊を出ると間もなく、小西軍曹から「実は班長にも用事があるから別行動をとろうじやないか」といわれ、「班長殿さえよかったら」ということで再会の時と処を約束して二人は別行動を取ったのであった。

安岡上等兵がいよいよ不安になり、このまま待つても仕様がな、さてどうしようかと思っ

ていた時、うしろに人の気配がして、「おい、安岡！」と、津村軍曹から利き腕をがちりと押さえられた。

「こんなにおそくまで一体何してるんだ。みんな大騒ぎしているのがお前にはわからないか！」

安岡上等兵は私の前に連れて来られ、「も、申し訳ありません。隊長殿、小西班長殿は帰られたのでありますか。……わ、わかりました。やっぱり、班長殿はやったんでありますか」

安岡上等兵は滂沱と流れる涙を軍服の袖に不器用にぬぐいながら、

「小西班長殿、どうして安岡を連れていってくれなかったのでしょうか。安岡、うらみまです。捕虜になってまで生きるなんて！中国人の下で働くなんて。二十三年間、この体を流れている血が血がゆるしません。隊長殿、安岡にも自決させていたかったです。安岡、一生

のお願いであります」

「安岡、自決、自決というが、自決は自殺と同じことなんだぞ。自決といえbaikにも男らしく軍人らしく聞こえるが、結局は生活に負け、競争に負けて自殺するのとかわりないことなんだ。自分自分の命を断つことは勇氣のいることのようにだが、実は弱い者の選ぶ道でしかないんだ。この隊長だって、これまで何度死のうと思つたかしない。しかしその都度、耐え難きを耐えて生きてゆくと、ころに人生の意義があるんだと思ひ返してより強く生きて来たんだ。」

安岡、われわれがいま一時の感情に負けて自ら命を断つたら日本は一体どうなるんだ。日本の再建にはおれたちの若い命と情熱が必要なんだ。われわれが日本を再建しなくては英霊が浮かばれないではないか。貴様、それでもいいと思うのか。安岡、生きるんだ。逞しく生きるんだ。強く生きるんだ。いいか、わかつたか」

こうして私は彼をなだめるのに翌朝までかかつたことを思い出したのだが、生きて虜囚の辱しめを受けず、この氣概をもつて東洋平和のためならばなんて命が惜しかろうと身を鴻毛の軽きに任じて、日本からもつとも遠かつたこの地で戦場の露と化した幾多の英霊のことを思う時万感胸に迫るものがあつた。

実は昨年六月、日本パクナム会の總會をワット・パクナムで開き、その際、戦場に架ける橋で有名なカンチャナブリに赴いて、そこで慰靈法要を盛大におこなう予定だつたが、ワット・パクナムの住職副住職の一行がアメリカ巡錫のため沙汰止みとなつた。気がかりになつていたが、さいわい今回、二人だけの読経ではあつたが、心からの慰靈法要ができて本当によかつたと思つている。何かしら肩の重荷をおろしたよな感じになつた。

心豊かな人びと

大乘仏教、小乗仏教という。読んで字のとおり、大乘とは大きな乗物、小乗とは小さな乗物。舟にたとえれば渡し舟が大乗。多くの人を乗せて迷いの此岸から悟りの彼岸に運ぶ。船頭は上陸しないで此岸に戻り、また人びとを彼岸に運ぶ。「これ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと発願しいとなむなり」これが大乘菩薩道である。小乗は一人乗りの小さな舟で、自ら舟を漕いでまず自分が彼岸に渡る。小乗仏教の坊さん達は二二七の戒律を堅く守り、自らの悟りのために修行にはげむ。信者たちは坊さんの衣食住のすべてをまかなくてくれる。そうした信者に支えられ、信者の代表として、身代りとして修行にはげんで悟りの岸に至る。

同じ仏教であるが大きく違う。ただ、大乘に對する小乗では輕蔑の印象がなくもないので、

小乗といわず上座部仏教といわれるようになってきた。ちなみに日本は大乘仏教、インド・スリランカ・タイ・ミャンマー等は上座部仏教である。

『維摩經』に「問疾品」という一章がある。問疾とは読んで字のごとく病氣を問うこと、病氣見舞のことである。これはどういふことかというところ、維摩という名の居士が病氣になる。いや、病氣の状態をあらわす。それに対してお釈迦さまの弟子が維摩の病氣を見舞い、病状をたずねる。すると、維摩は自分の病氣にかこつけて大乘精神を説くのであるが、その維摩の言葉に「衆生病むを以ての故にわれ病む」という有名な一句がある。衆生とは生きとして生けるものすべてを指すが、「人」に限定して考えたらわかりやすい。衆生病むを以ての故にわれ病む——大勢の人が病氣になっているから私も病んでいる、というのであるが、これは一体どういふことなのであろう。

「衆生病むと以ての故にわれ病む」という維

摩居士のこの言葉に関連して思い出すのは、「一人の乳児が牛乳を飲み得ないでいる間は、おとなは決して牛乳を飲まないということが社会主義だ」という言葉である。これはレーニンの言葉だそうだが、社会を離れて個人はなく、個人を別にして社会はない。そうであれば、子供の救われる道が確立しないでおとなの助かる道のあるうはずはない。そしてまた、一切衆生の救われる道が明らかにならない限り、自己の救済はあり得ない。それ故に牛乳を飲まないで泣き叫ぶ乳児の声を、自らの魂の号泣として内面化し、牛乳を飲めない社会と絶えず対決してゆく、これが真の社会主義者の実践である。同様に、社会悪を自らの悪徳として苦悩し、理想社会を具現すべく絶えず現実の社会悪と対決してゆく、これが大乘菩薩道である。

こう考えてくると、いろいろ疑念が湧いてく

る。

レーニンの理想を掲げながら、現実にはその理想に反した政治がおこなわれて来たため、民衆の総反撃を喰らって社会主義国は次々に音をたてて崩壊し、レーニン像はひきづりおろされた。ミャンマーはいま牛乳を飲み得ないで泣き叫ぶ乳児の声が巷にあふれており、国民は食うや食わずの生活を強いられている。ミャンマーの政治はこれをどう救おうとしているのである。一人の乳児が牛乳を飲み得ないでいる間は、おとなは決して牛乳を飲まないという社会主義の理想が達成できるのであるか。

そして、こうした中で坊さんは托鉢の伝統を堅くまもっており、信者はまたうやうやしく供養をしている。これが日本だったらどうだろう。「てめえが食えねえのに施しなどできるか」

と、托鉢僧を無為徒食の輩として非難するであろうが、ミャンマーの人たちにはそんな気風は

みじんも感じられない。まことに敬虔な態度で
供養している。

また、托鉢する側に立って考えてみると、お
釈迦さまの法を継いだ摩訶迦葉尊者は、貧しい
家を選んで托鉢したというように、貧しい中で
の布施こそ真の布施に価する。その布施の心を
養つてやるためにも貧しい人への托鉢は大切な
のだ、とは思いつつも私ども日本人に果たして
それができるだろうか。

「衆生病むを以ての故にわれ病む」托鉢に出
るよりは救済の道を講ずべく思いを致すのでは
なからうか。それは昔の高僧名僧の事跡に明ら
かである。また現に曹洞宗ボランティア会が上
座部仏教の国タイで救済活動を展開しているの
がそのいい例ではないか。この運動の源流は十
数年前にさかのぼる。カンボジア難民がタイ領
内にどつとなだれ込み、方々に難民キャンプが
急造され、これが救済が世界の話題となった。

曹洞宗は逸早く調査団を編成した。私は大本山
総持寺代表としてこれに加わり、タイに渡って
難民キャンプを視察し、救済の方途を模索した。
そしてワット・パクナムはじめ二、三の有名寺
院を表敬訪問し、難民救済についての上座部仏
教の対応の在り方をさぐった。

「それは政治に利用される危険性がある。仏
教教団のやるべきことではない」というのがそ
の返答だった。

同じ仏教でありながら、どうしてこんなに違
うのだろう。小さな舟に人を乗せれば転覆して
しまう。それもそうだがなアと思つてると、二
人の少年僧がやってきた。鉄鉢の蓋の上にはバ
ナナが二本載っている。黒田理事長がチャット
紙幣を鉄鉢に載せて供養したままではよかった
が、私たちは帽子をかむったままの姿だったこ
とが写真を見て反省させられた。ミヤンマーの
人はこうした慎みのないことはしない。供養し

てひざまずいて合掌するのである。

ヤンゴンの街は美しい。二百五十年前、アラウンパヤ王がミャンマー全土を平定し、王朝の都をパゴーからこの地に遷して、「戦いは終わった」という意味のミャンマー語である「ヤンゴン」という名をつけた。それから百年後、イギリスが占領して「ラングーン」と改名して近代的都市づくりをはじめた。そして一昨年「ヤンゴン」と元の名に改められた。

市街は整然として、処々に木立の生い茂った広場があり、パゴダや記念碑がいたるところに立っている。パゴダの中でひとときわ目立って有名なのが、*聖なる金塔*を意味するシュエダゴン・パゴダで、街を見おろす丘の上に屹立している。その姿は雄大にして荘厳、まことに美しい。高さは九十八メートル、円周四百二十六メートルという世界最大のもの。このパゴダは

少年僧と





老僧と

五百八十五年に造られた時は高さ二十メートルだったそうだが、その後王朝の推移するなかで、権力の強かった王たちが拡張し、十五世紀の頃に今のような形になったという。このパゴダの中には五千個以上のダイヤモンドが収蔵されており、その周囲に四つの大きなパゴダが配置されており、六十四個の小パゴダ群が取り囲んでいる。その中を歩いているとミャンマーの人たちが親しそうに近寄って何やら話しかけてくる。戦争中はいろいろ迷惑もかけたであろうが、イギリス軍と違って、日本軍や日本の兵士はミャンマーの人たちにたしかにいい影響をあたえている一面がある。それがミャンマーの人びとの仏教精神に基づく寛容な気質と相俟って、同じアジアの国である日本と日本人に親近感を抱いているといえる。

一人の老僧が近寄って来て、「あなたがた日本人だな」と話しかけ、「日本の兵隊知っている。

西村、滝沢、」といかにもなつかしそうである。

「あなた、お齡は？」と訊ねると、「七十六歳」だという。私より一つ年うえた。だとすると戦時中は同年輩の日本兵と、独立運動などであるいは行動を共にしたこともあるのかも知れない。

同じアジアの人として、同じ仏教徒として、心豊かにして人懐かしいミヤンマーの人たち、その心のように経済的にも豊かになってほしい。そしてつと自由に往来できる国になってほしい。

ヤンゴンの北東約八十キロのところへペグーという古都があり、ここには『ビルマの豎琴』に出てくる有名な寢釈迦仏がある。この寢釈迦仏を拝観するため、ガタガタ道をクツシヨンの堅いジープを飛ばして往還した。

寢釈迦の像は今から千年前に造られたという

ことである。非常に均整のとれた優美なもので、全体がまるで生きてるかのように見える。全長は五十五メートル、肩の高さ十六メートルという大仏で、レンガ造りの本体に漆喰を塗ったまっ白な姿で横たわっているが、ペグー王朝の滅亡と共に忘れ去られ、密林に覆われた丘のようになって人知れず百二十年もの間眠っていたという。たまたま鉄道工事用の土を求めてこの丘を掘りはじめたインド人技術者が発見し、世界最大級の寢釈迦像として知られたのだという。今から百十年前のことである。その後完全に修復され、今は大屋根で保護されている。

寢釈迦という涅槃像を連想しそうだが、そうではなく、休息しておられるお釈迦さまの姿なのである。二月十五日の厳しい寒さの中に拝む厳肅な涅槃のお姿ではなく、暑い南国で見受けするおおらかなお姿といった感じである。

留学僧との語り合い

十三日、ホテルで目を醒ました時、「ああ、バンコクに戻ったんだな」と、ホッとした気持ちになる。

朝十時、小谷先生はじめ三人の留学僧が見える。小谷先生のオフィスの近くの日本料理店「花屋」に出向き、黒田理事長が三人の留学僧に食事をお供養し、終って座談会をおこなう。

黒田 一昨昨日ワット・パクナムに拝登しました時、お二人他出でしたが、今日は三人そろってお出ましをいただき本当に有難うございました。

今回『成寿』第十八号の取材のためミャンマーに行き、昨晩帰って参りましたので、この機会に皆さんにお食事を供養させていただきます、ついでにせっかくのお集まりですから座談会を開

きたいと思えます。司会は佐藤ご老師にお願いします。

佐藤 またバンコクにやって参りました。来るたびごとに小谷先生には万事万端お世話をおたいただき、また本日はお忙しいところご出席いただき本当に有難うございます。

また三人の留学僧の皆さんの元気な姿に接し、嬉しくまたたのもしく存じます。方丈さんがいづつどいを設けてくださいましたので、皆さんのご修行の現況、そして将来の方針や育英会に対する要望などお聞かせ下さい。

まず最初に落合君から：

落合 こちらに来てもう半年になりました。

私はタイに来る前からタイにおける仏教の役割というか、仏教がどんな姿でタイの社会の中に生きているのかを知りたいと思っていました。こちらに来てみて思った以上に仏教が社会の隅隅にまで浸透し生きている姿をみて感服し



ております。

たとえば一時

僧（注 タイ

では男子二十

歳に達すれば

多くの人が一

時仏門に入っ

て修行する。

それを一時僧という)の方が百五十人ほど三ヶ月間修行してますが、起居容儀を見ても、話を聞いてみても、ただ伝統や習慣だからというのではなく、本当に真剣に修行にはげんでおります。

佐藤 小谷先生、一時僧は減ってきたと聞いてますがいかがですか。

小谷 坊さんは朝托鉢に出ますが、その数を見ると確かに減っています。だからといって一時僧が減ったというわけではありません。お互い

だんだん忙しくなってきたし、また寺の方にも托鉢に費す時間を勉学にふり向けたという考えもあり、食物を現物で寺に持ち込むケースが多くなりました。形が変わって来ただけで数が減ったわけではありません。

佐藤 信仰の面では変りないのですね。

小谷 そうです。

佐藤 品田君、ひとこと…

品田 私の場合はこの国で修行してみたいといういわば好奇心がもとで、あまり予備知識もなくやって来ましたが来てよかつたと思えます。日本にいる時はこの国の仏教を「小乗」といって一段低いもののように思っていました、来てみますと違います。たとえばご住職の日常を拝見しますと、日本ではあまりお目にかかれないような偉いお方で、言葉などではなく体に力量が溢れている感じです。そのほかいろいろありますが、まだよく整理されておりません。

佐藤 では水野君。

水野 私は外国ははじめてですし、またお二人と違って来て間もないのでまだよくわかりませんが、日本でお授戒の時須弥壇の周りを戒師様はじめ主だった役職の人びとが「衆生仏戒を受ければ、即ち諸仏の位に入る。位大覚に同じうしおわる。まことに是れ諸仏のみ子なり」と唱えながらまわりますが、戒法を受ければそのままお釈迦さまである。得度を受けた坊さんはみなお釈迦様なのだ、そういう信心から坊さん



水野師

を大事に敬ってくれるのだと感じました。日本には坊さんをお釈迦さまの身代りとして見る考えはないと

思います。それで私は帰国していったい何が出るかを考えていますが、日本の仏教の流れを変えることはできませんが、寺に入ったならば寺檀一致協力して寺をもりあげ信心を培養してゆくことが大事だと思つてます。また、大乘仏教と上座部仏教、だいぶ違うところが多いのですが、同じ仏教なので共通点もたくさんあると思いますし相互理解を深めてゆくことが大切だと思います。

落合 上座部仏教についての理解を深めてゆくにはタイ語の勉強が必要です。私は相当長くタイにいるつもりですので、本格的にタイ語の勉強をしようと思つてます

佐藤 頑張ってください。期待してます。日本の仏教に欠けたもの。まず第一に戒律が挙げられるかと思ひます。上座部仏教の坊さんは二七の戒律を堅く守っておられる。だからこそ坊さんは私たちの身代りとなって修行しておら

れる。お釈迦さまの身代りなのだとして帰依を受ける。日本にはそれがない。だからその点に活を入れる必要があるのではないかと考えますが、どうですか。

落合 日本でもそうですが仏教にまつわるいろんな行事があります。そんな時ワット・パナムには千人近くの人が集まります。蓮の花を持って一人一人が何かを祈っている。その姿が実に真剣そのもので神々しく感じられますが、日本ではガヤガヤ、ワイワイ、まるで雰囲気



小谷氏

違うんです。年に何度かでもこうした神聖な時間を持つてるといふことは本当にしあわせなことだと思いま

す。日本でもこうした静かな神聖な時間を持つことができないわけではないと思います。

佐藤 小谷先生、その点、どうでしょう。

小谷 日本では、仏教徒でありながら、寺詣りをしない、手を合わせない、そういう人が多いのですが、ここはもうしょっちゅう手を合わせる。寺詣りをする。これはえらい違いですね。タイでは国王自ら仏教に帰依し、ありとあらゆる儀式はすべて仏式でおこなわれている。それだけに坊さんはそれにこたえるべくしつかり戒律をまもって修行しなくちやいかんわけです。

佐藤 皆さんはいま、日本仏教とは違った意味の戒律生活に入ってるわけですが、戒律生活についてうかがいましょう。まず一番つらいのは何ですか。

品田 女の人と話してもいけないというのはつらいですね。(笑声)日本ですと女の友だちもありデートしたり酒飲んだりできますが、こち



らでは握手などはとんでもないこと（笑声）視線が合うだけでもいけない。タイにはきれいなひとか多いんで（笑声）。これ一番つらいです。あとは、来た当時、一日二食というのがつらかったです。最近はやく慣れました。戒律というのは、つらいつらいと思ってるうちはまだまだで、自然に慣れてくると自分のものになった感じですので、その積み重ねが大切だと思います。

日本での修行はいわば全体主義的な感じのものだが、こちらには上の人からとやかく注意されるようなことはない。全て自主的なものですから、どうある

べきかと常に自ら模索してゆかねばなりません。そういう意味では凄くきびしいものです。

水野 お店に入って買物などする場合、女人から直接お釣りを手渡して貰うことができない。はじめは戸惑いましたが、このごろは慣れました。戒律は二二七もあり、全部よく知っておりませんので、時に破つてることがあります。同じく得度したタイの友人から、「懺悔しなさい」といわれることがあります。「なんで？」と聞くと、「お前歌を歌ったろう。あれはいけないんだ」と注意されました。私が小声で歌を口遊んで、「この歌知ってるか」といったのがいけなかったのです。こんな風でようやくわかりはじめたという段階です。

落合 戒律二二七といいますが、それ以上あるともいえるし、逆にそんなにもないともいえると思います。細々としたことで戒律にはないが暗黙の了解で、これはしないことにしよう、

ときまってるものがある。そうすると二二七以上になります。反面、タイでは仏教が生活化しており、一般の人びとが戒律をある程度知っているのも、まもらざるを得ない状態にあります。戒律でなくあたりまえの生活になってるんです。そうなると二二七以下ということになります。ですから戒律をまもることがきびしいというような感覚は全く持ってません。

ワット・パクナムは瞑想の寺として有名なもので、瞑想について話し合ったが録音状態不良でよく聞き取れない箇所が多いのでこの項割愛する

佐藤 貴重な体験談をお聞かせいただき有難うございました。

では、今後どのような道を歩まれるのかお聞かせください。

黒田 九十日の安居が済めば大事な修行が一段落するわけですから、あとは各自自由行動にしてください。一年で帰られる人はタイのいろ

いろのお寺をまわって勉強なさるなり、またインド仏跡を参拝なさる方はそのままの姿でゆけばいろんな面で都合ですが、戒律の問題などでむずかしい点もありますので、その点は小谷先生にご相談して失敗のないようにしてください。とにかく見聞をひろめることが大切ですから頑張ってください。

佐藤 落合君はどうしますか。

落合 私はいられる限り長くここにおるつもりです。今後ワット・パクナムに来る人も多いかと思いますが、それらの人に何か役に立ちたいと思っています。

佐藤 ぜひそうしてください。

黒田 バンコクには小谷先生がおられ、一切の世話してくださっておられる。そしてワット・パクナムにはアーチャンがおられて寺の内での世話をしてください。小谷先生はアーチャンとの名コンビで日タイ仏教友好親善の最高功

労者であります。ただ残念なことにアーチャンが病気になられ、今後お世話をお願いすることは無理になって来た。落合君が長くおつてくれ、今までのアーチャンに代つて寺の内での世話をしてくださるなら、今後やつてくる留学僧にとつてたいへん有難いことだ。どこへおつても同じことだ。ひとつ頑張つてくれや。

落合 私は品田さんや水野さんのように僧侶ではなかった。その私がいまこうして出家生活を送っていることはそれだけでもすばらしいことです。いろんな形で協力させていただきます。それだけの力もないくせにおこがましいようですが、何とか協力させていただくつもりです。

黒田 私がタイに来たのが二十五年前、万事小谷先生のお世話になり無事安居を終えたわけですが、そのとき痛感したことは言葉が出来なくて、ということでした。タイの次にアメリカに行きましたが、ここでもやはり言葉が出来

なくてはと思いました。それでなんとか言葉のできる人を造りたい、育成したい、そういう思いがあつてはじめたのがこの育英会です。言葉ができるだけでもダメ、心があるだけでもダメ、心があつて言葉ができる。そうでなくてはならない。これは一日二日でできることではなく、「相続や大難」何十年と続けてはじめて出来ること。それだけにむずかしいがどうか頑張つてほしい。

佐藤 品田君は：

品田 どうしたらよいか私はまだ迷つてます。日本に帰つても入る寺はありませんし、一僧侶として生きるか。養子になって寺の住職となるか。あるいはまだしばらくここに居るか。それともネパールにいつてラマ教の学院に入るか。まだきめかねております。バン格拉デッシュからの安居僧が友達ですので、安居が終つたら彼といっしょにバン格拉デッシュに行き、イ

ンド仏跡を参拝して来たいと思っています。

佐藤 水野君は？

水野 私は安居が終つたら十一月からタイ語学校に入り、いろんな人と話ができるようにしたい。せつかくタイに来たのだからこの国の人びととの出会いを大切にしたいと思つてます。

黒田 来年度の留学僧、目下募集中ですが、タイを希望する人があるかも知れません。その時は負担にならない程度でいいですから面倒みてください。

佐藤 育英会に何か望むことはありませんか。

落合 これ以上のことはありません。感謝でいっぱいです。

品田 やはり一番困るのがタイ語ができないということですね。それで留学希望者があれば、派遣までの間にタイ語の基礎を勉強させていたただけるようでしたら有難いと思います。

黒田 二、三カ月では無理じゃないかと思う。

アメリカにはタイと同様九名の人を送つており、これは今後の課題で充分検討する。タイのほうは体験の生活だから語学力は検査の対象としない方針である。

水野 永平寺では毎年一人を海外に派遣しているが、総持寺の方でかつてはあったそうで今はありません。それで善光寺育英会の方から総持寺にはたつきかけてもらえたらと思います。

総持寺の雲衲にも希望者があると思います。

佐藤 昭和五十一年「仏教タイム」主催で「総持寺の海外布教を考える」というテーマで座談会がありました。その際黒田方丈が、タイに留学僧を派遣してはと提案されまして、私も共鳴しました。当時私は本山の出版部長でしたので内部の根まわしをし、翌年二名の学僧をワット・パクナムに送りました。これが三年続きでしたが、希望者がなくなつて来た。雲衲にいわせると帰つたあとの報恩安居（義務安居）が長

過ぎるといい、本山側にいわせると適格者がいないという。こうしたことて四年目からストップ状態となった。黒田方丈はこの頃から「人まかせてはだめだ、独力ででもやらなくては」と心に決するものがあつて、昭和五十九年、構想が順熟して翌六十年より派遣に踏み切つたのであつて、総持寺の場合はもう試験済みなのです。本山でやらなくとも善光寺でりっぱにやつてるんですから、それでいいじゃないですか。

もう時間が来ましたので、これで終わります。どうか皆さん、頑張ってください。小谷先生まことに有難うございました。

夜間飛行

若い頃「夜間飛行」という、ちよつと評判になつた洋画があつたが、その題名のごとく、ドン・ムアン空港を十時二十分に発つて翌朝六時五分成田に着いたのだが、出発前、空港で案じ

ていたトラブルがあつた。

黒田理事長と私はアーチャンから仏像をいただいた。その時私は、[、]持つて帰れるのかな[、]と不安に襲われた。というのは十数年前はじめてワット・パクナムを訪れた時、ご住職から仏像をいただき、意気揚揚と空港に来たところ、仏像の国外持出し禁止だという。せっかくだいだいた仏像、没収されるのも心外だったのでタイの旅行者に「何かいい方法はないか？」と訊ねたところ「チップを出しては？」というので五千バーツを出した。しばらくすると旅行者者ニコニコしながら帰つて来た。首尾よく事が運んだんだなと思つてると予想以上の上首尾で彼はファースト・クラスの切符を手渡してくれた。「これはどうしたの？」と訊ねると、その返答がふるつてる。曰く、「日本の高僧が有難い仏像を持つて帰られるのだからエコノミー・クラスでは失礼だから」とのこと。おかげで仏さま

の功德で生まれてはじめてファースト・クラスに乗ることができた。

さて今回、果して仏像の持出しでできるのだろうか。小谷先生に聞くと、「ワット・パクナムからいただいたといえは大丈夫」という。ところが空港の係員は「証明書がないとダメだ」という。さいわい二人の留学僧が見送りに来ており、タイ語のわかる落合君が説明してくれるがなかなか首をたてにふらない。しかし相手が坊さんなので自分たちだけで判断してはまずいと思つたのだろう。上司を呼んで来た。よく説明すると、部下に対する手前もあつてか、今度だけは！とといった調子で通してくれた。このたびは高僧にはしてもらえなかつたが、まさに出家功德のひとつ幕であつた。

このごろは全日空もタイに乗り入れ、同じ二十分にJALとANAの飛行機が同時に飛び立つといったふうで、夜間飛行の乗客も多く

なり、サービスも向上したという。眠れば時間の節約これに越したことはない。

成田に着くと、出発の日の朝のような天候状態だったためか、五日間見つけた旅行の夢から覚めたような感じだった。

著者略歴

樋口英夫（ひぐち・ひでお）

一九四八年、北海道生まれ。報道写真家。日本写真家協会会員。日本およびアジアの伝統的な暮らしを続ける人々を対象に取材を続けている。主な著書に写真集「日本のにしん漁」がある。

杉江幸彦（すぎえ・ゆきひこ）

一九五一年、愛知県生まれ。中央大学法学部卒業。上座部仏教圏の東南アジア取材とともに、日本と深い関わりをもつ中国の人々の取材も継続している。

主な著書に、樋口との一連の共同作業によるミャンマーを取材した『黄金のバゴダ』（佼成出版社）などがある。

仏の姿に打ち込みて

仏師 錦戸新観師に聞く

■ 錦戸 新観

出席 ■ 佐藤 俊明 (龍光寺住職・聞き手)

■ 黒田 武志 (善光寺住職)

錦戸先生との出会い

佐藤 おはようございます。五月下旬なのに朝から夏の陽射しの中、保谷市よりわざわざ御足労を頂きありがとうございます。

先日は、大日如来の脇仏として阿弥陀如来・薬師瑠璃光如来の開眼供養を滞りなく済ますこ

とができました。二年前には、大聖不動明王の脇立、矜羯羅・制陀迦の二童子をお造りいただき、これで善光寺の尊容も整ったことになりました。心から厚く御礼を申し上げます。

さて、錦戸先生と方丈さんとの出会い、どういうご縁でお会いなさったのか、そういう仏縁からお話し頂けますか。



黒田 それでは、私からお話しします。私は栃木の太田原市にある光真寺の六男として生まれました。昭和十三年一月一日に、長兄が五歳で亡くなったので、父は、その供養を兼ねてその後の子どもが無事に育つようにと、境内に「子育て地藏」を建立しました。子どもを亡くして悲しんでいる世の親御さんにもお参りしていただき、その功德を積むようと「自利利他の教え」を実践したわけです。また、明治の末に火災にあい、仮本堂だけで法事等をしていた頃から、求められれば、ささいな行事や宗派にもこだわらず、様々の人に寺を解放していたということですが。その一つに、真言宗金剛流栃木県本部が御詠歌の会場として光真寺を使っておりました。その役員の一人である本田さんに、この横浜の寺を持ったことを通知しましたら、早速訪ねてきてくださったのです。あの頃は、そまつな仮小屋の寺でして、ほんとうに「本来無一

物」からの出発でした。本田さんは「あなたがこれから立派なお寺を作ろうとするなら、私の知っている日本一の仏師、錦戸先生の仏像を安置すべきだ」と、おっしゃってくださいました。それですぐに、保谷市の先生のお宅におじゃましたのが、そもその縁です。そのときに立正佼成会の「久遠実成の南無釈迦牟尼仏」の尊像を彫られたのが先生だとお聞きしましたので、私もいつかきつと、先生に善光寺のために仏像を造っていただくこうと胸深く決めておりました。この誓願も十八年目になって、ようやくかになったわけです。高祖さまの御言葉「汝が一心、いまだ一心ならず」を肝に銘じて精進させていただいたおかげです。

あの時も、善光寺身代り不動明王の脇侍がないのでどうしたらよいものかと思ひ巡らしていたわけです。そうしていたらある日、霊夢をみせていただきました。不動明王が「錦戸新観師





矜羯羅・制陀迦童子

に頼め」と告げられたのです。道元禪師が、「夢中に夢を説く処、これ仏祖の国なり」と、おっしゃいましたが、この事情とは、意味あいはずれてきますが、私なりにストーンと心が決まったのです。

錦戸 あれはお昼頃だった、電話があつたのは。それより前に、高島屋の個展に来て、たくさんのお祝儀をおいていったので…(笑)、あの坊さんだと思った。お不動さまのお告げというので、こりやあどんなに仕事があつても引き受けねばならんと思った。ご本体のお不動さまが、霊験あらたかと聞いたもので、それを助ける二童子も似るようにつとめた。寸法も合わせたので、小さくて可愛らしいのができてしまった。

黒田 そうです。とても調和がとれて、愛らしい二童子です。

錦戸 私の作品は、依頼者にどこか似ている。戦争中、天台宗の妙見寺へ疎開しておった。そ

この檀家から金剛仏を二躰造つてくれと頼まれた。大豆くらいの面相だが、一つは丸く可愛い顔、もう一つは細長く古びた顔になってしまった。そのおじいさんが言うのには、これは孫娘で、これは婆さんだ、と。こういうのは、仏さまのお手配というのかね。瓜ざね顔の婦人に頼まれて、ふくよかに造ろうとしたのに、ノミが入り過ぎて面長くなってしまう。

佐藤 今度のはどうでしょうか。方丈さんですか。それとも奥さんでしょうか。(笑)。釈迦殿の客殿に奉安されました法華経湧出品のレリーフ。あの四菩薩にしても、善光寺の息子さんたちに見えてきますね。

錦戸 そう、どこか似ているはずだ。あれも、最初は、校正会の本殿に納まるはずだったのが、善光寺に来てしまった。

仏さまの導きで

錦戸 私は夜は八時に寝て、十一時に起きて、二時間くらい物を書いたり考えたりする習慣になつている。今度の阿弥陀如来さまを、夜中、静まりかえった処でみつめていると、今までとは違う表情で語りかけてくるような感じに陥る。深い思いやりのお顔を拝していると、仏さまのおはからいだとしか考えられない。私の技ではない。

仏間には、師匠から授か^まった秘仏がある。これは、お坊さんでも拝めないし、参拝させてない。師匠から預^かかる時に「よい香を焚いて給仕をしなさい」と申し渡された。だから、伽羅をたいている。同じ目方なら、金より高価だ。その功德によるものかもしれない。

この道で五十八年、八十三年の生涯を振り返れば、仏さまが導いてきてくださったとしか言

いようがない。これから、光真寺さんの釈迦三尊像にかかるが、平成五年まで他の何も出来ない。その後、念願の七観音さまがあるだけだ。果たして米寿まで命があるかどうか。

黒田 いや、先生は元気ですから、百歳まで大丈夫ですよ。六人の兄弟の観音さまと三十三人の分身観音さまを、楽しみにしてます。

錦戸 よい木はたくさん持つておる。松も楠も…。願い通りに出来るかなと考える時がある。でも、これも仏さまにお任せしたことだから…。
佐藤 それでは先生、制作するにあたって、仏像を彫刻する時の心構えのお話しをうかがいたいのですが。

錦戸 夏は四時、冬は五時には起きる。朝の勤行に二時間はかけている。七時に食事をして八時には仕事にとりかかる。いつもノミと槌を手にする前、制作中の仏さまにお拝して半時ほど祈願をする。夕方五時には一刀三礼して、香

を焚き気を静めてから、終りにしている。

よくどことが難しいかと聞くが、全部が難しい。特にお顔は全神経を使う。

昔の仏さまを観ると、たとえば京都の六波羅密寺や浄瑠璃寺の四天王さま、これらの股の下には原色のままの彩色が残っている。観えないところまで、きちんと仕上げている。

たいがい、依頼者からはこのくらいで造ってくれと頼まれる。その範囲内であるから、思いどおりに出来上がらないこともありうる。しかし、いくらお金を積まれても、出来ないことと断ることもある。やはり、お願いする人の心掛けだ。仏さまは、えこひいきをしない。ご利益がないというのは、自分が仏さまに尽くしてないからだ。

出来上がった仏さまが、依頼主に気に入ってもらえないということも難しい。たとえ、芸術的に完成していてもだ。仏さまを彫刻するという

ことは、信仰と技術と念願の三つが、一つにな
って造っていかねば良い仏さまは出来上がらな
い。その上で、誰が見ても自然に合掌するよう
な仏さまは後世に残っていくのだろう。自己満
足の芸術ではダメだと、戒めている。

佐藤 ですから、先生がお彫りになるものは、
依頼者が気に入らないということはないと信じ
ます。

一番大事なのは心

錦戸 芸術的にいうと、京都神護寺の薬師如
来さん、あれは観ていて息が詰まる。許してな
らない者は許さないと突き放し、人の三毒(貪・
瞋・癡)をにらむかのような御眼。逃げ場がな
くなる。このくらいのお師になりたいと思う。
後は、ほとんど彫っていないのだが、芸術的にい
ってもそうせざるを得ない。

それから、有名なお釈迦さまの苦行像もそう

左から錦戸師、黒田方丈、佐藤老師



だ。

黒田 あの、あばら骨のですか。確かパキスタンのラホール博物館所蔵ですね。ガンダーラ美術の最高傑作といわれておりますが。

錦戸 あれもやはり息が詰まる。裏に回って安心した。あれを全部仕上げたら、あの仏師は命を縮めたと思う。おそらく、手から粘土を離れた途端に寝込んでしまったのではないか。あれほど靈気が漂っているのだから。たしかに、人の姿をしていながら、人間を超えた気高い魂を——精神を表現したのが仏像だ。しかし、反対に仏さまを造らずにはいられない人々の不幸も思い知らされるようになった。それも歳のせいか。

人は、拝んで何もかも忘れたい気持ちと、失ってしまった心を仏さまに求めている。それに応えることができる仏さまをと、祈りながら彫っているのだが、難しい。恐ろしいことかもし

れない——魂を表現しようとするなんて。

佐藤 密教は加持祈禱が中心で、神秘的なものが含まれています。善光寺の大日如来はどうでしょうか。

錦戸 多くの人に愛されるように、ふくよかで大らかな美しさを出そうとした。大日さまは、太陽のように一切衆生の煩惱の闇を照らして、智慧の光明を輝やかす仏さまだから。

佐藤 そうですね。大いなる宇宙の母なるものを感じます。先ほど、方丈さんにお預けになった十一面観音を拝ませて頂きました。制作中、だいぶ苦労されたとお聞きしましたが。

錦戸 家内が二階の階段から落ちて、自分でも何もかもなくなってはならなくなりました。これも、仏さまが与えてくださったものと考えています。

あの観音さまは、国宝の法隆寺九面観音さまをお手本にしている。自信がある作品の一つだ。五年十年と年月が過ぎていけば、良く見えてく

るはずだ。次の世代はどう見るか、彫師としての楽しみだ。

黒田 先生の『仏との出会い』にも載っていますね。この本の内容が、すばらしいと皆様が申しております。この本を読んで、先生の愛好者が増えたと思いますか。

佐藤 そういえば、観音さまのお顔はどこか先生の奥さんに似ていますね。

錦戸 まあ、五十年も一緒に居るのだから。本来の喜怒哀楽でなく、場所によって顔の表情を使い分ける人が、昔に比べて多くなってきたと思う。たしかに生活は豊かになったけど、魂は貧しい。そんなことを考えて、十一面観音さまを彫った。多くの顔を統一する意味で、正面の慈悲の顔は、心魂を込めてノミを入れた。「俺に円熟はない。老境もない」という気持ちで。

黒田 その心掛けが、立派な仏像を造り、健

康につながっていると思いますか。

彫刻を超えた仏像

錦戸 この間、伽羅のよいのが届いた。白檀の巨いのも持っている。そういう木を見ているのは楽しい。この銘木には、こういう仏さまを造ってみたいと考えるのは、浄土に住んでいるかのような喜びだ。しかし、老いゆく体はままならないし、月日はどんどん過ぎてゆく。私の寿命は、どのくらいなのだろうと、考える時もある。

佐藤 先生、彫刻家はみんな長生きしていますよ。

黒田 体と腕と全部を使っているからでしょう。米寿・白寿と、まだこれから二十年もあります。

錦戸 でもね、七十を越えると疲れる。重労働だからな。木を見ては、やらなければなら

いと思うけど、身体がいうことを聞かない。

黒田 仏さまを形にするのですから、生半かなことでは出来ません。

錦戸 しかし、仏さまは本当に助けてくれる。

黒田 それですから、よい仏像が出来上るのですね。

私も身代り不動明王のおかげで、先生にお会いすることが出来ました。そして、この素晴らしい十一面観音さまもお預りできたことに感謝しております。この後背は、実にモダンですね。時代を超えているというのか。

錦戸 九面観音さまが、そうなっている。斬新な意匠だよ。

だから、すぐれた仏さまはいつまで経っても新しい。新しくても、古くさいのがある。それから、いかにも彫りましたという仏さま、そして常に彫刻を超えた尊い仏さま、と四つに分けて観ている。

薬師寺の薬師さんなどの、本当に貴い仏さまを観ていると、如来さまと菩薩さまがお話しされていくような錯覚をする。このように明るく力強く、しかも上品で美しい仏さまを造るとなると、これは非常に難しい。仏師を取り巻く文化や人々の精神のありようが、関^{かかわ}ってくる。何よりも、人々の仏さまに対しての真剣な祈りだよ。奈良時代の人々は、素朴にそうしていたのだろう。だから、今になっても若々しい如来さんを造れたのだ。

私も「精進を樂とし、精進を永遠^{とくわ}の命とす」を座右銘として、彫り続けてゆきたい。

佐藤 先生にはますますご健勝であられ、長生きをされて、後世に残る傑作をお造りください。今日は暑い中、ありがとうございます。

黒田 最後に、読者のために、先生の詩をご紹介します。文芸誌に掲載されたものです。道元禅師の『傘松道詠』に「聞くままに また

心なき身にしあれば 己れなりけり軒の玉水」
と、有名な歌があります。これに通じる詩だと、
私は思っております。祖師の歌は「聞声悟道」。
しずくの音を無心に聞いたときに、悟ったとい
うのです。先生の詩は「見色明心」。眼の対象に
なっている形あるものをよく観て、心を明らか
にしたと思います。万法に証されているとも感
じられます。

ゆめ

ちいさき花に

宇宙の命が宿り

一滴の水玉に

万象を映す

生死流転は

永遠の命なり

善き光悪き光りも皆ともに

我行ないの証とぞ知る

(このたび錦戸新観先生は、第二十六回仏教伝
道文化賞を授賞されました。)



くらしの中で読む『正法眼蔵』

おうさくせんだば
王索仙陀婆の巻

終回

成興寺住職 小倉玄照

概念と現実の遊離

かつての頃は、これほどではなかったと思うのですが、近年は各地で講演会とか研修会とかがしきりに持たれるようになりました。一般住民を対象にしたものもあれば、専門家のためのものもあります。とにかく日本中で毎日、おびただしい数の講演会や研修会が開かれています。私も、時おりそういう講演会の講師として招かれたりもするのですが、そういう場で話を

しながら、このごろは何だかむなししい思いが心をよぎることがあります。

私の話を聴講してくださるのはありがたいことなのですが、はたしてそのことによつてその人の生きざまがどれだけ変化するのだろうか——と思うと、つい懐疑的になってしまうからです。

先日、私の保育園の若い保母さんがある保育園講演会に派遣しました。いつもそうするのですが、その時も、後日、その内容や感想について

文書で報告をさせました。現代の幼児の特質や問題点、保育者が保育を展開して行く上で注意を払わなければならない点などがきちんとメモされて、講演の内容が大体私にも了解できるような報告書となっていました。ところが、講演の内容と自分たちが日常に行っている保育活動との接点³がその報告書にはないのです。講演は講演であって、現実の保育とは無縁なかたちでそれがまとめられているのです。

「私たちの保育している子どものいきいきしている姿は、その先生が問題にされた現代の幼児の一般的傾向、つまり、無気力、無感動、無関心、とは一味違うと思うのですが、その点はどう思いました。」

と、私は尋ねてみました。すると彼女は、首をかしげながら、

「はい、うちの子はみんな元気ですが……。」
と答えて、よくわからない風情です。短大を

卒業してすぐに私どもの保育園に就職した彼女は、他の保育園の子どものことは殆んど知らないのですから「今の子どもは」という一般的な表現でその問題点をことあげされると、いつも一緒に接している子どもたちをみなその範疇で考えてしまうのです。私の感覚からすれば、たとえ他の子どもに殆ど接したことがなくても、話の中でとりあげて語られている子どもの姿をイメージするときは、自分が日常に接している子どもと比較してそのとおりのか、或いは違うのかと考えると思うのですが、彼女たちはどうやらそうではないらしいのです。

私の講演を聴いて下さる人に対してある種のむなしさを覚えることが多いというのも、そのことと関わっています。つまり、例えば子育てについて、現代社会における一般的傾向を私が批判的に語るとき、そうだそうだ、とうなづいてくれているのですが、自分の問題としてう

けとめていてくれるのかどうか今ひとつ釈然としないからです。

大多数の人は、自分の生活や生き方を殆ど問題にすることなく、漠然と世の中一般の傾向を批判しているように思えるのです。それは、抽象化されたことばの世界、つまり概念の世界だけで問題の解決を考えていると申してもよいでしょう。

苦学おこたらざれ

いったいどうしてこのようにことばで築きあげられた概念の世界と、具体的な現実の生活とが遊離してしまう現象が顕著なことになってしまったのでしょうか。

もちろん、道元禅師の時代にもそういう傾向はあったのでしよう。ことばを取得した時から人間は、概念の世界と現実の世界の遊離を大なり小なり味わうよう宿命づけられているのです

からそれは当然のことなのです。

「苦哉くさい、祖道そどうりょう、陵夷りょういなり」

と道元禅師は、その傾向を嘆かれます。苦々しいことだ、自然の摂理に添うて生きる現実の生きざまこそが重要であり、それをまっとうなものにするためにこそことばや概念も必要であったはずではないか、ことばだけが一人歩きをするようでは、仏法の実践も地に落ちてしまったのではないか――。

道元禅師は、その原因について、生活が楽になることが大いに影響するという見方をしておられたようです。

「苦学おこたらざれ」

苦しい思いを重ねながら修行を重ねて行く場合には、ことばの世界と現実の行為の世界との分裂は少いと考えられたということでしょう。もつとも、人間は横着が本性ですから「苦学」というのは、あえて厳しい生活環境の中に身を

置かなければ、実行不可能なものだということ
を忘れてはいけません。楽が出来る環境の中で、
意志の力によって苦学を求めるということは、
およそ不可能なことに属するのです。よく「三
日坊主^{かばうず}」と言ったりしますが、これは楽の出来
る環境の中で「苦学」を求めることを揶揄^{やっか}して
いることわざだと申してよいでしょう。

「如何是仏（如何なるかこれ仏）」

という問に対して、

「即心是仏（即ち心これ仏）」

と古人は答えました。しかし、これは注意し
て受けとらなければならぬ答です。厳しい生
活環境の中で、人間の欲望を抑制させられて、
自然の摂理のままに生きている者、つまり「苦
学おこたらざる者」が、「即心是仏」と答えるの
と、安楽な生活の中で気ままに生きている者が
そう答えるのとでは、まったく意味する内容が
異なってくるからです。



生活を喪失した現代人

現代は、科学文明が極度に発達した時代です。それは、快さを求めつづけた成果が実った時代と申してもよいでしょう。人々の生活は、便利で快適なものとなりました。毎日の食事すら自分の手を煩わす必要がない生活を送っている家庭も珍しくなくなりました。

本当は自分の力だけでは何ひとつ出来ないのですが、機械の力や組織の力で大概なことが順調に仕上がって、生活に困ることがないものですから、無意識の内に自分の力を過信してしまいます。森林の中で野性の生活を送っていたら、例えば、下顎が発達せず、歯の噛む力が弱ければ、たちまちに飢え死にをしてしまいます。ところが、たとい歯が全部消えてしまっても、義歯を入れたり、或いは軟らかい食物を調達したりして、そこそこに生きていけるのが現代社会

なのです。

一事が万事その調子ですから、私どもはいつの間にか自分のいのちを生き続けていくための生活の労苦をすっかり忘れてしまいました。生きる原点ともいべき原始的な労働と無縁な生活を送っているのが現代人と申してよいのです。

具体的な生活を消失してしまった私どもはこゝとばによる概念の世界だけでそれを云々するようになってしまったのです。

「如何是仏」

という問に「即心是仏」と答えても、現代人の問題とする「心」は、ずいぶん観念的な傾向が強いのです。ことばだけで「心」を理想化して考えているのですから、現実を生きている心とは遊離してしまうのです。からだどころか離れてしまうといった方がよいかも知れませぬ。

死ぬほどの苦悩を抱いた人が「心」とは何かを考えるとします。生活だけは何の苦勞もなくやっつけていける状態で、日がな一日心を整えることを考えていても埒らちはあきません。

そういう人が、もし一週間の摂せつ心しん会えに坐るとします。朝の三時から夜の九時まで毎日坐禅を続けてごらん下さい。二日目にもなればもう足の痛さに辟へき易えきして、いつの間にか「死ぬほどの苦悩」が忘れられてしまっているのに気づきません。

心とはそういうものです。からだを使つての具体的な生活の背景なしに考える「心」はこれは虚構の「心」と言つてもよいのです。

「即心是仏といふは、たれといふぞと審細に参究すべし」

と道元禪師は仰せになります。観念的に心だけを問題にしていたのでは、いつまで経つてもその答は得られません。

「仙陀婆の築著ちくじやく 礎著そじやく」

が大切なのです。築著の築は、木の棒を手に持つて、まんべんなく土をたたきかためて土台工事をする事。礎著の礎は、「石」と音符「壺（コウ・カツ・カイ）」を組み合わせた会意兼形声文字。容器とふたをこつんと打ち合やす意。著は、助詞です。築著礎著は、つまるところ、師匠と弟子とが厳しい生活環境の中で共に力をぶつつけあい、一緒に汗を流しながら問題解決の努力をすることをいうのでう。

畑を耕す、種子をまく、草を取る、収穫をする、調理する、食べる——私どもが生きていくための原点となるべき行為をすっかり喪失してしまつて、「心」を云々していても「即心是仏」の真意はわからないということでしょう。

現代文明の恩恵を享受している間に私どもは、すっかり勤を喪失してしまいました。若い人たちと一緒に仕事をしていて何となくもどか

しさを覚えるのは、勸を共有していないことが原因のように思えます。マニュアルにしたがって行為をするだけでは、これは機械的であつて人間としてはものたりないものです。話を聴きながら自分の生活や行為を反省する力と、相手の心を読みとる能力とは一連のものだと私は考えています。それは、厳しい生活環境の中で、生きるために、からだに汗して働くことによつて初めてわがものとなるものです。

今、ものあふれる時代に心の貧しさが云々されています。心の豊かさは、相手の心をわがものとして受けとめられる勸を備えることによつて可能となります。

「王索仙陀婆」の巻は、それを王と家臣という縦の従属関係の中で問題にしています。

昔からの叢林の修行も当然、師匠と弟子という縦の従属関係を重視する中で営まれました。弟子として絶対服従する中でこそ「苦学」は可能

であつたし、我ままの通じぬをういう境遇に耐えて修行することによつて、初めて人間関係を円滑に営む「勸」を養うことが出来たのです。

今、あらゆる場で対等の人間関係が重視される民主社会に子どもは生きています。それはそれでまことに結構な世の中だと思ふのですが、平等の原則を皮相に受けとめてしまうと大変なことになってしまいます。そこに潜む陥穽に気がつかないでいると、子どもは心の豊かさに関わる大切なものを見失つてしまうかもしれませ

正法眼蔵王索仙陀婆 了

講演新聞雑話

神奈川新聞・常務取締役 戸塚 正美
かなしんサービス

☆ プロローグ

こんにちは。三心会で順番に講演会をやらう
と言い出した私が、トップバッターを受け持つ
ことになり、責任を感じております。先日、山
口碩永兄に電話を入れたら、「あまりむずかしい
話はダメだよ。田舎の和尚にも解る楽しい話を
たのむよ」といわれました。最近、流行ってい
るテレホン法話や布教パンフ等を拝見します
と、その中に現代性を盛り込もうと苦勞されて

いるように感じられます。たしかに経典や法語
の解釈だけでは、若者はついてきません。中・
高年向きの布教では困るわけで、このスピード
時代に仏教だけが泰然としていては現代人は離
れてしまいます。

鶴見大学の角家文雄学監先生が、駒大で「仏
教社会学」という講座を持っていると聞きました。
現代史の中で、マスコミと仏教を考える内
容がそうで、私も大いに喜んだわけです。そん
なことで、今日は新聞に関する雑談をして、そ

れが皆さんの布教の一助になれば、幸いです。

☆ 電波と新聞

皆さんは毎朝新聞を読まれるとき、何面から読まれるでしょうか。日本の新聞は一定のパターンで編集されております。すなわち、一面から順に政治、経済、文化(文芸)、投稿、トーク(座談会)などの特集、スポーツ、地区版、社会、ラ・テ欄(ラジオ・テレビ欄)等に分れております。

山口 文芸欄から見ます。

石井 社会面からですね、スポーツ欄も人気があるでしょう。

皆さん無意識のうちに、毎日それぞれお好みの面から読まれているようです。ある統計によりますと、一番読まれている面がテレビ欄だそ

うで、ダントツだそうです。しかもテレビ欄は同じ人が一日に二・三回見るそうです。こと程さように、ここ三十年間のテレビの発達は目をみはるものがあります。最近の単一所帯(学生など)では週間テレビガイドを買って、新聞を読まない人が増えております。若者の活字離れは相当なものです。新聞人としては憂うべきこととす。たしかに速報性については電波にはとてもかないません。しかし内容を詳しく知りたい人、データーや解説を見たい人には新聞の方がいいでしょう。また、個人の生活時間帯によって読みたい時に読める利点も見逃せません。百年たったら新聞はなくなってしまうという意見もございます。これは極論ですが、たしかに考えられます。私達が学生の頃は、やっとモノクロのテレビが二軒に一台ぐらいの割でしたね。力道山の活躍と東京オリンピックのお陰で一気に普及したのはご存じのとおりです。今で

は一家に二、三台のカラーテレビが入り、ここ二十年間の発達は世界の驚異とされています。新聞がなくなってしまうというのは、宅配制度がなくなってしまうということです。技術的には今でも新聞受像機を各家庭におけば、電話FAXの原理で、朝ボタンを押せば新聞が出てくるようなことはできます。しかし取材、編集だけが新聞づくりではありません。購読料だけでは新聞社の経営はなりたちません。紙面の広告費もある故です。民放と大きく違うのは、購読料でニュースを買っていただいているということと、スポンサーに媚びることなく、不偏不党の立場で報道できるわけです。

☆ 新聞の発行部数

しかし、皆さんが払っている購読料の半分は配達料です。新聞社には半分しか入りません。それほど宅配には人件費がかかります。毎日、

皆さんが寝ている間に新聞は配られます。現在では、そんな厳しい職種で働く若者はいなくなり、新聞少年や学生さんが激減しております。いわゆる3Kといわれる危険、厳しい、汚い職業で働く日本人はいなくなっているということですから最近では外国人労働者（台湾、中国、韓国など）が大勢配達をしております。東南アジアの人もいますが、集金業務ができなくて困ります。漢字文化の国の人は教えれば表札も読めるようになるそうですが、英語圏の人は教育するのが大変だそうです。新聞販売店従業員は全国で四十七万人おります。そのうち中・高生の新聞少年は十四万人います。大学生も入れれば半分近くは若者です。その人達のお陰で、日本の新聞社の多くが成り立っているのです。世界に例をみない数字です。ヨーロッパやアメリカは読者がスーパリーや駅に行くわけです。昨年の新聞週間の標語は『配ります！』

ニュースと笑顔とさわやかさ』です。ぜひ新聞配達の人を見たら、一言、「ごくろうさんノ」と声を掛けてやって下さい。

さて、その人達にささえられている日本の新聞はどのくらい発行されているのでしょうか。

昨年のユネスコの統計によりますと、日刊紙の場合、朝刊四九一〇万部、夕刊二二三五万部、合計七一四五万部です。これを世界の新聞と比べますとソ連の一一六一〇万部に次ぐ第二位です。第三位がアメリカの六三二六万部で、統一ドイツと中国が三〇〇〇万部台、英国の二〇〇〇万部台、インドとフランスの一〇〇〇万部台となります。ソ連は人口も国土面積も日本の比ではありませんが、国策による新聞発行の国です。ですから、よく解りません。これを人口千人当りの数でみますと、①日本584部、②ソ連422部、③米国268部となり、暮らしに密接にかかわる新聞は日本がトップということです。

朝・夕刊を一部としても五一〇六万部で、所帯当り一・二六部、部当り二・四人ということになります。

☆ ニーズの多様化と地域性

現代の読者のニーズは多様化の一途でありま
す。各新聞社でも、その対応に出来るかぎり応
ずる体制をとっています。特に希望の強いのが
地域の小さなニュースです。新聞社には中央紙
(全国紙)から一県に一紙づつある地方紙まで、
それぞれ特色があります。その中間にブロック
紙といわれる二〜五県にまたがる新聞もありま
す。中央紙が朝日、毎日、読売ならそれに次ぐ
北海道、西日本、中日、東京、中国、信濃毎日
などがブロック紙といわれます。中央紙が地区
版として各県版を作れば、各地方紙はさらに各
県内を細分化して地方版の充実に力を入れてい
ます。昭和十七年に戦火が進むにつれて言論統



黒田住職の学友（駒沢大学仏教学部）、戸塚正美氏

制による地方紙の統廃合令が出され、一県一紙に統合され、現在の原形がなされました。それでも福島民報と福島民友のように二紙ある県もあります。山梨県は二十年ほど前に山梨時事がつぶれ、山梨日日が生き残っております。わが神奈川新聞も県内を8区域に分けて地区版の充実をはかっております。28頁の新聞でも、新聞社では35頁分の制作をしているわけです。

新聞社の大小は発行部数でいわれることが多いですが、これは経営上の話で、新聞の強さは各県ごとの普及率が大切です。神奈川新聞は県人口が多いから二十五万部あっても、その普及率は一〇パーセントに充たない新聞です。四国四県や東北六県は二十万部に充たなくても普及率八〇〜六〇パーセントの強い新聞です。その県内では中央紙よりはるかに信頼されている新聞といえます。新聞社も株式会社ですから、読者に見放されれば倒産します。ロンドンの『夕

イムス』も日本で一番古い日刊紙『毎日新聞』でも倒産したわけですから大変な事です。現在の毎日新聞は新会社社が題字を受け継いだものです。その意味からも首都圏と近畿圏の地方紙は大変です。中央紙との販売競争で四苦八苦です。神奈川、千葉、埼玉や神戸、京都、奈良などがそれぞれです。読売新聞は一東京地方紙だったのが、正力一家の団結と巨人軍の人気と先頃亡くなられた販売の神様といわれた務台光雄によって日本一の発行部数を持つ新聞社になったわけです。

同じ地方紙でも神奈川のとなり静岡新聞になると強い新聞です。箱根の山を越すことによつて、東京で刷られた中央紙は地元で刷る新聞より三時間早く原稿を締め切つて印刷しないと朝の配達に間に合わない。つい十年前程まで、ナイターの結果が5、6回で止っている紙面を見たことがあるでしょう。そのような地理的環境

によって守られていた地方紙も今ではレーザーファックスによる電送で、中央で組んだ紙面を遠隔地で印刷することが可能となり、神奈川県の東名・横浜インターぞいには、新聞印刷銀座といわれる程、各中央紙の印刷工場が並んでおります。

☆ ネーミングの時代

話は変わりますが、現代はネーミングの時代といわれております。社名、商品名、催事名、番組名など、その成否はネーミングによって決まるとまで言われております。世界のソニーやトヨタもカタカナやローマ字に直して成功しました。今の若者たちはトヨタが豊田佐吉の関連など知りません。最近ではトマト銀行なども成例ですが、社名に限らず商品名もテレビや映画、音楽の名前までネーミングで勝負という現象がみられます。また、キャッチフレーズも大

切です。戦後、「初恋の味カルピス」で一躍一流
会社になったのも有名な話です。

それらの原点は新聞の見出しからきていると
いわれますが、昭和の名見出しといわれる「天
国に結ぶ恋」は坂田山心中ですが、今でも語り
継がれております。戦後は赤軍派の「赤城の子
守唄、永遠の眠り」などもあります。見出しは
文章の外観であり、文章省略の極致といわれま
す。濃縮された文章によって、その内容がわか
り、さらに読んでみたくなるものでなければな
りません。

時間がありませんので、新聞編集、記事の書
き方の話は又の機会にゆずるとして、私が新人
の頃、タタキ込まれた記事の書き方、読み方、
見出しの付け方の原点だけお知らせします。そ
れは五つのWと一つのH、それと三つのCをお
知らせします。

When	いつ
Where	どこで
Who	誰が
Why	なぜ
What	何を
How	いかに
Correct	正確
Concise	簡潔
Clear	平易

最後は尻きれになりましたが、二、三の質問
だけお答えします。

Q、松田憲英師 “コラム”と“新聞販売競
争”について話してください。

A、“コラム”は朝日の「天声人語」、毎日の
「余録」、読売の「編集手帳」、日経の「春秋」

などが有名ですが、わが神奈川は「照明灯」といいます。これはそれこそ濃縮された文章で、しかも軽妙洒脱に、現代的ニユースを取り入れながら、花鳥風月、季節のこと、テレビ、映画、歌謡、スポーツまで古典や詩歌とともに、ありとあらゆる方面に亘って論壇する新聞記事のエッセイです。新聞記者になれば、一度はコラムニストになりたいと思う。各新聞社のベテランエースが書いているのです。論説と違うところは、短文で、軽妙洒脱が命です。新聞はコラムさえ読めば他は読まなくても購読料の元は取れますから、ぜひ読んで下さい。

「新聞販売競争」はどうも評判が悪くて困りますね。新聞販売店には専売店、複合店、合配店の三種類ありまして、専売は一紙だけの扱い店、複合は二〜四紙の扱い店、合配はその地域で発行されている全紙を扱っている店です。地方へ行く程、複合や合配が多いわけですが、都

会は専売や複合が多いので、競争が烈しくなり、前出の読売新聞を中心に大型拡材を配って読者獲得合戦をやったのです。最盛期はビール券一打とか自転車一台、テレビ一台まであったようです。現在では公正取引委員会の仲介でタオル一本相当迄と決められて沈静化してきました。合配地域の人はそのサービスが受けられなかったわけで、自由競争経済も限界はあるということです。

（この稿は、平成三年六月一四日、浅草ビュ―ホテルに於ける三心会の講演録です。）

古代ギリシアの聖地

——エレウシースの秘儀——

横浜国立大学名誉教授 高野義郎

古代ギリシアの文化というとき、まず思い浮かべるのは、ホメーロスの叙事詩であり、そして、澄み渡った青空の下に聳え立つ神殿の白い大理石の柱であろう。ホメーロスの叙事詩『イリアス』、『オデュッセイア』に漂ううららかな春の趣き。大理石の神殿の跡に佇むとき、体中から込み上げてくる生の喜び。この明るく、生き生きとしたギリシアの文化に、何か悲哀の影を落すものがあるとすれば、それは神々の世界と人間との越え難い隔りであったのではな

らうか。

実際、古代ギリシアの箴言には、「汝自らを知れ」、「人間は万物の尺度なり」と人間中心の思想を謳うものがあると同時に、「度を過すなかれ」、「程よきこそよけれ」、「人間は影の幻」、「はかなきものにははかなきことこそふさわし」、「汝死すべき者なるを忘るるなかれ」、「人は生れざること、日の光を見ざることこそもつとよけれ」など、節度と、不死ならぬ人間の諦念を説くものも多いのである。

また、アッテイカの墓碑（アッテイカはアテネのあたりの地域）に刻まれた、親しい人との別れに臨んでさえ、そのつつましさを失わない人々のたたずまいには、心打たれるものがある。ドイツ象徴派の詩人リルケも、その詩『ドウィノの悲歌』第二にいう、

おんみらはアッテイカの墓碑に刻まれた人間のたたずまいのつつましさに

息をひそめたことはなかったか

愛と別れとは私たちの場合とは別のものでできているかのように

そつとふたりの肩の上におかれているのではないか

想いたまえふたりの手を

からだには力が満ちているのに

その手には力がこもることなく触れ合っているのを

自らを抑えているこの人たちは知っていたのだ

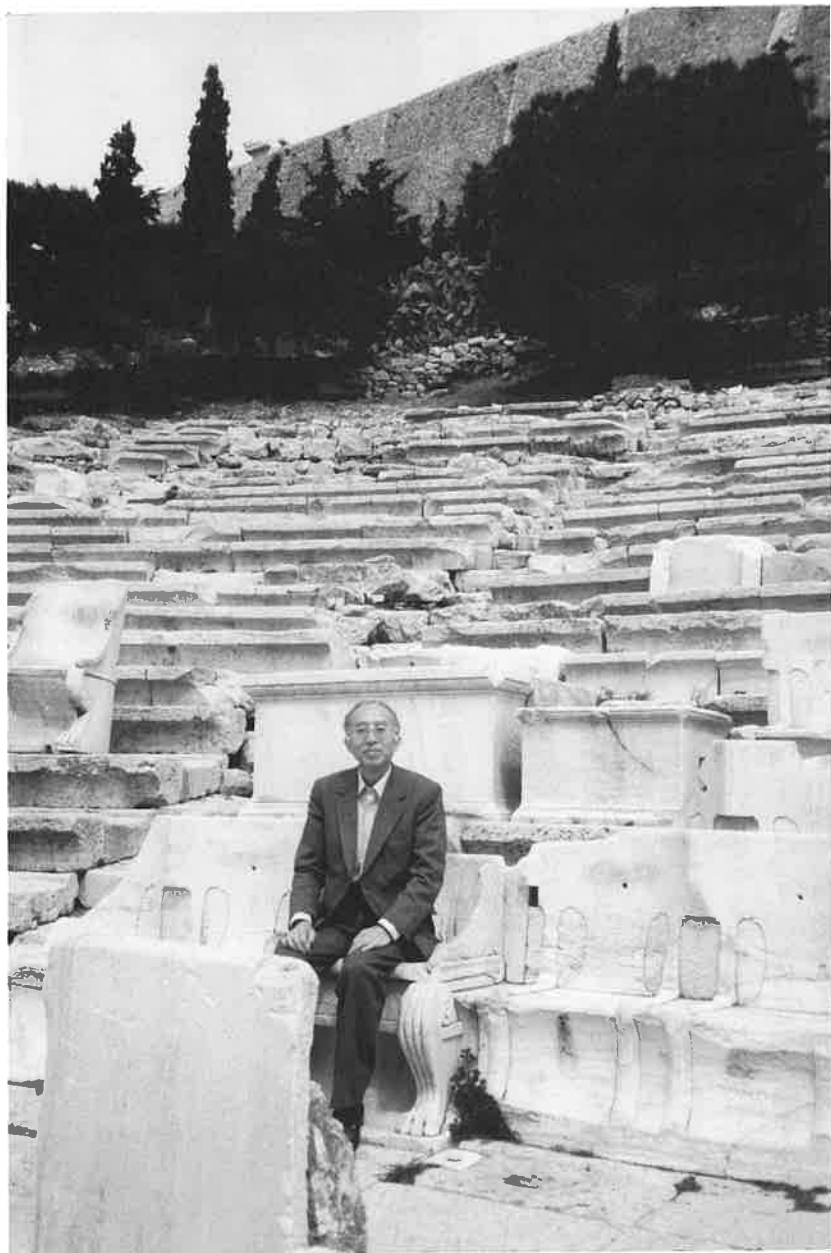
これが私たちのなしうる限りであることをそのようにそつと触れ合うことが

私たちのありようであることを

アテーナイ（アテネ）のアクロポリスの丘の西北に広がるアゴラー、この民主政治の中心からさらに西北に、ケラメイコス墓地がある。

日の沈む西の方に冥界をイメージするのは、多くの民族に共通するところであろう。ここケラメイコスの墓地や、アテーナイの国立考古学博物館に、私たちは数多くアッテイカの墓碑を見ることがができる。『ヘゲソの墓碑』はその代表的なものといえよう。

ケラメイコスからさらに西へ、少し北よりに進む道は、エレウシースへ通じており、「聖なる道」と呼ばれていた。エレウシースには、二柱



筆者・ディオニューソス劇場（アテーナイ）



「ヘゲソの墓碑」
(前四一〇年ごろ、アテネ国立考古学博物館所蔵)

の女神、母神デーメーテルと女神ペルセポネーとを祀る神殿があり、死と再生にかかわる秘儀がここで行われていたのであった。

ちなみに、エレウシースは悲劇詩人アイスキュロス生地であり、聖なる道の北側には、プラトーンの学園アカデメイアがあった。さらにその北側がコロノスで、悲劇詩人ソポクレー

の生地であり、あのテーバイの王、オイディプスが亡くなったところともいわれている。

筆者が二人のギリシアの友達とエレウシースを訪れたのは、一九九〇年の春、四月七日のことであった。

神域の最初の門、大門は、アクロポリスの低い丘を背に、石畳の広場を前にして、東北に向かつて開かれている。前二世紀に建てられたものだが、今は基壇と、僅かに柱の下部を遺すに過ぎない。春の盛りのこととて、白い大理石の敷石の間から、真紅のひなげしがあちらこちら顔を覗かせている。

大門の向かって左に、カリコロンの井戸がある。聖なる道は、大門よりも、むしろこの井戸へ向かって付けられているように見える。神話によれば、娘ペルセポネーを探しあぐねたデーメーテルは、この井戸の側に腰を下して疲れを休めたという。水は涸れているが、丸い石の



大 門



カリコロンの井戸



アッティカ

井桁はそのままであった。

ペルセポネーはゼウスとデーメーテルとの娘であるが、冥界の神ハーデースは彼女を見染め、ゼウスの助けを得て、秘かに彼女を奪った。デーメーテルは、夜となく昼となく、炬火を手にして娘を探し求め、世界中を巡った。娘はハーデースにさらわれ、ゼウスも加担していたことを知って怒り、天界から姿を消した。その



デーメーテル女神像
(前四世紀、クニドス出土、大英博物館所蔵)

ため作物は実らず、人々は困窮した。やむをえずゼウスは、ペルセポネーが、一年の三分の一を地下に、三分の二を母親といるように取り計った。デーメーテルは大地と豊饒の女神であり、ペルセポネーは穀物の種になぞらえられている。

さて、大門から約二〇メートルばかりで、第二の門、小門が真北に向かって開かれている。前四〇年に建てられたもので、ここも基壇と柱の下部を遺すのみだが、あとで訪れる博物館では、この小門を飾っていたカリアード（女性像を柱として使ったもの）の力強い彫刻を見ることができる。

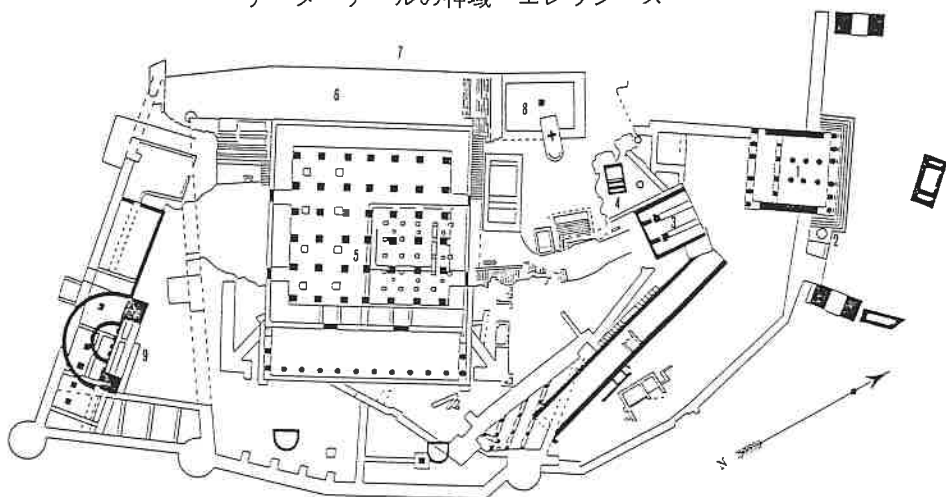
小門を入ると、向かって右はハーデースの聖域であって、アクロポリスの丘の下には、洞窟が黒々と口を開けている。ペルセポネーはここから地下へ連れ去られ、また、ここから地上へ戻ってきたと想われる。

デーメータールの神殿テレスターリオンは、小門から南へ五〇メートルほどのところにあつて、アクロポリスの丘を背に、東南に面して建てられている。前六世紀後半、ペイシストラトスの時代に建てられた神殿は、ペルシア戦争によつて荒廢し、前五世紀半ば、ペリクレスの主導の下に再建された神殿は、間口、奥行ともに約二倍に拡張され、五二×五四メートルの、壮麗な方形の建物であつた。さらに、ローマ時代に、修復の手が加えられている。しかし、多くの人々の崇敬を集めたこの神聖な秘儀の場も、今はところどころ基壇や柱の下部を遺しているだけであつた。

ただ、神域全体にわたつて、縦横に通じる地下道は今も見ることができて、その秘儀に果た役割を想わせるのである。

エレウシースの秘儀は、前一四五〇年ごろ、エウモルポスによつて創始されたと伝えられ

デーメータールの神域・エレウシース



- | | | |
|------------|------------|---------------|
| 1 大 門 | 4 ハーデースの聖域 | 7 アクロポリス |
| 2 カリコロンの井戸 | 5 テレスターリオン | 8 デーメータールの古神殿 |
| 3 小 門 | 6 テラス | 9 ブーレウターリオン |



る。秘儀の次第は、口外が厳しく禁じられていたため、ほとんど知られてはいないが、その神話にも寓意されているように、死と再生の秘儀であり、二柱の女神デーメーテルとペルセポネーとの導きによって、靈魂の不死を悟ったのであろうと思われる。

この秘密の儀式は、毎年春秋の祭礼の日に行われた。春二月は、予備的な浄めの儀式が、アグラのデーメーテルの神殿で行われ

た。ここは、昔アテーナイの東南を流れていたイリッソス河の左岸、アルデットスの丘と第一回近代オリンピック大会の開かれたスタディオンの間あたりにあった。秋九月の大祭には、前段階的なさまざまな浄めの儀式ののち、最終段階の秘儀が、このテレステーリオンで行われたのであった。

プラトーンの対話篇には、『饗宴』に、「見神に窮まる最奥の秘儀」、『パイドロス』には、「全き姿の、純粹で、莊嚴な、祝福に満ちた聖像を、明るく清らかな光の中に啓示され、それによって奥義を伝授されたときのことであった」、また、「肉体と呼ぶ靈魂の墓」などの表現が見られ、おそらく最奥の秘儀は、内陣において神像と対座することによって、靈魂を肉体から解放し、死すべき肉体に対して、靈魂は不死であり、本来神的なものであることを悟ったのであろう。

エレウシースはアテーナイからも近く(二二二

キロメートル)、入信者の中には知識人も多かった。ピンダロス、ソポクレース、イソクラテース、キケロらも、この秘儀について好意的に述べている。

また、ヘーロドトスによれば、ペルシア戦争において、ギリシア側の勝利を決定したサラミースの海戦のとき、エレウシースのあたりから大きな声が聞え、やがて雲が沸き起って、サラミースの方へ動いて行ったという。

さて、テレステーリオンの背後は、テラスになって、アクロポリスの丘へと続いている。デールメーテルの古い神殿は、テレステーリオンの北の方にあつたらしい。

なお、テレステーリオンから南四〇メートルほどのところには、ヘレニズム時代の議事堂ブーレウテーリオンの跡がある。

さらに、テレステーリオンの西の方、アクロポリスの丘の南側に建てられた博物館を訪ねよ

エレウシースのテレステーリオン



う。

玄関を入ると、第二室へ繋がっていて、中央にデーメーター女神の人身より少し大きい目の像が飾られている。前四二〇年ごろのものとか。神像とはいえ、女体の魅力を隠そうとはしない。また、有名な『エレウシースの浮彫』も飾られているが、これは複製で、実物はアテネ国立考古学博物館にある。デーメーター（向かって左）とペルセポネー（右）とが、少年トリプトモスに小麦を与え、それを広めさせようとしている。さらに、同じ主題、『トリプトモスの派遣』の小さな浮彫が三つ、櫃に座ったデーメーターとペルセポネーの像、入信者の像なども並べられている。

第一室へ戻ると、中央に前七世紀のアンフォラ（二つの把手の付いた壺）、そして、前四八〇年ごろのデーメーターとペルセポネーの浮彫、聖獣豚の可愛い像（ローマ時代）、また、ニ

ンニオン・タブレットが飾られている。ニンニオン・タブレットは前四世紀のもので、その図柄から秘儀の様子を伺うことができる。ただし、これも複製で、実物はやはりアテネ国立考古学博物館にある。

第三室で見落してはならないものは、ディオニューソス（バックス）の像と、聖水盤捧持少女像とであろう。前者は、プラクシテレースの作品の、ローマ時代の模刻である。後者は、大理石の水盤を捧げ、もう一体と対になって、テレスターリオンの入口に立っていた。入信者たちはその水で最後の浄めを行ったのである。

ディオニューソスの像がエレウシースから出土したのはきわめて興味深いことといえよう。かつて、トラキアから伝来したディオニューソス崇拜は、暗夜、山上において、聖なる狂乱のうちに、神との合一を体験する、狂熱的な宗教であった。このような神秘的な体験によって、

デーメーテル女神像▶
(前420年ごろ)



▼聖獣豚の像(ローマ時代)



◀エレウシースの浮彫
——デーメーテル(左)とペル
セポネー(右)とが少年トリプ
トレモスに小麦を与え、それを広
めさせようとしている——(前
440—430年、エレウシース出土、
アテネ国立考古博物館所蔵)

靈魂は本来神的な存在であることが実感され、
靈魂の不死が信じられたのであろう。

このディオニューソス崇拜は、前六世紀、オルペウス教として、ふたたびギリシア各地に広まった。靈魂は罪によって肉体の獄ひじりに繋がれたのであり、肉食を避け、浄めの儀式を受けることによつて、靈魂の肉体からの解脱に達することができる。

外にも、プリュギア（現在のトルコの中央高



ディオニューソス像（ローマ時代）

原西部の地域）の豊饒神カベイロイの秘儀もあった。

古代ギリシアにおけるさまざまな秘儀や神話は、たがいに影響を及ぼし合いながら、ついにはエレウシースの秘儀に吸収されていったように思われる。オルペウス教の神話によれば、ディオニューソスはペルセポネーの子とされ、オルペウスも、前一五世紀、エレウシースに住んだという。そして、エレウシースの祭の初日、



聖水盤捧持少女像

集まってくる人々の列の先頭をディオニューソスの像が行くのである。

また、女神ヘーラーも、もともと地下神、地母神であって、その信仰も、エレウシースの秘儀を取り入れて豊かになっていったと考えられている。ヘーラーは、さらに、ゼウスの妃となり、結婚の神となるのである。

さて、第四室には、二柱の女神の小さな像が二つ、そして、ここにも、ディオニューソスの小さな像が見られる。

第五室では、先に記した小門のカリアードが見ものである。

第六室には、前二五〇〇年、青銅器時代からの壺や小さな器物が並べられている。とりわけ面白いのは、ケールノスと呼ばれる祭具で、秘儀に使われたものと思われる。これは入信者の頭へ載せたものようで、いくつもの盃状の突起があり、それらに農作物の種子や、蜜、ぶど



祭具ケールノス

う酒、油など、女神への捧げ物を入れたと考えられている。

最後に、「聖なる数」について述べておきたい。エレウシースの大祭は一〇日間であった。それは、デーメーターがペルセポネーを九日間探し求め、一〇日目にエレウシースへ辿り着いたことに由来する。前六世紀後半のテレステীরオンは、正面に一〇本の柱を持つ数少ない例であろう。また、秘儀の最終段階は五段階であったといわれているが、全段階は一〇の倍数だった

のではなかるうか。すなわち、エレウシースの秘儀においては、一〇が聖なる数であったように思われる。一〇は偶数であるから、柔らかで、暖かく、女性的、農耕的なニュアンスを持っている。

先に記したヘーラー信仰も、さまざまな考察から、やはり一〇が聖なる数であったのではないかと思われる。

多産と豊饒、死と再生の宗教において、聖なる数を一〇とするのは、人間の受胎から出産までが一〇ヶ月であることに起源するのではあるまいか。

ちなみに、直角三角形についての定理で有名なピタゴラスの教団も、一〇を聖なる数としていたことはよく知られている。一〇＝一＋二十三十四、すなわち、完全な数であった。宇宙は、中心火のまわりに一〇個の天球が回っている。すなわち、恒星、五つの惑星、太陽、月、

地球、そして、対地星の天球であり、見えない星、対地星を加えたのは、数を一〇にするためであることはいうまでもあるまい。そして、これらの天球は、大きさに応じ、速さに応じて、それぞれの高さの音を生じ、全体として調和ある音楽を奏でているのである。

また、この教団では、霊魂が輪廻転生の苦しみから解脱するためには、数学や音楽によって浄められなければならないかった。

そして、ピタゴラスの生れたサモス、教えられたクロトーン、メタポンティオンのいずれの都市にも、壮麗なヘーラーの神殿が聳えていたのである。

オルペウス教が動的、感覺的であるのに比べ、ピタゴラスの教えは静的、理知的であって、聖なる数一〇とともに、デーメーター・ヘーラーの流れを汲むものと考えられるのではなからうか。

インド留学記

その7

日常の日々 (3)



学授岩
大 沢 教
金助島

研究室旅行(一) — エローラへ —

プーナに来てから二ヶ月程たったころ、サン
スクリット学科の研究室旅行が催された。二泊
三日(昭和四九年一九〇二一日)でエローラと
アジャンタへ行こうというのだ。エローラは崖
をくりぬいて造られたヒンドゥー教の壮大な石
窟寺院で、アジャンタは仏教の石窟寺院であり、
ともにそこに描かれた神々や仏・菩薩たちの美

しい浮き彫りや絵画で有名なところである。先
生方も何人かは参加したが、参加者の大部分は
博士課程の学生たちで、ワイワイガヤガヤと楽
しい旅行となった。

一九日の午後二時四五分にバス・ターミナル
に集合し、「田舎のバスはオンボロ車」と歌い
たくなってしまうようなバスにゆられてほぼ四
時間、七時ごろにオーランガバードに到着。ナ
タラージヤ(舞踊の王様∥シヴァ神)というお

おげさな名前の貧弱なホテルに宿泊することになる。五人部屋でバス・トイレ・二食付き二五ルピー（約七五〇円）だ。夕食後酒も飲まずに（サンスクリット学科の研究室の人はバラモン僧侶階層の人が多いせいか一般に酒を飲まない）ワイワイとお喋り。やっと静かになったと思つたらとつとくに一二時は過ぎていた。あくる朝は五時になるともうシヴァクマール（現プーナ大学助教授）がみんなを起こしにかかる。そして、I am sorry for disturbing you（寝ているのに邪魔して悪いね）と言いながら、とてもそう思っているとは思えないほど甲高い大声で隣で喋り続ける。「このやろう」と思いつながらこちらも凶たく再度眠りに入る。六時半ごろモンモン起きだして、Hurry up（急いで、急いで）という声を聞きながら、バス（インド人が入浴というか、シャワーを浴びるのは通常朝である）・トイレ・朝食をすませて、七時にホテルを

でて、オーランガバード駅発七時半の共用観光バス（つまり貸し切りではないが観光ガイドが一人つくということ）に乗り込む。初日は、Daulatabad Fortというモスリムの城跡、エロール、Bibi-Ka-Mugubaraという小タージマールといった風情の宮殿、Panchakki of Water Millを回つてホテルへ戻るといふ行程である。Daulatabad Fortの城跡では、「小高い山の上」にこんな難攻不落という感じの城を造つても、やっぱり負けるときは負けるものなんだなあ」とあたりまえの感想を抱きつつ、ふと「夏草や兵どもが夢の跡」なんて芭蕉の句を思い出してしまい、あまりに場違いの日本的感性に自分でもつい笑い出してしまう。エローラにはヒンドゥー教と仏教とジャイナ教の石窟寺院があるが、圧巻はなんととってもヒンドゥー教の石窟寺院カイラーサである。崖を上から掘り下げていつて造つたと言われている

一枚岩でできた巨大な寺院で、下から見上げると首が痛くなってくる。寺院の回廊には、シヴァ、ヴィシユヌを始めとするヒンドウ教の神々の像が彫られ、寺院全体がまるで一つの神の世界すなわち天界のようだ。ここは今は、ちょうど京都・奈良の観光寺院と同じように、完全な観光地と化してしまっているようだが、昔インドの人々もつと信仰深かったころには、この回廊をまわりながら神々と出会い、天界へと思いをはせていたのであろうか。澄み切った青い空のもとでこの巨大な石窟寺院を見上げてみると、ふとそんな遠大な気持ちになってきた。

エローラを見物したあと、Bibi-Ka-Muqubara と Panchakki of Water Mill を回ってホテルへ戻る。夜はまた、一二時すぎまでお喋りの渦。あくる日もこのお喋りがまた朝の五時ごろから開始されてしまうのかと思うと、つつい心の中でこんなふうになんぞ毒づきたくなくてし

まう。「インドでは『お子さんが何人お生まれになって、何人亡くなりましたか』と日常的に尋ねるほど、子供の死亡率が高いのだ、なんて言ってたやつがいたけれど、睡眠五時間たらずでこんなに毎晩喋りまくっているやつらは、その生存競争に生き残った元気印なのに違いない」などと。しかし、ともかく、毒づきながらもようやく寝入る事ができたのであった。

研究室旅行(二) — アジアンタへ —

翌朝またオーランガバード駅から共用観光バスに乗り、今度はアジアンタへ向かう。そこには二八の仏教石窟寺院があり、寺院の階段を下りるとすぐ前には小川が流れている。そして、崖に掘られた洞窟(石窟寺院)の中には、ストウパ(仏舍利)があるものや、日本でも説話でおなじみのジャータカ(仏陀の前世の物語)に素材をとったカラーの美しい絵が壁に描かれ

たものなどがある。この暗い洞窟の中で、むかしむかし多くの出家僧たちは、信者たちの布施を受けながら修行を行い、瞑想にふけっていたのであろうか。

二八の石窟寺院をざっとひとまわりしたあとは、みんなで昼食をとることにする。昼食はバナナの葉の上にチャパティやカレーこふきいもなどがのったものだ。バナナの葉を直接地面にひいて、地面の上にあぐらをかいて食べるのだ。もちろん手で食べる。ときどき蟻がバナナの葉の上を散歩していく。それを適当に払いのけながら食べるのだ。日差しは強いが、青空のもとで木陰に座って食べていると、ほんとに遠足気分である。

石窟寺院をもうひとまわりしてバスに戻ると、バスのまわりに土産物売りの子供たちが集まってきていた。私を見て日本人だと思ったのだろう。日本語で話しかけてくる。「これ安いよ」

「これタダね」「見るだけ。見るだけ」「貧乏暇なしね」。ここを訪れた日本人観光客が教えたのだろうか。卑猥な言葉を別の意味の言葉だと思って話しかけてくる子供もいる。この子たちは当然学校には行っていないのだろうが、日本で言えば中学生くらいの子が、弟と思われる子供の面倒を見ながら、絵葉書売りつけにくる。正式に日本語など習ったことなどないはずなのに、えらく日本語がうまい。日本人観光客相手に商売しているうちに自然と覚えたのだと思う。これはまさに「必要こそが語学習得の母である」という格言の典型のような例だが、つい私の英語によるコミュニケーション能力と引き比べてしまった。

現在英語が国際語としてもはやされている。確かに英語が通用する範囲はあらゆる言語のなかで最も広く、その影響は最も強い。しかし、何故現在英語が国際語となっているのかと



いう歴史的事情を考えれば、単にここ四百年ほどたまたま英語を国語としてゐる国が強国だったというところに過ぎないのでないだろうか。大航海時代以降、各地を植民地にしながら西欧近代文明が全世界にひろがったが、そのときはまづポルトガルとスペインの勢力が強かった。そのためその頃に植民地にされた国々、たとえば中南米の国々では、今でもブラジルではポルトガル語がその他の地域ではスペイン語が用いられている。その後、イギリスが一五八八年にスペイン無敵艦隊を破つてからは、世界の覇権はイギリスとフランスに移った。そのため、そのころ植民地にされた国々では今でも英語とフランス語の影響力が大きいのである（たとえばアフリカの諸国ではフランス語が、インド亜大陸では英語がというように）。その後、ドイツと日本が植民地獲得競争に参加したが、それはもう時すでに遅く、さらに第二次世界戦で敗北をき

つしたため、両国語の影響力は大きくはない。第二次世界戦後は、アメリカとソ連の二極構造が長く続いた。しかし、ソ連の言葉ロシア語の影響力は主に東欧を中心とする地域に限られ、その他の資本主義諸国では米語（英語）の影響力が高まった。そんなわけで、一七世紀以降、第二次世界戦以前はイギリスがそれ以降はアメリカがという形で、たまたまほんの四百年のあいだ英語を国語とする国の力が強かつたせいで、今英語が国際語になっているに過ぎないのだ。これは結局は英語を国語とする国の政治・経済・軍事力の問題で、文化の問題ではないのだ。言葉の通用範囲の大小にとって文化の優劣は二次的な意味しかもっていない。今日日本は、経済大国への道を歩みつつある。その結果豊かになった日本人たちが、インドのここアジャンタにまで団体を組んで観光に来ている。その観光客相手に商売してもらうけようとしているこの

インドの女の子は、正式に習いもしないのに必要にせまられて、こんなに日本語がうまくなつてしまつてゐるではないか。英語が国際語だといふのは所詮この程度のことなのだ。「英語ができるとこれからいろいろ便利だよ」という程度のことなのだ。

研究室旅行 (三)

—オーランガバード駅の物ごい—

旅行の帰りにオーランガバード駅でプーナ行きのバスを待っていると、物ごいの人たちが「バクシー（金おくれ）」といひながら寄つてきた。子供も多い。慣れないせいかひどく動揺してしまふ。どうしようかと迷つてブーツとしてゐると、異様なものが動いてゐるという感じで、何か近づいてくる。「あれ、何だろう」と思つてよく見ると人間の子供だった。異様に見えたのは、その子の足が私の手首ほどの太さもなく、

自分の体重を支えるにはあまりに細すぎるため、四つ足で歩いて近づいてきたせいだったのだ。手にもサンダルのようなものをはめ、まるで水すましが水の上を進むように地面を進んでくる。そして「バクシー」と手を差し出す。彼の顔には全く陰りも卑屈さも見られない。まるで子供のころよく遊んだ犬が私を見上げていたときと同じような目付きで私を見上げてゐる。驚いて一〇ルピー渡してしまふ。

こんなときは本当はインドの貧困を始めとしていろんなことを慨嘆すべきなのだろうが、自分でも意外なことに、とつてもアツケラカントした気分だった。つまり、うまく言えないけれど、あえて言葉にすれば「人間もやっぱり動物だったんだ」「人間っていうのはすごいなあ」「やっぱり生きてるんだなあ」というような極めて単純な感慨を持つてしまつたのだ。

私はそれまで人間と動物は異なるものだと思

っていた。そしてその上で動物と関わっていた。人間が動物のような行為をするのは卑しいとみなすことに別段奇異な感じはもたなかった。ともかく二本足で立った頭の高さから世界を見ていた。ところが、インドで路上生活者が牛や犬と一緒に地面に寝っころがっていることに慣れ、どこにいても牛や羊や犬がゴロゴロしていることにも慣れてくると、四つんばいになってあるいは地面に寝っころがって世界を見る視点だつてあつていいんじゃないかという気がしてきた。「人間の命は地球より重い」という言葉



があるけれど、それはあくまでも願望であつて、実際は、多くの人間は地球にはいつくばつてゴチャゴチャと生きているというのが本当のところではないか、そのところでは人間や動物も変わりはないのではないか、と思えてきたのである。そして、とても飛躍してしまふのだけれど、輪廻、なかでも動物と人間の生命の連鎖などという発想は、こうした視点の低さというか地面への近さから出てきたのではないか、などと考えてしまったのである。

インドの学校事情

東方研究会専任研究員
立正大学 講師 高橋 堯 英

なにげなしに、眼をとめたカレンダーの日付。
十月十五日。ふと、「デリー大の二学期の始まる日」であることを思い出しました。

デリー大学では、前期と後期からなるセメスタ制ではなく、三学期制が行われています。乾燥と灼熱の夏の世界がモンスーンのもたらすスコールですっかり洗われ、眼にいたいような緑が木々に戻った頃の七月十五日に新年度がスタートし、湿気を伴う暑さから徐々に解放されていく九月三十日までが第一学期。十月一日からの二週間の秋期休暇の後、日本の晩秋のよう

な気候の十二月二十四日までが第二学期。一月七日迄のクリスマス休暇をへて、三月の初旬までが第三学期となります。学部の場合、デリー大学本部より送られて来る試験問題による進級試験・卒業試験の準備期間が一カ月程あり、すべての試験が四月末頃までに終了し、二カ月程の夏休みにはいる、という次第です。

学部は三年制で、大別しますと二つのコースがあります。一つは、B.A.パス・コース(B.A. Pass Course)と呼ばれ、いくつかの組合せオプションはありますが、歴史・経済・哲学・英文

学などの四科目を併行して浅く広く学ぶコースです。もう一つが、経済・歴史・哲学・英文学・サンスクリット文学など、入学時選択する一科目を専修するオナーズ・コース (Honours Course) というものです。何れも、年度末の論述試験の結果で進級・卒業が決められるというものでした。採点も厳しく、Aクラスに相当するファースト・デイヴィジョンが六十点以上。合格点は、四十点。しかし、通算成績の平均が四十九点以下のサード・デイヴィジョンでは就職にも影響を及ぼし、MA コースへの入学も、成績上位者から定員数採るため、難しくなっています。

現在では、新カリキュラムが導入されているようですが、ここで私の入学当時の歴史の専修コースの内容をご紹介します。まず、一年次にその年度にクリアーしなければ進級できない、というメイン科目として、「インド古代史」と「イ

ギリス近代史」の二科目。そして、卒業までに合格すればよい、という補足科目 (Subsidiary Subject) として、必修の「英語」と、「倫理学」と「ヒンディー語」の何れかの二科目がありました。ちなみに、この「英語」の試験ではジョージ・エリオットの『サイラスマナー』とバーナード・ショーの『戦争と人間』の二冊のテキストに付いて設問と文法が問われたのですが、上級生から「落第すると進級できない」と脅かされたのを記憶しています。

また、「ヒンディー語」は、南インド出身者や、マニプールやナーガランドなど東北辺境州地域出身者にとって、彼らの言語がヒンディー語と全く異質なものだけに、そして、彼らのヒンディー語に象徴される支配的分化への反感からか、ほとんど受講する者はなく、多民族国家インドの抱える問題の一端が感じられました。

二年次には、メイン科目として「インド中世

史」の他、「近代極東史」と「アメリカ史」の何れかと、補足科目として「経済学」関係の二科目か「社会学」関係の二科目の選択がありました。そして、三年次には、「インド現代史」、フランス革命以後の「ヨーロッパ史」、「世界の憲法」という科目の他、三年間に履修した全ての分野から設定された三十の設問から選択した一問を三時間論述する、という「エッセイ」という試験をクリアせねばなりませんでした。

講義は、50分間単位で行われ、月曜から土曜日まで、九時頃から始まる第一限から昼食をはさんでの午後の第四限位までに集中して行われ、キャンパス内の寮に住む学生に対しては、特に講義への出席が厳しくチェックされたのを覚えています。

そして、二週間に一度の間隔で、それぞれのメイン科目にテュートリアル (tutorial) がありました。これは、五〜六人単位のグループ指導



で、講義で指摘されたテーマに付いて書いたレポートのチェックを受け、デイスカッションを行う、というものです。

講義にせよ、テュートリアルにせよ、入学当初の私には、全くチンプンカンプン。クラスメートたちは、まるで速記をしているかのように手を動かしノートをとっている。しかし、私は、書けたポイントが、ほんの二―三行という有様。ぼんやりとつかんだポイントを頼りに、指定されたテキストの相応部分を探す、という毎日が続きました。今でも、当時を思い出すと背筋が寒くなります。

しかし、私にとって幸運だったことは、日本の果たした急激な戦後復興への評価のためか、多くの先生方が日本人に大変好意的であったことです。故ラージパール校長は、私の英語力のなさを大変心配し、英語担当でカレッジ付属のチャペルの司祭でもあったイギリス人のヒスコ

ック先生との週一回、一年間の特別授業をアレンジしてくれたのです。レポート用紙三枚くらいのエッセイを書いてゆき、それを添削してもらった後、二十分くらいの世間話をする、というものでしたが、「娯楽小説でもいいから、内容の簡単なものを多読しなさい」とか、「一日十時間くらい英語を読むつもりで、がんばりなさい」とか、貴重な助言、励ましを得ることが出来ました。「英国史」担当のデイダール・シン先生は、定期的に試験準備のチェックをしてくれたのみならず、進級試験の直前に、わざわざ模擬試験をやって下さり、三時間に五問回答するというデリー大学の論述試験がどのようなかを体験するチャンスを与えてくれました。

インド人の抱いていた「日本」という国のイメージに、私は護られていた。当時を振り返る度に、そんな気持ちを抱きます。

聖地巡礼——ケダルナート



東方研究会専任研究員
清水晶子

下界で炎暑の夏を迎えようとする五月頃から、雪の解けたヒマラヤの聖地へ通ずる道が開通する。人々は待ちかまえていたかのように、聖地をめざして巡礼の旅を開始する。旅の出发点、ハリドワールやリシケーシからはインド各地からはるばるやって来た大勢の善男善女をのせて、毎日巡礼のツアーバスがくり出して行く。

これから訪れようとするケダルナート、バドリナートは、ガンゴートリー（ガンジス河の源流）、ヤムノートリー（ヤムナー河の源流）と共

に、古くからヒンドゥー教の聖地とされているところである。「神々の谷」——ヒマラヤ山脈の西方にある山深い聖地である。ケダルナートにはシヴァ神、バドリナートにはヴェイシュヌ神のヒンドゥー教の二大神が祀られている寺院がある。それぞれの聖地を巡礼する旅は、魂のふるさと、聖なる河の源流をさかのぼるコースをたどっている。

六月二十四日、私たち一行三十人（ボンベイからの団体二十四人、グジュラートの親娘三人

連れ、バンガロールからの母親と息子）は、リシケーシを出発した。しばらく走ると、ガンジス河沿いに進む道路の幅は急に狭くなり、山中をはうようにガードレールのないカーブの多い道が延々と続く。途中、荷物を頭にのせて一団となつて歩いている巡礼者たちを何度もみかけた。徒歩で巡礼に赴くことは敬虔な行為とされる。信仰心の現われとはいつても、これから先の長い道を思うと気が遠くなる。

デオプラヤーグやルドラプラヤーグといった、枝分かれしたガンジス河の支流が合流する各地点で、ツアーの人々は熱心に沐浴をくり返していく。ヒンドゥー教では、河川の合流点（サングム）が神聖視され、崇拜の対象となつていからである。ヒマラヤの濁った雪解け水は、手足をひたしただけでも、皮膚が真赤になる程冷たかった。

二日目の夕方、ようやくゴウリクンドのロッ

ジに到着した。海拔二〇〇〇メートルほどのこの地から、ケダールナートまで約十五キロの山道を登らなければならない。次の日の早朝、ロツジの下の硫黄温泉で朝の沐浴をすませて、五時半に出立した。馬やカゴにのつてケダルナートまで登ることもできたが、自分の足で歩くことにした。

平坦な道から、いきなり重なつた急坂の登り道が眼前に現われる。歩きはじめてすぐに息が上がり、汗がふき出してくる。茶店をみつけて、ビスケットとあたたかいミルクティーで一息つく。一人のサードウ（行者）があとからやって来た。竹竿のように細い素足に、プラスチック製の靴をはいていた。マントラを唱えながら、時には讃歌をうたいながら、一定のテンポを保って、確実な足どりで歩いていく。

いつしかサードウの姿が遠のいていく。ちょうど行程の真中を過ぎたあたりから、溪谷沿い

の傾斜のきつい道が続く。いつのまにか周囲には誰もいなくなつて、一人になつていた。木が一本もない青々とした草原の谷間には、白や黄色の小さな花をつけた高山植物が咲いていた。7〜8月には、一面の花のじゅうたんがこの渓谷をうめつくすという。山間を登りきると、天空をつきさすような真白の雪山の全容が目にとび込んでくる。人々が畏怖し尊崇する聖なる山がまじかに見える。

山のロッジにたどり着いたときは、十二時を少し回わっていた。馬で登った人たちは、十時には到着していたという。巡礼にふさわしい、けわしい道のりだった。ケダルナートでは、セ



ーターもジャケットも着込む程、気温が下がっていた。でも空気の薄さはほとんど感じられず、息苦しさはなかった。澄みわたった青空を背景にそびえ立つ雪山に、ただ圧倒されるばかりであった。ツアーの人たちと一緒にロッジで、野菜カレー、ダール豆のスープ、チャパティー（インドパン）の昼食をとる。

登山の後では、質素でも、温かい食事は何よりのご馳走である。燃料の薪や石炭から先ほどべての食糧・物資が、ゴウリクンドから先ほど登ってきたあの山道を馬の背にのせて運ばれてくる。石造りのケダルナート寺院を建てた人々の熱意と共に、大いなる困難がしのばれた。

神話のいきづくヤムナー河畔（その二）

東方学院専任研究員 及川弘美

最初に、『バガヴァット・プラーナ』第10巻22章の1〜14詩節までの訳（試訳）をご紹介します。しよう。

ヘーマンター（冬）の第一月に、ヴラジャ（ヴリンダーヴァンを含む地域一帯）地方のナンダ村の少女たちは、カーティヤーヤニー（パールヴァティー）女神を讃える誓戒の祭祀の供物を捧げていました。彼女たちは、夜明けに、カーリンデー（ヤムナー）河で沐浴をし、その水辺で、砂の女神の像を作ると、白檀の粉、花輪、ご馳走、芳香の煙漂う灯火、

新鮮な果物、穀物そして様々な供物を捧げて祭祀を行なっていました。「カーティヤーヤニー女神よ、偉大なマーヤーよ、偉大なヨーギーよ、最高女神よ、牛飼いのナンダの息子（クリシュナ）を、私の夫としてください。女神よ、あなたに帰依します」とマントラを唱えながら、かの少女たちはプージャ（礼拝の儀式）を取り行ないました。こうして、クリシュナを想つて少女たちは、一カ月間を祭祀に費やしました。また、バドラカーリー（ドウルガー）女神にも「ナンダの息子が夫になりますように」と祈りました。毎朝太陽が昇

ると、彼女たちはお互いに自分たちの腕をつないで、沐浴のためカーリンデー河へと歩きながら、声高らかにクリシュナを讃え歌ったのでした。ある時、河辺に着くといつものように衣服を岸辺に脱ぎ捨てて、クリシュナを賛歌しながら水の中で楽しく遊んでいました。するとそこに神々のなかの神、ヨーガの王、至福者クリシュナが仲間たちに取り囲まれて近付いてきました。そして彼女たちの衣服を盗んでカダンバの木の上に登って、少年たちと一緒に笑いながらからかって言いました。「少女たちはここにきて、それぞれ望みの衣服をお取りなさい。あなたがたが戒誓によって疲れきっていることが本当であるように、私は冗談ではなく本気で言っているのです。私は今まで嘘、偽りを言ったことはありません。ひとりずつでも皆一緒にでもよいですから服を

取りにいらっしやい。優美な御婦人たちよ」クリシュナを盲愛していたゴープーたちは、クリシュナのそのことが戯れであることに気づいて、恥ずかしげに互いを見て笑みをこぼしました。しかしだれも出ていこうとはしませんでした。こうして、ゴーヴィンダ（クリシュナ）がふざけて言った時、首まで水に浸かっていた彼女たちはとまどい、水の冷たさに震えながら彼に言いました。「最愛の人よ、私たちは、あなたが牛飼いのナンダの息子で、愛する方であり、ヴラジャの人々から尊敬されていることをしっています。しかし、おお、悪ふざけはいけません。どうぞ、寒さで震えている私たちに、服を返してください。

引用が長くなつてしまいましたが、このあと物語は、ついに寒さに耐えきれなくなつて河からあがつてきたゴープーたちが、祭式のあと服

を脱いで沐浴することの罪をクリシユナから咎められ、その罪を償うことによりクリシユナから服を返してもらおう場面へと展開していきま
す。

ところで、この物語の舞台が、現在チール・ガートと呼ばれているところです。チールとは「布切れ、ぼろ切れ、衣服」を意味し、この物語にちなんでチール・ガートと名付けられたのです。チール・ガートの巨木にはクリシユナ神が祀られ、毎日たくさんの巡礼者が訪れています。そして、女性たちは、必ずこの巨木にサリーを結びつけてお参りするので、いつも色とりどりの鮮やかなサリーが、この巨木の枝先を彩っています。それは、まるで、時空を超越した永遠の神の世界を象徴しているかのごとくです。おもしろいことに、ここから五〇メートルほど上流にも同様な光景がみられるのです。どうやらここでもチール・ガートを称して参拝者を集めて



いるようです。日本ならば「元祖チール・ガート」の旗が、どちらかにたなびくところかな、などと考えると、日本もインドもあまり変わらない様に苦笑してしまいます。しかし同時に明らかかな相違にも気づかれます。

インドでは神様や偉大な聖者に関わるところはすべて聖地として崇められ人々が集まっています。ヴリンダーヴァンやその周辺にも、神話に基づいた多数の聖地がみられ、決まった巡礼コースがあります。そしてたくさん的小銭を用意してきた巡礼団の人々が、巡礼の先々でお賽銭をあげていきます。そのような巡礼地は、様々な店が立ち並び賑わいをみせています。信仰とはいえ、神話という虚構の世界にこれほどの情熱を注ぐインド人、それは、日本人が過去に思いを馳せ、いたるところに史蹟や資料館を作るのに似ています。私たちは、過去の歴史という存在の絶対性を疑いません。しかしインドでは、

それと全く同じことが神の世界でいえるのです。彼らは神話の世界を事実としてその存在を認め、現実の世界にオーヴァラップさせるのです。それは原始的であるとか、そうでないとかいうことではすまずことのできない、価値観の全く異なる世界観を作り上げているといえるでしょう。次回はこの点についてもう少し考えてみたいと思います。



世界の九カ国に三十五人を派遣

海外留学僧派遣育英会第六回総会開く

派遣僧の論文集発行

海外留学僧派遣育英会の第六回総会が十一月二十三日午後二時半から、善光寺で開催された。同育英会は昭和五十九年一月、理事長である善光寺の黒田住職が善光寺開創十五周年の報恩行として設立したもので、八年目を迎える今日までに世界九カ国に合計三十五人の育英生を派遣し、国際社会に目を開く人材の育成を図ってきた。総会には役員や育英生、関係者ら約三十人が出席し、論文集の出版や新年度行事計画等について報告が行なわれた。

総会に先立って本堂「釈迦殿」で黒田理事長の導師により本尊上供が営まれ、続いて東隆眞理事（駒沢女子短期大学副学長）が「善光寺育英会の夢」と題して記念講演を行なった。その中で東理事は、これまでに育英生が提出した論文を集大成した論文集が刊行されること、また七月、韓国の名刹・通度寺の求めに応じて袈裟と『正法眼蔵』を贈り、袈裟の心を通じて袈裟興隆と平和祈願に寄与したことを報告し、「日韓仏教史に新しい意義をとどめるもの」と評価し

た。

東理事は育英会のビジョンについて日頃考えていることを語り、この育英会の性格・特色は善光寺の黒田住職の僧侶としての誓願と学問・修行などの経歴、さらには任職としての活躍と一体のものであるとし、駒沢大学大学院を経て雲水修行に入り、上座部仏教の僧としての修行体験をもち、アメリカの禅センターで海外布教にも努力した黒田住職の活躍ぶりを讃えた。

さらに東理事は、黒田住職が善光寺を創建し、外国人を含む二十人を超す弟子を養成、子息を上座部仏教で得度させるなど、斬新で自由な発想をもち、決断力と実行力をもった先駆者的存在であることへの敬意の念を表明した。

その上で、善光寺育英会の目指すところが仏教興隆と世界平和の実現にあることを強調し、この会が十年、二十年、三十年と年数を重ね、育英生を五十人、百人と輩出していくことがそ



のための大きな力となるとの確信を披瀝。「後ろ向きで観念的な仏教研究はやめて、もつと前向きな姿勢で仏教を学んでいかなない限り、仏教に明日はない」と訴えた。

記念撮影の後、客殿で總會に移った。はじめに佐藤俊明常務理事が挨拶し、「育英会が発足して八年目、第一回生を送ってから七年、昭和六十一年に第一回總會を開いてから六回目の總會となった。物事を継続するのは至難の業だが、石の上にも三年を二度繰り返した会だから基礎は盤石と思う。育英生の方々の日常の精進と活躍が、これから留学を望む方々の身近な参考となるので、いい手本をお示しいただきたい。同じことを三十年間続けて初めて世間も納得する道に到達できる。どうか一筋の道を歩むよう、決意を固めていただきたい」と励ました。

来賓としてニューヨーク・ニュージャージー港湾局アジア太平洋地区支所の南西アジア貿易

代表である坂井司氏、また育英会参与の東方学院講師・阿部慈園氏が挨拶し、議長に宮本延雄理事（鶴見大学歯学部事務部長）を選出して議事に入った。

新年度行事計画の中で、善光寺育英会の論文集が中外日報社の編集・印刷により十二月八日の成道会を期して発刊することが報告された。また育英生の一人であるフランス人の尼僧、バシユール・ルース・浄心さんが南フランスに禅堂を開き、来年六月に開単式が挙行されるため、黒田理事長らが参列することや、新しく推戴した顧問の人事が発表され、黒田理事長が日本パクナム会の会長に就任したこと、育英会の英文化名の変更などについても報告された。

坂井氏はとくに、インド大菩提会の招きにより福井県小浜の発心寺専門僧堂・原田雪溪堂長が一月下旬から二月にかけてインドを訪問し、坐禅講習会の指導を行なうことを発表した。こ

世界の九カ国に三十五人を派遣

海外留学僧派遣育英会第六回総会開く

派遣僧の論文集発行

海外留学僧派遣育英会の第六回総会が十一月二十三日午後二時半から、善光寺で開催された。同育英会は昭和五十九年一月、理事長である善光寺の黒田住職が善光寺開創十五周年の報恩行として設立したもので、八年目を迎える今日までに世界九カ国に合計三十五人の育英生を派遣し、国際社会に目を開く人材の育成を図ってきた。総会には役員や育英生、関係者ら約三十人が出席し、論文集の出版や新年度行事計画等について報告が行なわれた。

総会に先立って本堂「釈迦殿」で黒田理事長の導師により本尊上供が営まれ、続いて東隆眞理事（駒沢女子短期大学副学長）が「善光寺育英会の夢」と題して記念講演を行なった。その中で東理事は、これまでに育英生が提出した論文を集大成した論文集が刊行されること、また七月、韓国の名刹・通度寺の求めに応じて袈裟と『正法眼蔵』を贈り、袈裟の心を通じて東隆と平和祈願に寄与したことを報告し、「日韓仏教史に新しい意義をとどめるもの」と評価し

た。

東理事は育英会のビジョンについて日頃考えていることを語り、この育英会の性格・特色は善光寺の黒田住職の僧侶としての誓願と学問・修行などの経歴、さらには任職としての活躍と一体のものであるとし、駒沢大学大学院を経て雲水修行に入り、上座部仏教の僧としての修行体験をもち、アメリカの禅センターで海外布教にも努力した黒田住職の活躍ぶりを讃えた。

さらに東理事は、黒田住職が善光寺を創建し、外国人を含む二十人を超す弟子を養成、子息を上座部仏教で得度させるなど、斬新で自由な発想をもち、決断力と実行力をもった先駆者的存在であることへの敬意の念を表明した。

その上で、善光寺育英会の目指すところが仏教興隆と世界平和の実現にあることを強調し、この会が十年、二十年、三十年と年数を重ね、育英生を五十人、百人と輩出していくことがそ



のための大きな力となるとの確信を披瀝。「後ろ向きで観念的な仏教研究はやめて、もつと前向きな姿勢で仏教を学んでいかなない限り、仏教に明日はない」と訴えた。

記念撮影の後、客殿で總會に移った。はじめに佐藤俊明常務理事が挨拶し、「育英会が発足して八年目、第一回生を送ってから七年、昭和六十一年に第一回總會を開いてから六回目の總會となった。物事を継続するのは至難の業だが、石の上にも三年を二度繰り返した会だから基礎は盤石と思う。育英生の方々の日常の精進と活躍が、これから留学を望む方々の身近な参考となるので、いい手本をお示しいただきたい。同じことを三十年間続けて初めて世間も納得する道に到達できる。どうか一筋の道を歩むよう、決意を固めていただきたい」と励ました。

来賓としてニューヨーク・ニュージャーシー港湾局アジア太平洋地区支所の南西アジア貿易

代表である坂井司氏、また育英会参与の東方学院講師・阿部慈園氏が挨拶し、議長に宮本延雄理事（鶴見大学歯学部事務部長）を選出して議事に入った。

新年度行事計画の中で、善光寺育英会の論文集が中外日報社の編集・印刷により十二月八日の成道会を期して発刊することが報告された。また育英生の一人であるフランス人の尼僧、バシユール・ルース・浄心さんが南フランスに禅堂を開き、来年六月に開単式が挙行されるため、黒田理事長らが参列することや、新しく推戴した顧問の人事が発表され、黒田理事長が日本パクナム会の会長に就任したこと、育英会の英文化名の変更などについても報告された。

坂井氏はとくに、インド大菩提会の招きにより福井県小浜の発心寺専門僧堂・原田雪溪堂長が一月下旬から二月にかけてインドを訪問し、坐禅講習会の指導を行なうことを発表した。こ

れは、日本の禪に強い関心を抱く大菩提会のサ
ンガセーナ会長の依頼を受けて、坂井氏が善光
寺の黒田住職に相談したところ、黒田住職が全
面的な協力を約束したことから実現することに

総会挨拶

本日、第六回総会が開かれますことは、まこ
とに意義深く、よろこびに耐えないところであ
ります。

善光寺海外留学僧派遣育英会が発足して八
年、留学僧を海外に送り出してから七年、そし
て第一回生が帰国してきた昭和六十一年八月に
第一回総会を開いて以来、毎年回を重ねて今回
第六回を迎えました。

「石の上にも三年」といいますように、続け

なったもので、坂井氏はインドで禪を挙揚する
機縁として重要な意味を持つことの喜びを語つ
た。

海外留学僧派遣育英会
常務理事 佐藤俊明

ることは容易なことではなく、三年が最小の目
やすで、三年続かないようではお話にならず、
三年以上の継続によって事は成就するのであり
ます。その三年を二度繰り返し返したことは、善光
寺海外留学僧派遣育英会の基礎が磐石なものに
なった証拠であり、今後の発展が期待できると
ころまで来たを受け止めてよいかと思えます。

この七年間に、インド・スリランカ・タイ・
韓国・アメリカ・イギリス・フランス・ヨーロ

ツパの八カ国へ、まず中国・韓国及びフランスより日本留学と、計九カ国に三十五名の方を送っております。

昭和六十二年を振り出しに、私は理事長の同伴をして皆様方の過ごされた国、寺に足をはこび、皆様方の御精進のあとを偲んでまいりましたが、留学を終えられた皆様方がそれぞれの分野において素晴らしい御活躍をしておりますので、^ゞさすがは^ノと頼母しく、今後に大きく夢がふくらんでまいりました。折も折、第四回生のバシユー・ルース浄信さんが目下南フランスに禅堂を建てておられますが、来年六月に開堂のはこびなのでそのセレモニーにぜひ来仏願いたいという通知をいただいております。「桃栗三年、柿八年」といわれますが、育英会のタネが蒔かれて八年にして柿の実が遠い国フランスに結実したことはまことにうれしいこととあります。また今年、皆様方の応募論文

集が発行になります。実は本日お渡しできるようにと作業を督促してまいりましたが、残念ながら間に合いませんでした。出来次第お送りいたしますので、いましばらくお待ち願います。

これは今後善光寺海外留学僧に応募しようとする人たちに対するもつとも手近かな参考資料として価値あるものと思しますので、この皆様方もお心にとどめおかれ、活用をはかっていたきたいのであります。実はそれよりもつと参考になるのは皆様方の日常の御精進御活躍でありますから今後一層、活きたいお手本を示してくださるようお願いいたします。

さきに「石の上にも三年」と申しましたが、三年続けられれば十年続けられるものです。十年続けられれば三十年続けられます。「この道三十年」といわれますように、三十年続けなくては達人とはいわれません。禅門ではよく「更に三十年行脚し来たれ」「坐ることわずかに三十

年」などといひます。三十年の間、倦まず弛ま
ず精進を続けてこそ、日に新たに、日に日に新
たなる成長発展が約束されるのであります。

『永平広録』に「花開必結真実 青葉逢秋即
紅」という対句があります。心の花が咲けば、
つまり菩提心を起こせば必ず仏果菩提が結ばれ

第八回生決定

去る二月八日、第八回善光寺海外派遣留学僧
として五名採用、また継続二名を左記のとおり
決定いたしました。尚今年度は日韓交流の年に
いたし度く韓国の方々を主に採用いたしまし
た。なお、李俊秀師と落合隆師の継続が認めら
れました。

る。その相互関係は、青葉が秋になると紅葉す
るように、時節因縁がそのように運んでくれる
というのでありますから、それこれ思い煩らう
ことなく、ただ一筋に今後一層の御精進を願
いして挨拶いたします。

派遣先	宗派	氏名	国籍
カンボジア	真言宗	洪井修	日本
日本	曹洞宗	ペルキ・ローフ大玄	米国
日本	立正大学大学院	韓 仁徹	韓国
日本	大正大学	韓 京愛	韓国
日本	東北大学	権 来順	韓国
継続	曹洞宗	落合 隆	日本
タイ	ワットパクナム	李 俊秀	韓国
日本	東洋大学	李 俊秀	韓国

第九回海外留学僧募集について

目的

大学卒業相当以上の学力を有し、仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る優秀な人材を育成することを目的とする。

派遣先

世界各地

派遣期間

一年間とするも場合により延長するも可

給費

派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員

2〜3名

提出書類

- | | |
|-----------|----------------|
| (1) 論文 | (2) 保証人と連署した願書 |
| (3) 卒業証明書 | (4) 履歴書 |
| (5) 推薦書 | (6) 健康診断書 |

提出レポート

● 禅の国際化と私の役割

● 二一世紀の仏教と私の役割

● タイの仏教に学びたいこと

● 未来社会の仏教と私の役割

いずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五〜一〇枚

原稿不切 平成四年十二月十日

善光寺海外留学僧派遣育英会事務局

ミャンマー
慰霊の旅



シュエダゴンパゴダ





▲日本人墓地入口

▼居合わせたビルマ人親子も合掌

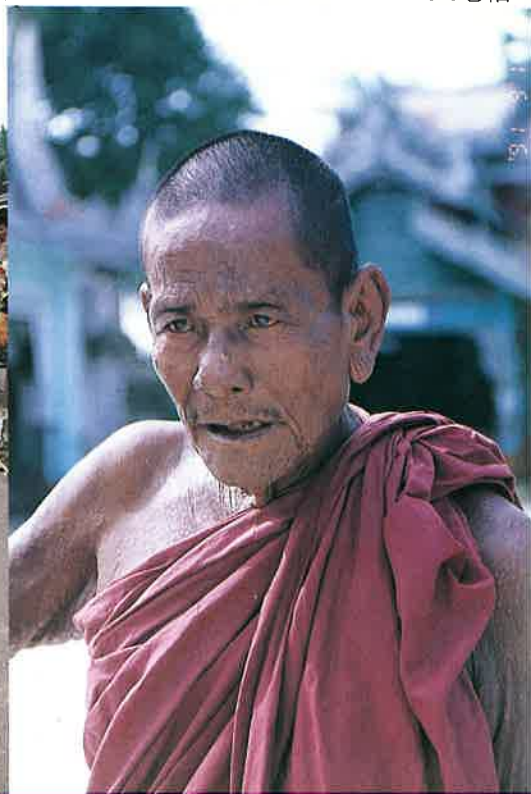




▲寝釈迦仏の前にて

▼ビルマの少年僧

▼ビルマ人老僧





パゴダの見える風景

ワット・バクナムにて

ご住職を囲んで右より佐藤老師、小谷氏、黒田方丈

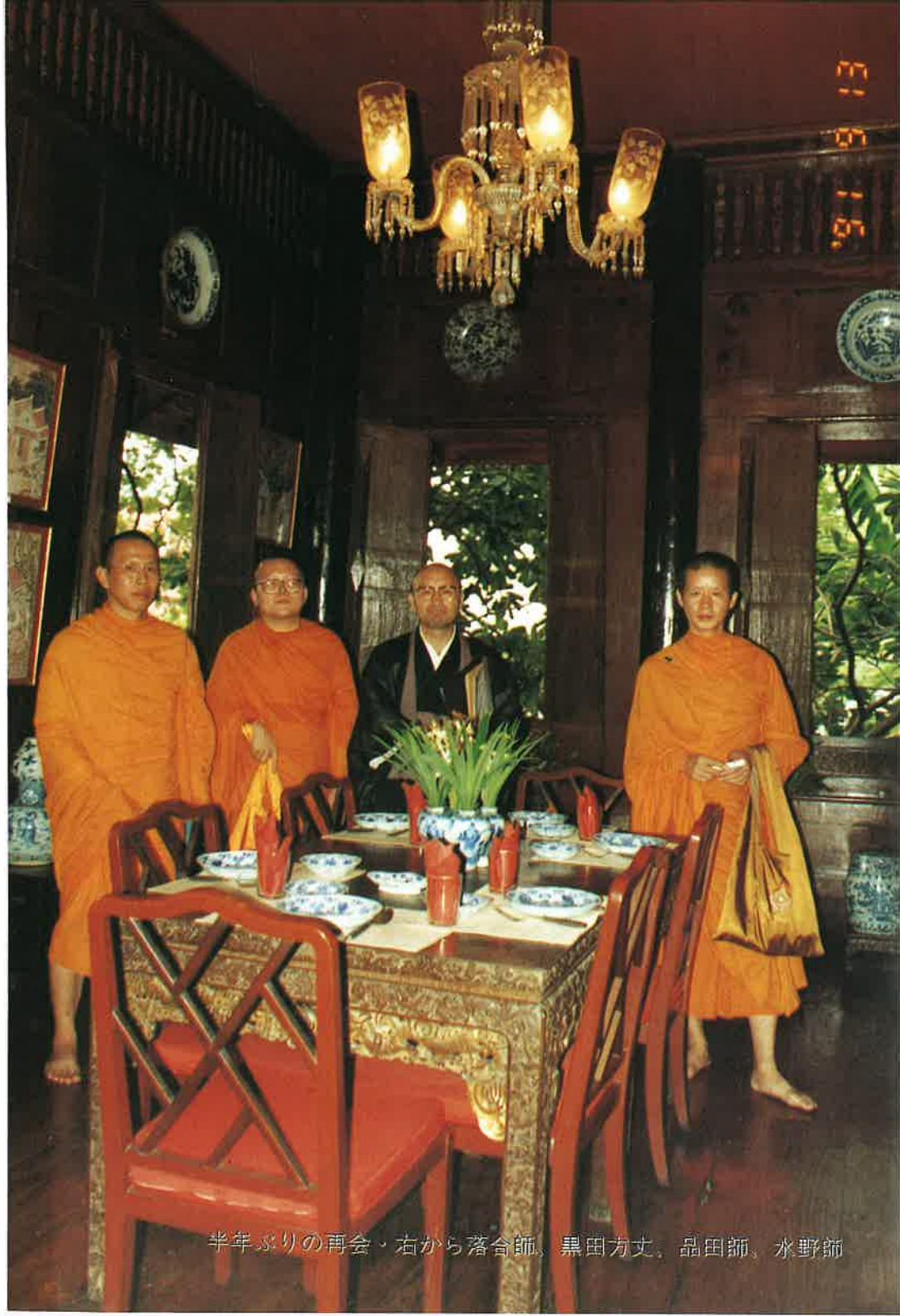


アーチャーに『成寿』誌をお見せする黒田方丈



ワット・パクナムの修行僧





半年ぶりの再会・右から落合師、黒田方丈、品田師、水野師

善光寺だより

日本パクナム会第八回総会開く

タイ国の上座部仏教寺院で得度修行した経験をもつ人たちが組織する日本パクナム会（石附周行会長）は第八回総会を十月二十六日午後四時から、東京・銀座の三笠会館で開催し、新会長に幹事長の黒田武志氏（横浜市港南区、曹洞宗善光寺住職）を選出した。

初めに黒田幹事長が経過報告を行なった。それによると、昨年三月の臨時総会で、タイのワット・パクナムに「日本文庫」を開設することを決め、六月の総会をワット・パクナムで開いて図書贈呈式、世界仏教徒連盟事務次長をつとめる小谷亀太郎氏の叙勲と在タイ五十周年の祝賀会、さらにカンチャナブリで戦没者慰霊法要

を執り行なうことを決議。しかしワット・パクナムの住職・副住職がアメリカ巡錫に出発するため急ぎよ予定を変更し、五月二十九日に東京・渋谷の東急インで、日本に立ち寄ったワット・パクナム住職に寄贈図書の目録を贈呈。次いで七月十八日、来日した小谷氏の祝賀会を銀座の三笠会館で開催し、石附会長から感謝状と記念品を贈呈した。

パクナムの「日本文庫」は、学者はじめ各方面の縁者からの寄付、仏書刊行の五社からの協力により図書四百五十冊を現地に送付。黒田幹事長は今年三月にワット・パクナムを訪れ、文庫の状況を確認したことを報告した。

また黒田幹事長は、藤井真水顧問（横浜市、高野山真言宗増徳院）が八月十一日に遷化したことに対し花輪を供えたこと、ワット・パクナムの副住職（パクナム会会員は親しみを込めて「アーチャン」と呼んでいる）が病に倒れたた

め先月見舞った様子では、だいぶ回復したが、今までのように世話をお願いすることは無理な状態であることなどを話した。

この後、役員改選が議題として上程され、冒頭、石附会長が辞意を表明、後任者として、同会創立以来の最高功労者である黒田幹事長を推したい旨を発言し、これに全員が賛成して満場一致で黒田氏の会長就任が決定した。石附前会長は顧問に就任し、幹事長には渡辺清孝氏が決まった。

会計報告の後、次回の総会をワット・パナムで開催することに決定した。なお、現在バンコクでダイドーマン・グループ十八店舗を運営している会員の福田千城氏も来日して出席した。

同会事務局は、横浜市港北区大豆戸町二四二〇の日蓮宗本乗寺内、電話〇四五（四〇一）九九〇三。

現代建築にフィット 墨彩画個展が好評

墨彩画家として知られる伊藤三喜庵氏の個展「現代建築空間への墨彩画」が十一月八日から十六日まで、東京・銀座の和光ホールで開かれ、好評を博した。風景、人物、仏画の三つのテーマに絞った新作六十余点は、伊藤氏の画境が一段と広がり、深みを増したことを示した。

会場には、墨と顔彩、和紙と毛筆という日本的な画材を使いながら、欧米や東洋の風物、あるいは裸婦などバラエティーに富んだりモチーフの作品が並んだ。中でも釈迦の誕生から涅槃、仏像など仏教をテーマにした仏画が異彩を放った。同展二日目の九日夕刻から会場でレセプションが催され、建築家で画家という異色の経歴をもち、七十七歳の喜寿を迎えて衰えを知らない伊藤氏の若々しく意欲的な創作活動に対し、建築界や宗教界の友人・知人などから賛辞と激

励の言葉が贈られた。

冒頭、伊藤氏は「皆さんの激励により充実した人生が送れる。十六歳の時から油絵を描いたが、親父が絵描きではメシが食えないというので建築をやった。それも後継者に譲ったので、こうやって若い頃の夢を追っている。墨絵の二千年の伝統を抽象でなく写真で現代に生かし、現代建築にフィットするよう研究を重ねた作品だ。すべて実験と思っている」と挨拶。

美術評論家の水上杏平氏は「旺盛な創作意欲に感動した。視野の広い、モチーフの豊富な、しかも水墨を新しい角度から捉えた作品だ。昔から建築と絵画は切っても切れないもの。その第一人者が伊藤先生ではないか。絵描きに年齢はない。何歳までも素晴らしい作品を発表していただきたい」と讚えた。

また、千葉県柏市の曹洞宗龍光寺住職佐藤俊明氏は「仏教では、人はみな生まれながらにし

て仏心をもっているという。伊藤先生は素晴らしい絵心をもっておられる」と語り、伊藤氏が檀徒総代をつとめるなど格別縁の深い横浜市の曹洞宗善光寺住職黒田武志氏は「ますます世界的に活躍されていることを先生の自称応援団として喜ぶ」と祝意を表して乾杯の発声を行なった。

これらに対し伊藤氏は、最後に「倒れるまで美の創造を極め尽くして参りたい」と決意を披瀝し、来場の人々に謝辞を述べた。

米国人教師が剃髪・得度

横浜の山手学院高校で教鞭を執っているアメリカ人教師ペルキ・ローフ・エージン氏（日本名＝鈴木朗夫）が十日、横浜市港南区日野町の善光寺（黒田武志住職）で剃髪・得度し、黒田住職から「大玄」の僧名を授与された。ペルキさんはミネソタ州立大学の日本語学科を卒業



し、日本で市邨学園高校や愛知淑徳大学高校を経て現職にある。大の日本びいきで、日本の精神文化にも造詣が深く、仏教の素晴らしさに触れて、いつしか得度・出家を決意し、それ以来、得度の師を探し求めていた。縁あって黒田住職の存在を知り、いよいよ得度式を執り行なったもの。時期をまつて教職を退き、一人の修行僧

として雲水の身となり、金沢大乘寺の僧堂へ安居したい考えを示している。

得度式には、山手学院中学・高等学校の猪俣史郎校長、黒田住職との縁をつないだ茅ヶ崎市の玄珊寺住職福田素也氏、山手学院の留学生二十余人らが参列した。善光寺は日本から海外への留学僧や海外からの日本留学生を援助する育英事業を行ない、またタイ・上座部仏教の得度式を行なうなど国際的な交流活動を展開していることで知られる。それだけにペルキさんの得度式も分かりやすい言葉で行なわれた。「今ここに発願の善男子ペルキ大玄あり。大玄よ、心静かによく聴き奉るべし。この日すぐれたる因縁により、み仏の弟子となり、釈迦牟尼仏より代々伝えたまいしみ教えを学び、正しきみ仏の道を永く受け嗣ぐために得度の式を行なわんとす」。こうして剃髪、坐具・衣鉢の授与、続いて菩薩戒法、血脈が授けられ、得度・授戒を円成

すると、参列した留学生たちはその意味を理解でき、仏教の素晴らしさを知ったと感動の声を上げた。

原田雪溪堂長インドへ

福井県小浜の発心寺専門僧堂・原田雪溪堂長は、インドのマハ・ボデー・ソサエティー（インド大菩提会）の招聘により、一月下旬から二月初めにかけてインドを訪問することになった。十一月二十三日、横浜市港南区日野町の善光寺（黒田武志住職）で開催された善光寺海外留学僧派遣育英会の第六回総会で発表されたもの。原田堂長の訪印については、ニューヨーク・ニュージャーザー港湾局アジア・太平洋地区支所の南西アジア貿易代表である坂井司氏が大菩提会から協力依頼を受け、実現のための具体的な手続き等について、善光寺の黒田住職に相談し、黒田住職が全面的な協力を約束したことに

より決定した。

大菩提会のサンガセーナ会長は、かねてから日本の禅に強い関心をもっており、また坂井氏の斡旋で原田堂長のインドにおける提唱の英訳本『平常心』をインドの仏教関係者に配布したところ、これが大きな反響を呼んだことなどから、原田堂長をぜひインドに招聘したいと坂井氏に協力を求めていた。坂井氏は親しい善光寺の黒田住職に相談し、黒田住職も実現のために協力を惜しまないことを約束した。現在までに決定したところによると、原田堂長は一月二十七日に成田を出発し、二月十二日に帰国する。インド滞在中、二月一日から八日まで、大菩提会での坐禅講習会に出席し指導する。公開講演会の開催も計画されている。インドでの日程に続いてマレーシアにも立ち寄り、仏教関係者と交流を図ることにもなるようである。

ご寄付御礼

〈海外留学僧派遣育英会〉

トヨコグループ殿 百万円
 東京 匿名殿 百万円
 新美 昌道殿 二十万円
 細井 勉殿 二十万円
 保坂 俊司殿 十五万円
 越石 重博殿 十万円
 阿部 慈園殿 十万円
 遠藤 清勇殿 十万円
 中村 淳子殿 十万円
 越石 商店殿 十万円
 瀬之間 政勝殿 十万円
 宮林 昭彦殿 十万円
 水野 孝道殿 五万円
 搦田 力殿 五万円
 金田 孝子殿 五万円
 箱根福寿院殿 五万円
 小林 長松殿 三万円

小松 スエ殿 三万円
 福田 素也殿 三万円
 大寺 忠章殿 三万円
 浅井 宣亮殿 三万円
 瀧澤 武雄殿 三万円
 林 秀穎殿 三万円
 佐藤 功岳殿 三万円
 大場 頼子殿 二万円
 鈴木 多加殿 二万円
 渡辺 記代殿 二万円
 天 祐 寺殿 二万円
 山本喜代司殿 二万円
 黒河内貞子殿 二万円
 岩波 道俊殿 二万円
 村松 悦朗殿 二万円
 星野 一男殿 二万円
 太田 好信殿 二万円
 井上 葉智殿 五千元
 越前 竹子殿 五千元
 匿名 名 五千元

〈成寿賛助〉
 富永 豊重殿 十万円
 赫多 正円殿 四万円
 黒田 輝三殿 三万円
 岩波 道俊殿 三万円
 水野 孝道殿 二万円
 大川 英夫殿 二万円
 須田 道輝殿 二万円
 伴 鉄牛殿 二万円
 高源 院殿 二万円
 安藤 康哉殿 二万円
 村上 博中殿 二万円
 三村 佛天殿 二万円
 桜井 和子殿 二万円
 池田 魯参殿 二万円
 大貫 叶子殿 二万円
 能光 寺殿 二万円
 吉原木工所殿 二万円
 横田佳代子殿 五千元
 船附 理人殿 五千元

読者からのお便り

幾つもの表情を映し出す仏像。タイ国に入国し、私は、僧侶として、自分の心を仏像に映し出し、お勤めをしています。心を映し出す事によって仏像から仏様へ変わる様な気がします。第七回育英生としてタイ国に派遣され、テーラ・ヴァダの一員となり、少しづつ仏像に対する考えが変化している様です。この様な機会を与えてくださった方丈様、又、海外留学僧派遣育英会の皆様へ感謝の意を申し上げます。皆様のご期待に応えられるよう、精進并道いたします。

雨安居 ワット・パクナムにて

水野 克彦 百拝

いつも仏教を通じて海外との交流に御努力なされ、尊い事と感謝申し上げます。特に海外に在って、

何かとサポートを受ける喜びは、いつまでも心に消えぬものがあるとう存じます。成寿十七巻有難うございました。

皆々様のご健勝を祈りあげます。

東京都 真野 龍海

成寿山善光寺開山棟庵白純大和尚十三回忌報恩の仏事を勤修されました写真を見し、大圓方丈と、岩本昭典老師の間には、遺風烈々として感、新らたなるものがあります。大圓方丈の長年の誓願である学問が自分の研修だけでなく、国境の枠を超えて未来につないでいく努力はすばらしい。九方国三十四人派遣したこの無尽の花が開花されると思う。もつと日本の国民一人一人がめざめる時である。只今、写真と方丈の御文章を拝見して一文字の中に滲み出ています。時節柄、お身体にご自愛して下さることを祈念申し上げます。

東京都 林 博明

育英生曹良淑さんの論文を読ませて頂き、自分を反省して慙愧千万に思っております。九月は「反省の月」とか申します。開枕の間近い人生になつて警鐘を打たれた感です。有難うございました。

福井県 木崎 浩哉

其の後もお元気で御精進、御活躍の様子にて心よりお喜び申し上げます。本日は成寿を御恵送頂きまして誠に有難うございました。立派な写真、充実した内容の編集に深く感銘を覚えております。貴師の御活躍を見るにつけ、地方の寺で唯、葬式、法要の司式のみで明け暮れている田舎の沈滞した寺院の姿にはがゆい思いを致しております。余り求道、精進の熱意を持たない檀信徒にも原因もあると思ひますが、今後共御活躍の程お祈り致します。

山口県 松岡 陸雄

毎号新たな貴山のご発展の記事に接し、益々感銘致しております。特に今回はご開山様のご生前を偲び感無量なるものがありました。拙寺へも再度ご来駕いただいております。貴老師には何卒ご法体ご自愛專一の上、ますますご活躍の程をお祈り申し上げます。

千葉県 椎名 宏雄

方丈さんの汗の匂う大事な成寿拝読させて戴きました。特に若い六人の方の、論文は何回も読みかえし若人のたくましさを、羨ましいかぎりです。と共に早くも七年になるのだから、第一回め派遣僧（仏教興隆に尽くされた方）卒論近況も知りたかった。先のない年寄りのたわごとな。何はともあれ益々の御繁栄心から喜んで居ります。

横浜市 伏見 暉

この度は成寿十七号をご恵送下さ

れ、誠に有難うございました。先生のすばらしい世界観にもとずく、仏教徒としてのご努力は、広く海外に根付き、必ず花開くことと存じます。益々のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます。

参議院議員 齋藤 文夫

成寿十七号をお送りいただき有難うございました。いつも鞆に入れて車中で読んでいる主人でしたので早速、仏前に供え報告しました。亡き主人に代りまして拝読させていただきました。益々御活躍の方丈さまの御姿を誌面でお目にかかれて涙が出てしまいました。遠いお方になりませぬ様みちのくの地よりお願い申し上げ御礼の挨拶とさせていただきます。

岩手県 西館 絹子

方丈様にはビルマ訪問予定のこと喜んで居ります。日緬親善を深め又、

ビルマ大陸に眠る十八万の英霊が喜ぶ事と存じます。私事で恐縮だが昭和十七年よりビルマ戦場に二十二年六月まで駐屯した。結果は悲惨な敗北であった。ビルマ派遣軍三十万、其の内十八万戦死した。戦跡を巡拝して激戦地跡より石を持ち帰って供養塔を建てた。

戦友よ安らかに：合掌

横浜市 大場 貞蔵

いつもながら仏教興隆の為に御努力されているお姿を思い浮かべ、心から合掌の念に絶えません。私如きに対しまして、お心を掛けられ毎回「成寿」を御送り下され、有難く拝読させていただいております。善光寺様に対し、なんのお力にもなれず、心苦しく思つて居ります。今日は母の十三回忌を無事に済ませて頂きました。お寺にも多少の供養を致しました。ふと思ひ付きましたのは、善光寺様の事、日頃の御親切にはとう

てい足りませんが、少々の献香料を御送り致し、日頃の御恩報じと致し度く存じますので御笑納下さい。末筆ですが今日の仏教界に大切なお方です。御自愛下さいませ。寺門の発展をお祈り申し上げます。

栃木県 鶴田 力

袈裟というとお坊さんの制服の一つ位にしか理解しておりませんでした。方丈様のご教示により袈裟には深い意味がこめられていることを知りました。ひとくちでいうと正伝の仏法を興隆し世界の衆生をすくおうという誓願がこめられているといつていいでしょう。それゆえこのたび方丈様が世界の国々へ袈裟をおくるという大誓願をたてられたことは、海外留学僧派遣と同じく仏法興隆のためにつくすということなのです。

(中略)

方丈様は海外留学僧派遣によって仏法のための人作りを、袈裟によつ

て心の浄化、欲望の浄化を実践されました。新聞によるとローマ法王ヨハネ・パウロ二世は世界八億のカトリック教徒に回勅を発表し、先進資本主義国家のおごりと功利主義の傾向を批判しきびしく戒めました。

方丈様はもつと広く世界のひとびとと五十億二千四百万人へ呼びかけたのです。ただ呼びかけたのではなく袈裟をおくるという実践を通して世界のひとびとの心に訴えたのです。釈尊は「悟りへの実践」によって仏法をひろめ衆生をすくおうとしました。この明快な実践の奥に深い真理があるので、ただ宗教哲学や難解な教義を説いて回られたのではないと思えます。方丈様もつねに釈尊と同じく明快な実践、即ち海外留学僧派遣、袈裟を世界へおくる行動によって仏法興隆のために尽力されているのです。しかも欲望の否定という暗い陰気な教えではなく、欲望の浄化という明るく肯定的で向日性の教え

を実践を通して示しております。(中略)

生きている以上生存欲はあります。といって自分の生存欲のためにまわりを侵略することは許されません。侵略は汚染された欲望でありこれを浄化することで和をもたらすことができるでしょう。方丈様はローマ法王にさきがけて、仏法興隆と世界平和のために聖なる実践をはじめられました。われら檀信徒は方丈様を誇りとして、自分のできる範囲で協力させていたがこうではありませんか。袈裟を身につける仏教徒の初心に立ちかえって、方丈様をおたすけしていきたいとせんえつながら思うものです。

横浜市 赤間 義徳

Last July, we visited Republic of Korea, where was long time ago the birthplace of Japanese Buddhism. We offered Tsudo Temple our denominational surplice to be exhibited. I think that was very worthwhile to promote friendly relations between Japanese and Republic of Korea's Buddhism by blessings of our surplice.

Then last November, I was installed as president of Japan Paknam Society, the association of people who practiced asceticism not only at Wat Paknam, but also at the upper part of Buddhist temple. The purposes of this association are to propagate proper understanding of Buddhism, and to promote Buddhist cultural exchanges, those are also the aims of the Zenkoji Scholarship Foundation for Buddhist Study Abroad. I want to contribute to friendship with Thailand's Buddhist colleagues.

Next, I specially want to tell about French nun L. Joshin Bachoux. She practiced asceticism at

Daibosatuzan Zuigakuin in Yamanashi prefecture as the fourth priest of the Scholarship. After returning to France, she endeavored to establish a Zen Buddhist seminary in France, and this July, which will be opened. It is very happy for me to have foothold of Buddhist friendship in far-off European country.

We've tried to broaden the Zenkoji Scholarship Foundation for Study Abroad all over the world. So we published the first volume of essays by 34 priests's manuscript for application to scholarship. This will be the most useful material for the future applicants. We hope promising priests to apply and to obtain the desired results.

編集後記

▼暖かさを感じる季節となりました。

皆様には愈々ご健勝のことと存じます。成寿十八号をお送り申し上げます。

▼善光寺海外留学僧派遣育英会には日頃、各方面の皆様から絶大なるご支援を賜り、関係者一同感謝に堪えませんでした。昨年第七回生でその数35名に達しましたので、育英生の応募論文をまとめて『善光寺海外留学僧派遣育英会論文集 Vol.1』（頒価・税込千五百円）を十二月初旬に上梓しました。

▼十一月にはかつて留学僧として海外経験のある四氏より寄せられた近況報告、レポート等をまとめて『成寿特別号』を発刊。禅の国際化へ活眼を開き、明日の宗教人を育てる地

道な努力が少しづつ花開いてゆくのを感じている昨今です。

▼今回のカラーグラビア「シユエダゴン・パゴダ」の写真は樋口英夫先生文は特別に杉江幸彦先生にお願いいたしました。また、高野義郎先生には特別寄稿をいただき、写真とともに別格の読物となりました。各先生には誌上よりお礼申し上げます。

▼仏師・錦戸新観師との鼎談は大変心に残るものでした。「『精進を築とし、精進を永遠の命とす』を座右銘として彫り続けてゆきたい」とおっしゃる錦戸師の静かな話し声の中に、一木に込められる仏師の魂を見た思いです。私たちは尊像から、心に響く何かを感じ取ることが大切です。

▼第八回海外派遣留学僧が決定（161

頁参照）しました。次号で応募論文を掲載する予定です。

▼四月にカンボジアのアンコール・ワットに参ります。カンボジアは十二年来の内戦がやっと終結に向かい各国から復興の援助の手が差し伸べられようとしています。クメール文化の頂点といわれるアンコールワットを訪れ、その栄華と崩落の危機にある現状を誌上でお伝えいたします。

▼春彼岸も間もなくです。ご先祖様を尊び、日々精進を重ねて、一日一日を大切に生きて参りましょう。

成寿 第十八号

平成四年二月十日発行

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野町一六〇四

電話 〇四五（八四五）一三七一

印刷所 神奈川新聞社出版局





横濱善光寺